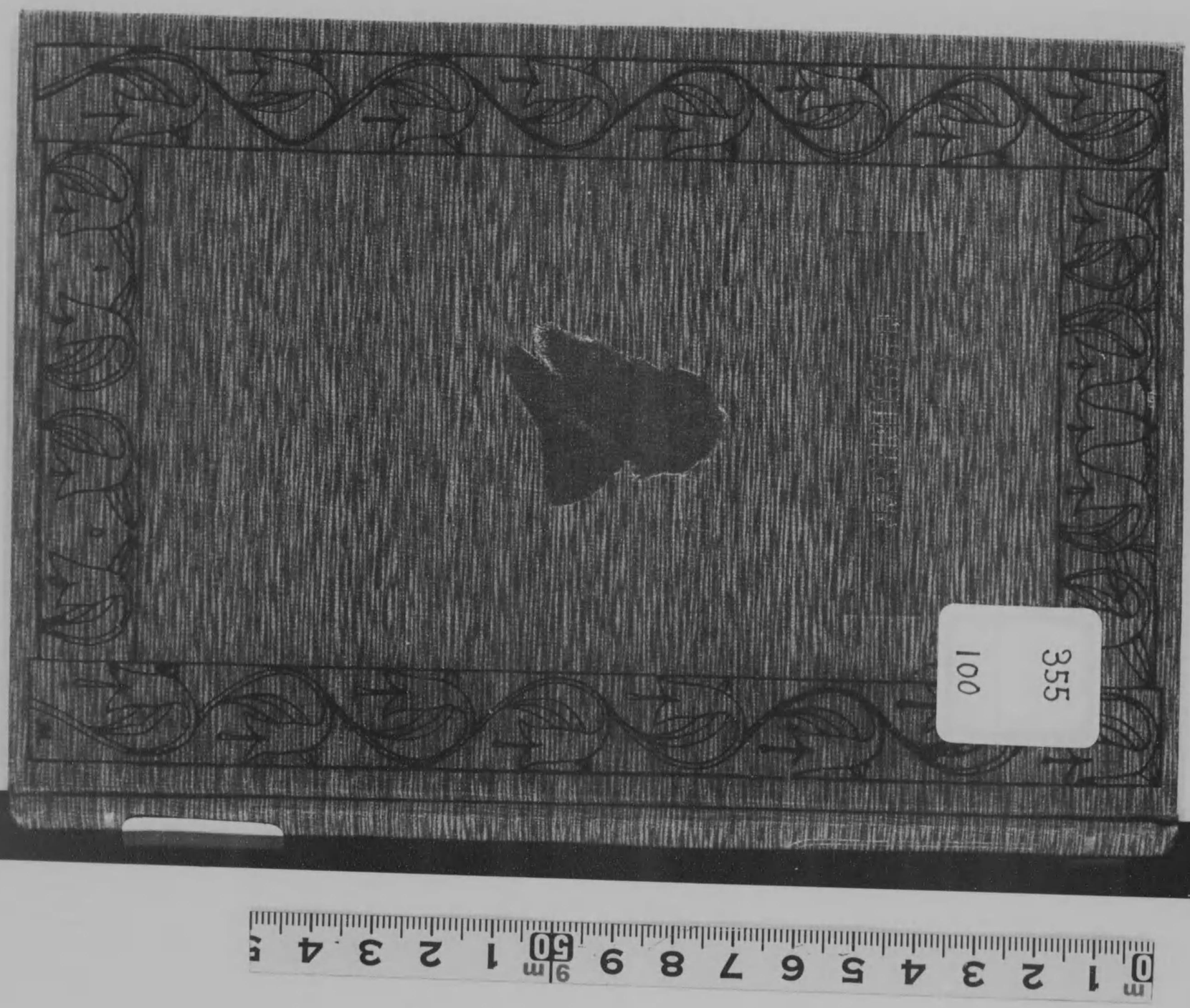
355
100

480

ツウルゲニエフ著

宮原晃一郎譯

講演論文及び書翰

春秋社

355
100

耶武島有・庵晉田内
選 藏
庫文念記翁杜
—2—

77W26994

譯者序

小說家として、又詩人としてのツウルゲーニェフは殆ど完璧に近かつた。吾人は敢て近かつたといふ、何ぜなれば眞の完璧といふことは人間には望まれないものであるのだから。然し彼は論文家としては殆ど聞えるところがない。勿論彼は創作の人であつた、評論の人ではなかつた。彼が浩翰なる全集もその大部分は小說である。是をトルストイが大小數百篇の論文を書いたに比らぶれば、殆どいふにも足りない。ツウルゲーニェフの女性的一面が此處にも窺ひ知らるゝのである。然しながら彼は決して一つも論文を書かなかつたかといふに、さうではない。又一つも價値ある評論をしなかつたかといふに、さうではない。彼が創作家として秀でゝゐたと同時に、批評に於ても犀利なる眼光の所有者であつたことはフロオベルも驚嘆してゐる。彼の藝術はその餘りに渾然たるが爲めに、時にテーマや概念が、平凡な眼には看取し難き事があるとはいへ、彼は決して單なる美辭佳句の驅使者ではなかつた。彼の作は卽興的のものではない。淺薄なる意味に於ての Art for Art's Sakeによつて出來たものではない。彼の頭には哲學も

あれば、社會學もあつた。それを一箇の立派な藝術觀に基いて作りあげたものが彼の小說であり、詩である。彼の論文はその數から云へば甚だ尠ないが、彼の思想を窺ふ上にはそれだけでも充分である。

譯者はツウルゲーニェフについては餘り多くは知らぬが、只露語を聊か解するところから、原文より譯するの外、詮方なき場合に際し此任に當つて恐縮してゐる。然し及ぶだけ完璧を努めたことだけは安心して言へる。次の諸書は飜譯に當つて、大に參考となつた。

Kropotkin: Ideals and Realities in Russian Literature.

G. Brandes: Indtryk av Rusland.

K. Waliszewski: Litteraire Russe.

E. Haumant: Ivan Turgenev.

ツウルゲーニェフ小傳

イヴアン・セルゲーヴイチ・ツウルゲーニェフは餘りに我々に親みの深い偉大なる作家である。

彼は一八一八年十月二十八日、モスクヴを去る西南二百餘哩のアリヨル洲スパッスコイエの一貴族の家に生れた。多くの露國文學者がスコット人、プロイス人、或は黑人の血をすら雜へてゐるやうに、彼は其先祖に韃靼人をもつた。彼は長兄ニコラスと共に、父母の膝下に在つて、外國人の教師に就いて自宅で教育を受けたが、後、長兄ニコラスが軍人志願をするとき、イヴアンは文官になされる爲めに、モスクヴへ送られ、一八三三年、年十五で、モスクヴ大學に入つた。その翌年父の死去にあひ、母がペテルブウルグに移つたので、大學もその方へ變つた。一八三八年此處の大學を卒業してから、彼は海外漫遊に出かけたが、歸つてからツマラヌ小役人をしばらく勤めた後、母の意に反して文學者の群に投じた。之が爲め母子の間が非常に疎隔して、後イヴアンが海外に漂浪中、母は遂に仕送りを斷つまでに至つた。

イヴアンの風彩は本書中にゴンクウルやモウパッサンの記するところによつても知られるとほり、非常に長大な身幹をもつた巨人で、しかもその顏には無限の慈悲を湛えてゐた。彼は『曠野のリア王』の中の一人物の言を借りて、自分のことを斯う書いてゐる——

『私達は髮が黃金色で、眼は澄み、顏は色白く生れついてゐた』と。

ツウルゲーニェフの文學的素質は、その外貌程明かに先祖の遺傳を表示してゐない。彼の先祖にいろ〳〵な人のゐたことが物語られてはゐるけれども、これぞといつて、イヴアンの發揮した天才の始原を突き留めることはできない。又少年時代の家庭敎師であつた佛人も獨人もいづれも平凡な人間達で、彼の將來に影響するやうなものは一人もゐなかつた。

彼が始めて文學的作品を讀み出したのはモスクヴの大學に入つてからで、彼はそこにヅウベンスキイと稱ぶ新たな敎師について、カラムジインやバチウシユコフ等初期の露國文學者の作品を讀み始め、次には獨逸哲學の熱心家で、世に不明な詩人クリウシユニコフに師事したことが後年の素地の幾分を爲したである。

ツウルゲーニェフは後に至つて、ペテルブウルグ大學で自分は何事もしなかつたといつてゐる。然し以上兩箇の大學が彼に大影響を與へたことは言ふ迄もない。ヘーゲル哲學の流行時代

で、隨分之に熱中した樣は『ルウヂン』の中にある左の一節によつても分る——

『五六人の青年等が、燻ほる燭臺を一つ圍んで、下等な茶を飲んだり。駄菓子を喰つてゐる樣を想像して御覽ない。若し貴下が、議論に聽入つてゐる私共の顏を御覽になつたらどんなでしたらう！私共の眼は輝き、私共の頰は燃え、私共の胸は波を打ちました。私共は神を、眞理を人間の將來を、詩を語りました……始終私共は馬鹿を申しました、けれどもそんなことが何でせう！』

モスクヴやペテルブウルグ大學で、彼が修めた學科は博言學であつたから、彼は英佛獨の語は殆ど自國語に於けると同樣、流暢に讀み、書き、且話したが、ペテルブウルグの大學を卒業すると間もなくベルリン大學に入つて、其處でヘーゲル哲學の講義を聞いたことは本書『ビュリンスキイの回想』の中にも、自身で明記してゐる。

彼が自由思想は夙に幼時に芽を發して、後、彼が父方の叔父ニコライ・ツウルゲーニェフによつて發達せしめられた。彼がスパッスコイエの家庭には二人の變つた人物が雇はれてゐた。卽ち一人は哲學的理想家であり、他は虛無主義 Nigilism の名を世間が知らぬ間に、既にその主義を抱懷してゐたもので、ツウルゲーニェフが、後年に作つた『ブウニンとバブウリン』は此

二典型によつて描いたものだといふ。けれども之よりも大きな影響を與へたのに彼の叔父であつた。

ニコライ・ツウルゲーニェフは一八二五年十二月十四日、ニコライ第一世の卽位式を機として、武力に訴えて立憲政體を樹立せんと計畫して失敗した十二月黨員 Dekabristu の一人であつて（本書中にあるツウルゲーニエフの書簡の註を見るべし）事成らざるや、辛くも身を以て外國にのがれ去つて、後異境に客死した。ツウルゲーニェフはベルリン遊學中に此叔父の感化を受けて、終生それから罷脫することが出來なかつたと云はれてゐる。

彼が自由思想を持する結果は、當時未だ旺盛をきはめてゐた農奴制に對する反感となり、彼は自家につながるゝ美しい農奴の娘を愛して、遂にそれに女の子を生ました。此農奴の女は遂に文字を解することが出來なかつた由である。斯る次第で飽までも貴族的な母とは常に相容れなかつたのであつた。ところでイヴァンは二十二歳の夏、自國に歸つて、母を鄕里に見舞つた。そのとき母親はイヴァンに對する敎訓として、當日は殊更に全家の奴僕は悉く呼び寄せてバルコニイ、玄關口と、そこらぢうに立ち並らばせ、イヴァンの馬車が到着するや否や、まるで國王の歡迎でもするやうに、ウラーを大呼せしめた。イヴァンはそれを見ると非常な侮辱を

感じ、憤然として卽座に馬車を引き返させ、漂然として佛蘭に去つてしまつた。

彼が文學に指を初めて觸れたのは二十三歳のときで、『パラーシャ』と稱ぶ詩集はその處女作である。彼は此詩集を當時文壇の鬼才ビェリンスキイに贈ると、非常にその賞讃するところとなつたのである。當時彼が面目をほどこした樣は本書『ビェリンスキイの回想』によく書かれてある。

次には一八四六年『ホーリとカリヌイチ』の短篇が出て、彼の文人としての基礎を定めた。是はその後、五ヶ年間に書きあげた二十五篇の小品を蒐めた、有名な『獵人日記』の初篇である。露國一地方の自然の美しい光景と、その間に點綴せられる悲慘な農奴の生活狀態とが活畫となつて、讀む者の眼前に展開せられる。元より此作は文學として不朽の價値を有することは敢て言ふを用ゐないが、之が農奴制の廢棄に貢獻した力は頗る多大で、當時なほ皇太子であつたアレキサンドル第二世は、是を讀んで、『農奴の實際狀態を知り、之を解放しようと決心した』と、親しく告白したといふ程である。

彼の母は一八五一年に死んだので、永らく佛蘭西に客寓してゐた彼は一度び故鄕に歸來して自家一切の農奴を解放したが、その翌年、たまたまゴーゴリが逝いたので、一篇の哀悼文を草

して、發表すると、その文は別段危險思想を含むものではなかつたけれど、『獵人日記』の大膽なる觀察に、少からず憤つてゐた當路者は、直ちに之を機會として、彼を處罰した。此等の事も亦本書に掲げた彼の書簡に詳しいから、此處では敢て多くを述べないことにする。

彼はスパッスコイエの幽閉がとけるや否や直ちに佛蘭西に行き、六十歳のとき更に祖國に歸つたが、痛風を持病に惱む彼には、寒い祖國は足をとゞむべき場所でなかつた。のみならず、自由を重んずる彼にとつては、精神的にも其處は安住の地でなかつた。で青年等には歡迎を受けても、彼は再び佛蘭西へ去つた。

彼はパリの近郊ブウジイヴルの親友ヴィアルドォ及一家の別莊に往つてゐたが、遂に脊髓癌の爲め、六十五歳を以て歿した。遺骸は遺言に基き、ペテルブウルグのヲルコフ墓地に、親友ビェリンスキと列らんで埋葬せられた。

ツウルゲーニェフの作品の文學的効果や、そのうちに包含せられる思想を論究するは甚だ興味あり、有益なことではあるが、此處にはその餘裕もなく、又自分はその任に堪えない。彼の著作は數多いが、その重なるものをあぐれば……

『獵人日記』『ルウヂン』『貴族の家』『父と子』『煙』『處女地』等の長編『曠野のリア王』『春の水』

『ブウニンとバブウリン』『妙な話』『ァ、シャ』『ファウスト』『餘計者の日記』『散文詩』等である。

ツウルゲーニェフは最初は詩人として、次には劇曲家として、文壇の前途を踏み試みたがそれは成功しなかつた。又彼は餘りに多く英獨のローマンチックに感染てゐた。彼が成功の畑は小說である。吾々は彼の小說について、よき理解をもつと思はるゝクロポートキンの言を以て此小傳を終らう。

『彼の小說の藝術的構造と完成及び美的方面に於ては、ツウルゲーニェフは恐らくは第十九世紀の最大小說家であらう。然し彼が詩人的天才の主要特質は、彼が是程迄豐富に所有した美感に存するばかりでなく、その創作物の高度なる智的內容にもよる。彼の小說は彼の觀察に上ほつた普通の人間の典型や、人生の或る特殊な潮流や、又は偶發事件やを、出放題に取扱つた單純な物語ではない。その小說たるや互に密接な關係を保有し、各連續せる時代に於て、彼等自身の極印を押捺した露西亞の主要な智識的典型を表示してゐる。』

Ideals and Realities in Russian Literature.

目次

譯者序……一―二
ツウルゲーニェフ小傳……一―七

講演と論文

解題……一―四
ハムレットとドンキホーテ……二
ビェリンスキイの回想……二七
アルバノ及びフラスカティへの旅……九七
『父と子』に就いて……一二三

書翰

ツウルゲーニェフと佛文壇……一三三
マダム・ヴィアルドオに宛てた手紙……一五〇

ギユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡……一六五
マダム・コムマンヴィル宛の書簡……二七六
ジョルジュ・サンド宛の書簡……二八七
セントブウヴ・テオフィル・ゴーチエ、シャルルエドモン、テーヌ、及びルナンに宛てた書簡……三〇五
シャルル・エドモン宛……三〇九
イポリト・テーヌ宛……三一三
エルネスト・ルナン宛……三一七
エミイル・ゾラ宛の書簡……三二〇

講演・論文・及び書翰

ツウルゲーニェフ著
宮原晃一郎譯

解題

ツウルゲーニェフの小說は、既に多く日本語に譯せられたし、その英譯も廣く讀まれてゐる。然し此處に揭げる彼の講演『ハムレットとドン・キホーテ』は、その甚だ高名なるにも似ず、讀んだ人の極めて尠かつたのは英獨佛の諸國語に移されたものは稀覯の書たるが故で、從つて邦語にも完譯がなかつたのであらう。然し此文こそはツウルゲーニェフを讀む人の到底見逃すべからざるものである。クロポートキンは之について斯う言つてゐる——

『ツウルゲーニェフのあらゆる作物を理解すべき眞の鍵は彼の嘆賞すべき講演ハムレットとドン・キホーテの中に見出される……私はツウルゲーニェフの著述の如何なるものよりも、此講演が最もよく我々をして、此大作家の眞哲學を窺知せしめるものと考へる云々』

譯者は之以上蛇足を附加するの必要を認めないが、此講演は單にツウルゲーニェフ自身の人生哲學を示すと共に、又世界不朽の名著たるシエークスピアのハムレット並びにセルヴンテスのドン・キホーテの眞價の上に振り照らさるゝ炬火であり、更に人生に關して我々が大に訓へ

られ、深く考慮せしめらるゝ偉大なるサムシングを包含せるものであることだけは、是非とも言ひ添へて置き度い。

ハムレットとドン・キホーテに次いで、重要なものは、ツウルゲーニェフが自作『父と子』に對する當時喧囂を極めた世論に對する辯駁の一論文『父と子に就いて』である。『父と子』はツウルゲーニェフの傑作であるが、その中の一人物バザーロフの爲め、ツウルゲーニェフは痛く當時の青年達に憎まれて、在來の名聲と人氣とを一時に失墜したのである。バザーロフは『ハムレットとドン・キホーテ』の論中にあるハムレット型の消極主義の體現したもので、軈て著者自身をも現はしてゐる。世論の非難が如何にいはれなきか、又是程まで大騷ぎをせられ、虛無主義の新典型をつくり出されたとまで云はるゝ此作を、著者が如何なる態度で書いたかは、此一論文に於て我々の看取し得る極めて興味多い事實である。

『アルバノ及びフラスカチイへの旅』はその傍題の示すが如く、薄命な畫家イヴーノフの回想記であるが、同時に斷片的ながらツウルゲーニェフが繪畫に關する意見を知るたよりともなる

ものである。

ビェリンスキイとツウルゲーニェフとの關係はブランデスの記するところによれば、子弟のそれであるさうな。ツウルゲーニェフの最初の詩集『バラーシャ』を推稱したのはビェリンスキイであつたし、又『彼をバイロン・ハイネ及びローマンチストから解放して正路に復歸せしめた』のも同じくビェリンスキイであつたといふことであるから、或る意味から取れば、斯る說も一該に斥けるわけにはいかない。けれどもツウルゲーニェフがビェリンスキイに師事した事は、フロオベルにモウパツサンが師事したとは非常な相違であるべきことは推知するに難からぬことで、ビェリンスキイは寧ろ當初はツウルゲーニェフの將來に左程の望みをかけてゐなかつた。又ツウルゲーニェフはその思想上に於ては却て、ビェリンスキイよりも深大なところがあつたといつてもよろしい。その知己となつた當初の程さへツウルゲーニェフはその該博な語學と、新歸朝者の新知識とを以て、人生問題に對するビェリンスキイの煩悶を解く助けを爲したのである。我々が此回想錄を讀むとき、此ロシヤのレッシングたる人物の思想徑行を知り、且つ死してもなほその傍に侍するツウルゲーニェフの篤い友情をもさとることが出來るのである。

（上編）講演と論文

ツウルゲーニェフ編

ハムレットとドン・キホーテ

一八六〇年一月十日薄幸文學者及び學者保護會の爲めに行はれた講演

紳士諸君

シエークスピアの悲劇ハムレットの第一版と、セルヴンテスのドン・キホーテの第一部とは第十七世紀の初頭、年を同じくして發表せられた。

此偶然の契合には深い意味が含まれて、我々の沈思熟考を要するものがある。我々は相共にしばらく此意味について思索を試みることを、諸君に御願ひする。

『詩人を理解せんと欲するものは、須らくその領土に入れ。』

ゲーテは斯く言つた。然るに散文家は同樣の要求をなすべき一切の權利を剝奪せられてゐるけれどもその讀者達、或は聽衆に對して、彼の領土内、則ち彼が趣くその探見の旅行に同伴を求めることは出來るのである。

我々の觀察中、若干のものは奇怪に見えるであらう。然しその點に於ては斯る天才者達が、

その作品に久遠の生命を浸徹せしめ得たる獨特の優越さが存在するのである。從て斯る天才達が創作に對する意見は、一般人生に對すると同樣、無限に多樣であつて、且つ矛盾さへもないではないが、それと同時に單一であつて、正しくもある。

ハムレットに關して、在來どれ程多くの註解が書かれたゞらう！どれだけ今後もなほ書かれることであらう！此全然見極めのつかぬ性格は、研究の結果、どんなにいろ〳〵な結論を齎らすであらう！（但しドン・キホーテはその問題の本質よりするも、又話說の眞に雄大にして、明瞭なることよりするも、南天の朝曦の如く、解說を加ふるべき點が、ヨリ少ない。）然し不幸にして我々露西亞人は、ドン・キホーテの良譯をもたない。我々の大部分はドン・キホーテについて可なり曖昧な觀念を抱いてゐる。ドン・キホーテといふ詞で、我々が想起するものは、屢々單純に、滑稽である。で『ドン・キホーテ式』と云へば、我々は馬鹿氣た事と同一視する。

然るにドン・キホーテ式のうちに、我々は單に滑稽な一面の存在を認むると共に、自己犧牲の崇高な原理の存在をも承認しなければならぬ。ドン・キホーテの良譯は、我が露國の社會一般に對して、眞に嘉すべき奉仕となり、その作一切の美を、たゞさながらに飜譯する人を、社會は感謝して迎へるだらう。然しそれはさておき、我々は本題へ立戻らう。

我々はドン・キホーテとハムレットが同時に發表せられたことに、意味があると言つたが、我々の觀察によれば、人間の性質が、此二箇の根本的に相反したる典型――それは人生がその上に乘つて旋轉する樞軸の兩極端である――に體現せられて、人は總て多少とも、必ず此二典型の何れかに屬し、我々の各自は、ドン・キホーテか、然らずんばハムレット的傾向を有するものたる事が我々に示されたからである、我々の時代に於ては、ハムレットはドン・キホーテよりも遙かに多數を占むることは否み難い、然し又ドン・キホーテも全然その跡を絕つたわけではない。扨て一つ解說を試みよう。

人は總て意識すると意識せざるとに論なく、その意義、その理想、別言すれば、彼等が眞善美と尊ぶものゝ力によつて生きるものである。多くの人は歷史的に形成せられた、一定の形式に於て、その時代に適應して、早くから完全に用意せられた自分の理想を與へられる。彼等は此理想に照らして、その生活を營み、時に或は感情又は偶然の事によつて、之と背馳することもあるけれども、それを批判し、又は疑ふやうなことはない。然るに又之に反して他に獨特な思想を以て、理想の解剖をなす者がある。兎もあれ人生の理想、根蔕、人間生存の基礎を爲す事的等は、或は人間自身の外部に、或はその內部に發見せらるゝものであると、我々が言つたとしても、それが大した誤謬ではないと思はれる。換言すれば、我々各自にとつて、「自我」はその最初の位置に停留するか、それとも自ら認めて以てなほ高しとするところへ進み行くのである。けれども實際は斯る截然たる區別を許さぬものだとも言へぬではない。事實、同一の人間に於て、二箇の意見が交互に起り、或る程度までは混肴さへするが、我々は敢て、人間の性質には矛盾や變化のあり得べからざる事を斷定せんとするのではなく、只、人間が理想に對して有する二箇の異なる關係を示さんと欲しただけであつて、今、我々の意見に基き、此二箇の異なる關係が、如何なる形を以て、我々の擇んだ二つの典型に體現せられてゐるかを語らんとするのである。

先づドン・キホーテから始める。

一體ドン・キホーテ自身は何をあらはしてゐるか？　我々は急遽彼を瞥見して、直に淺薄皮相な見解に墮してはならぬ、ドン・キホーテに於て、單にあはれな姿の騎士、昔の奇怪な騎士物語を嘲笑せんが爲めに創造せられた形骸だけを見てはならない、此人物の意義は、彼が不朽な作者の手によつて擴張せられて、此物語の後編に出てくるドン・キホーテは、公爵並びに公爵夫人に寵愛せらるゝ話相手であり、且つ扈從―知事の賢明な顧問であつて、最早前編の、特に

最初の程は、無暗矢鱈と打ちのめされる、かの奇妙な、可笑しい奇人でなくなつて居る。だから我々は事實の深底に透徹すべく努力しなければならん。我々は繰り返していふ、ドン・キホーテ自身は何をあらはしてゐるか?と。何よりも先づ信仰を——或は永久不變なものに對する信仰を、眞實なるものに對する信仰を、換言すれば、容易に彼に與へられなくて、不斷の奉仕と犧牲とを要求する眞理の信仰を、各別箇な人間の外部に見出される眞理の信仰——けれども又不斷の奉仕と、犧牲の力に依つて達成し得らるゝ眞理の信仰をあらはしてゐるのである。ドンキホーテは理想に對して全身の熱誠をさゝげる。彼はあらゆる窮乏に甘んじて、生命——それが、理想の實現、眞理、正義の地上に於ける實現の手段たり得る間は、彼が重大視する彼自身の生命——さへも、その爲めには擲つことを覺悟してゐる。人は曰ふ、此理想は騎士物語の幻想的世界から得たる彼の想像で捏ち上げられたものであると、是には我々も同感である。而してドン・キホーテの喜劇的方面も又その中に存在する、けれども理想そのものは露聊かも汚されてゐない。自分一箇の爲めに生き、自分一箇のことだけを慮るのを、ドン・キホーテは恥辱と思つた。彼は（若し恁麼ことが言へるものなら）總て自分以外、他人の爲めに、自己の同胞の爲めに、邪惡の根絶の爲めに、人類に敵對する力——魔法遣ひや巨人等——言ひ換ふれば迫害

者と爭鬪するが爲めに生きてゐるのである。彼には主我主義（エゴイズム）の痕跡すらもない……彼は自我を忘却してゐる……彼は全身總て之れ自己犧牲である……（此言葉をよく玩味し給へ！）彼は信ずる——強く、且顧盼することなく信ずる。故に彼は恐るゝところを知らず、堅忍不拔にして且つ甚しき粗衣粗食に甘んずる。そんなことは彼に取つては物の數でもない。彼は謙遜であつて、大膽に、且つ勇敢である。彼の熱烈なる信仰は彼の自由を毫末も束縛しない。虛榮の心なきが故に、彼は自己自身、又自己の職業、自己の體力さへも疑はない。彼の意志や狂ぐべからざる意志である。常に同一目的に對する不斷の努力は、彼の思想に、或る單一なる形態を附與し、彼の智能を一方に偏倚せしめる。彼は知るところ尠く、又多くを知るべき必要をも有たない。彼は自己の仕事の何たるかを、又何故此世に自己の生存したるかを知悉する、是れが彼の有する主要な智識である。ドン・キホーテは或る場合には全然狂人なりとも見得られぬこともない、何となれば毫末も疑ひなき物體が彼の眼前より消失し、彼の熱情の火焰によつて恰も蠟の如くに熔解し去るが故である。（彼は眞に木像の中に生きたる惡魔を見、羊群のうちに騎士を認めたのである。）又或る時は、彼は愚人なりとも見得られる、何となれば、彼は容易に同感することを能はず、又容易に慰藉せられないからである。然しながら彼は數百歳を閲した大樹の

如く、其巨根を深く地中に張り、自己の確信を變ぜず、是より彼へと轉じ行く事がない。彼が倫理系體の長所は（此發狂者の如き變物騎士は、世に最大の倫理的實在であると知り給へ）彼が絶えず陷る位置の滑稽にして、野卑なるにも拘らず、彼が判斷、辭令、容姿に特種な威力と偉大さを添へるのである。ドン・キホーテは狂熱家であり、理想の奴僕であるところから、彼は理想の光明に眩惑せられたのである。

然らばハムレット自身は何をあらはしてゐるか？

何よりも先づ解剖を、次には主我主義（エゴイズム）を、その次には無信仰をあらはしてゐる。彼は全然自己の爲めに生きる。彼は主我主義（エゴイスム）者である。けれども自己を信ずることは主我主義（エゴイズム）には出來ない。只我々以外に、我々を超越して存在するものを信ずることは出來るけれども、ハムレットの信じない此『自我』は、彼にとつて尊いものである。是は、彼が自己の靈を定着せしむべき一物をも發見し得ないが爲めに、絶えず立歸り行く出發點である。彼は懷疑家である。彼は常に自己に煩はされ、且つ動搖してゐる。彼は常に自己の義務を念とせず、却て自己の位置を虚かる。一切を疑つて、勿論自己自身すらも容赦しない。彼の知能は自己の中に發見せらるゝものを以て滿足するには餘りに發達し過ぎてゐる。彼は自己の弱きを自覺してゐるからである。け

れども總て自覺は力である。其處からドン・キホーテの熱情とは反對の狀態——ハムレットの冷笑と反語とが流れ出づるのである。ハムレットは誇大に自己を非難することを樂み、絶えず自己を觀照し、恒に自己の内部を檢覈し、微細の點に至るまで、自己の缺陷を知つて、我とわが身を監視する。それと同時に又此監視によつて、彼は生活し、養育せられる者であるとも言ひ得られる。彼は自己を信じないが、虚榮の心はもつてゐる。彼は何を欲し、又何故に生きるかを知らずにゐながら、なほ生命に執着する。

『おゝ神よ！神よ！』と、彼は第一幕の第二場で叫んだ。『天地を裁く神よ、貴君が自殺の罪を禁じ給はなかつたならば！あゝ此世は何故斯うも平凡、空虚單調に見えるのだらう！』

然るに彼は此平凡、空虚な人生をも失ふことを欲しない。彼は父の幻影が出現するまで、遂には、既に支離滅裂に爲つてゐる彼の意志を、徹底的に破壞した、かの恐ろしい使命の來るまで、自殺といふものを夢想してゐた。けれども彼は自殺を決行し得ない。人生に對する愛着は斯くの如く生命の斷絶を夢想するそのことに於てさへも、歴々と指點し得られる。

『今血が張ぎると思へば、又直ぐに力が溢れ出る！』

といふ感じは十八才の青年等に取つては、格別珍らしいものではない。

けれども我々は餘りにハムレットに嚴しくしてはならない。彼は惱んでゐる、そして彼の苦みは、ドン・キホーテの惱みよりも烈しく、且つ一層皮肉である。ドン・キホーテに解放せられた犯罪人たる、粗暴な牧者共は、後にドン・キホーテを鞭打つけれど、ハムレットは我れとわが身に負傷せしめ、その身を裂く。彼の手にはメスがある。双刃の鋭い解剖のメスがある。

ドン・キホーテは全く嗤ふべき人物である。彼の姿は、此詩人に描かれる其度毎に、いつも殆ど此上もない程、滑稽に見える。彼の名は露國農民の口にすら滑稽な綽名となつてゐる、此事は我々各自の耳に訴へても、明かに知れることである。ドン・キホーテのことを想像すると、直ちに心に浮ぶものは、漫畫の甲冑を着た痩せさぼらひて、骨のみ高く出でゝ、尖々しい、鈎鼻をもつた一人物が、半ば可笑しく、半ばあはれむべき、永久に飢ゑ疲れた痩馬ロッシナンテに跨つた姿である。けれども可笑しさの裡に和解の力、救濟の力がある。若し又、『汝が嘲る者に汝は仕ふべし』といふことが空言でないとすれば、『汝は嘲りし者を既に赦したれば、彼を愛せよ』と附加するも不可能ではない。

是に反してハムレットの容貌は人を魅着せしむるものをもつ。彼の憂鬱にして、痩せてこそをらざれ（彼の母は言つてゐるOur son is fat 私共の息子は肥えてをると。）蒼白なる顔面、黒

天鵞絨の着服、羽毛を飾つた帽子、典雅の擧作、自然に出づる詩的の言辭、自己抑制の惡戯、それと共に他人に對して常に抱懷する滿々たる優越感等、皆一つとして好ましからぬはなく、人心をとらへずして止むことがない。ハムレットといはれることは何人にとつても愉快であつて、ドン・キホーテの名を冠せらるゝことは、何人も好むところでない。『ハムレット・バラッインスキイ』とは、ブウシュキンが其友に書き送つた名である。誰もハムレットを笑はうとはおもはない。而して又彼を愛することは殆ど不可能であるといふ非難も此處にある。或る種の人々、たとへばホーレーショの如き者のみがハムレットに親炙し得るのである。然しホーレーショのことは後廻しにする。總ての人はハムレットに同情するが、それは何故であるか解つてゐる。卽ち殆んど何人でも、ハムレットのうちに、自己の姿を發見するからである。けれども我々は繰り返して言ふ、彼自身が何人をも愛しない故に、我々も彼を愛し得ぬのであると。

なほも比較を續けよう。ハムレットは王位の覬覦者たる肉身の弟に殺される國王の子息である。彼の父は自己の復讐を彼に托せんが爲めに『地獄の顎』たる墓穴より出てゝ來る。然るに彼は狐疑逡巡し、自己を瞞着して、自己を慰め、遂に偶然その繼父を殺すことになる。この事あるが爲めに、賢くはあつても、近視眼者流は、シエークスピアを無謀にも非難する！然るに貧

困であつて、殆ど乞食ともいふべき、資産も、係累もない、老來孤獨のドン・キホーテは、全地球上に於て、迫害を受けをる人々（自己には全然他人）を保護し、邪惡を匡正すべき責任を自身に負擔する。無辜を迫害者の手より解放する彼が最初の試みの、無辜の頭上に二倍の苦痛となつて還つたのは何の爲めか？（我々はドン・キホーテが小童をその主人の打擲から救つたとき主人はその解放者が遠く離れ去ると直ちに、十倍も痛烈に小童を析檻した場面を知つてゐる）。有害なる巨人と闘ふつもりで、ドン・キホーテが有益な風車を攻撃したは何の爲めか？我々は是等の外形の滑稽な皮相を見て、そのうちに盛らるゝ思想を逸してはならぬ。自己を犠牲に供せんとしつゝも、それから起る總ての結果や、その行爲の齎らす利益の正味を豫め秤量し、計算するものは、果して自己犠牲を爲し得べきや否や甚だ疑はしい。ハムレットにはドンキホーテの樣な眞似が殆ど出來なかつた。彼の鋭い、纖巧な、懐疑的の心を以てすれば、斯る馬鹿げた誤謬に陷りやうがない！彼は水車と闘ふことはできない。彼は巨人の存在を信じない又實際にそんなものが存在するとしても、彼はそれを攻撃などはしないであらう。ハムレットは理髪師の洗盤を示して、是はまさしくマムブリンの魔法の冑であるとは斷言すまい。けれどもよしや眞理そのものが、彼の眼前に、魔法によつて、具體化して、現はれ來るとも、ハムレ

ットは、それこそ本當の眞理であるといつて、それに一身を捧げる決心をつけはしないと我々は想ふ。まつたく誰が、眞理は巨人と同樣、空しき非實在であると悟つてゐるだらうか？我々はドン・キホーテを嗤ふ。然し我々のうち、誰か良心をもつて、自身に對して過去、現在の確信を問ひ得るものがあらうか？誰か、我こそは常に理髪師の錫の洗盤と、魔法遣ひの黄金の冑を區別するし、又是までも區別して來たと斷言し得らるゝか？故に我々は思ふ、重要なことは誠實と自信とであつて、結果はひとり運命の手中にあると。運命のみが獨り、我々の爭ふたのは幽靈であつたか、それとも實際に敵であつたか、我々の頭を防禦したのは、どんな武器であつたかを我々に示し得るのである。我々は只武裝して闘ふのが任務である。

所謂民衆と稱ふ一般人民のハムレット並にドン・キホーテに對する關係は、注目に値するものがある。

ハムレットに對してはボロニアス、ドン・キホーテに對しては、サンチョ・パンサが民衆の代表者である。

ボロニアスは狹量、多辯な老人であるが、それと同時にてきぱきとして、實際的にして、温雅な思想をもつてをる。彼は勝れた行政官であつて、又模範的の父である。彼が、その子息レ

ヤーチーズの海外に出發するに際して與へた教訓を想起したまへ。その教訓は賢明の點に於ては、バラタリア島で知事サンチョ・パンサが取つた或る處置と匹敵するものがある。ポロニアスにとつて、ハムレットは一介の乳臭兒に過ぎないが、狂人ではない。若し彼が王子でなかつたなら、ポロニアスはハムレットを思慮定まらずして、實社會に融通のきかない、無益な人間として輕蔑したであらう。ハムレットがポロニアスを愚弄してゐる積りの、かの有名な、雲について談じ合ふ場面は、我々の意見を確證すべき明白な意義を有してゐる。我々はそれを諸君に御注意申し度い。

ポロニアス　『王子樣、母后陛下が貴方に御話し遊ばし度い由仰せられます。即刻さのとでムいます。』

ハムレット　『あの雲を御覽か？まるで燕のやうではないか？』

ポロニアス　『まつたく燕でムりまする。』

ハムレット　『わしにはそれが駱駝のやうに見えるが。』

ポロニアス　『背はそつくり駱駝に見えまする。』

ハムレット　『或は鯨の背のやうぢや。』

ポロニアス　『まつたく鯨でムりまする。』

ハムレット　『よろしい――そこでわしは母上の御許へ參らう。』

此場面に於て、ポロニアスは王子の御機嫌を窺ふ廷臣であると同時に、病氣で、熱狂せる小童に逆らはぬ大人であることが明白ではないか？ポロニアスは少しもハムレットを信じてはゐないが、それは正當である。彼特有な、狹隘な自恃の念から、ハムレットのオフエリアに對する愛を、そのむら氣のせいにする。此事は勿論ポロニアスの誤りである。然し彼はハムレットの性質を評價することを誤つてはゐない。ハムレット型の人間はまつたく一般の社會にとつては

無用である。斯る人物は民衆に何物をも與へず、又何處へも民衆を導くことが出來ない。蓋し自分自身の往くところをもたざるが故である。人若し脚下に土地ありや否やを知らずして、どうして他人の嚮導者たることが出來やうぞ。況んやハムレット型は民衆を輕蔑するのである。誰か自己を重んずる心なくして、いかでか他を尊敬し得られようぞ。又何でそんな人間が、民衆と關係するにふさはしからうぞ。民衆は粗野であり、汚穢ではないか、しかもハムレットは彼等と同じ生れではないのである。

サンチョ・パンサは之とは全然異つた面目を我々にみせる。彼はハムレットとは反對に、ドン・キホーテを嘲り、その狂氣を熟知してゐる。然し三度も自分の親、家、妻、娘を棄てゝ此狂人の後に從ひ、各處を遍歴して、あらゆる不愉快を忍び、生命をも堵して忠勤を勵み、ドン・キホーテを信じ、ドン・キホーテの死するや、その家にあつて、跪いて涙を流すのである。斯る忠勤の理由を說明するに、功名心や利慾の念に基くといふのみでは充分でない。サンチョ・パンサは餘りに多くの健全な心をもつてゐた。彼は此風變りな騎士の楯持をつとめたところで毆打の外、殆んど一物の期待すべきものゝないことを熟々知つてゐた。彼が忠勤を抽んでた理由は一層深いところに求むべきものである。それは、若し斯う言つても差支へないものならば民衆の

殆ど最良な本質、卽ち無邪氣で、正直な迷信（噫！民衆は又他のものにもよく迷はされる。）私慾の雜らぬ狂熱、貧しい者には、殆ど日常のパンを輕蔑させると同等に力強い、箇人的利益の無視に基くのである。普遍的にして、傳統的な本性！民衆は熱烈に信じながら、自己を愚弄し、呪詛し、迫害さへする人間、換言すれば民衆の迫害も呪詛も意に介せず、その嗤笑すらも恐れず、彼等自身のみが獨り認め得る目的にむかつて、その靈眼を凝らして、或は仆れ、或は起き、遂にその目標に到達せずんば止まない人物に追蹤するに終るものである。心に從ふ者のみ獨り目的を達すとはまつたく眞實である。Les grandes Pensées viennent du cœur（大なる思想は心臟より來る）と、ヴォヴェナルグも言つてゐる。ハムレット型は何物をも發見せず、何者をも發明しない、又彼等の背後に、自身の個性以外に、何等の痕跡をも殘さず、何の傳ふべき事業をも有しない。彼等は愛せず、又信じない。斯くの如くにして彼等は果してよく何物を發見し得やうぞ！化學に於てさへ（有機性のものは措いて）第三の物質をつくるには二元素の結合を必要とする。然るにハムレット型は只己れのみで働く。彼等は單獨である。それ故に結果を獲得することができない。

然るに反對者は言ふだらう『オフエリアはどうであるか？ハムレットは彼女を愛しなかつたとらうか？』と。

ハムレットとドン・キホーテ

我々はオフエリアに就いて一言を費し、序にヴウルシネアのことをも述べよう。

我々の二典型が婦人に對する關係について觀るもなほ多くの注目すべきものがある。

ドンキ・ホーテは嘗て存在したことのない婦人ヴウルシネアを愛して、その婦人の爲めには死をすら辭せない。(彼が打ち負かされて、埃りの中に投げ出されたとき、自分の胸に槍をつきつけてゐる敵に對して「騎士よ、私を殺せ、けれども私の弱さはヴウルシネアの名譽を決して傷けはしないぞ。私は彼女こそは世に最も美しい女であると斷言する」と言つたことを諸君は記憶し給へ。)彼の愛情は理想的で、又純潔である。彼が戀愛の對象は全然非實在でありとしてそれを疑ひさへせぬ程理想的である。ヴウルシネアが粗野、汚穢な百姓姿で、彼の眼前に現はれるときですら、自分の眼を信ぜず、ヴウルシネアは魔術遣ひに變形せしめられたものと思ふ程、純潔に彼女を愛するのである。我々は自ら現代に於て、しかも我々の國内にあつて、ヴウルシネアにも劣らぬ非實在の爲めに死する者を見受ける。そんな人々は粗野にして、且つ屢々何等か汚穢なる或る物のうちに、自己の理想の存在することを認め、又その或る物の變形を同樣に邪惡と――我々は敢て魔術遣ひとまではいはぬが――惡しき偶然ゝ箇性とに歸するのである。我々は現に斯る人々を見てゐる。斯る人々が絶滅するときには、歴史は永久に閉さるべきであ

る。蓋し歴史の中には讀むべき何物も存在しなくなるだらうから。ドン・キホーテには肉慾はその痕跡だもない。彼の幻想は皆含羞無邪氣である。彼は心の奥底で窃かにヴウルシネアと何時かは邂逅し度いと望んでゐると同時に彼は此邂逅にさへも恐れを抱くのである!

然しハムレットは愛することが出來たであらうか?人心の最も深い批判者である、ハムレットの作者は、あらゆる腐敗した解剖毒の浸潤せる主義主義者(ニヒイズム)で、懐疑者たる此ハムレットに、熱烈な、愛の心臓を與へやうとは思はなかつたであらうか?シエークスピアは斷じて斯る矛盾に陥らなかつた爛眼なる讀者は、ハムレットが肉感的で、内心には情火の燃えてさへゐる人間であることを看取するにさして困難を感じない。(廷臣ローゼンクランツはハムレットが女には飽きたと言つたとき、無言で微笑したが、それも強ち不當ではない。)我々は斷言する、ハムレットは愛をもたなかつた、只愛する眞似をする。又愛しても浮氣つぽいところがある。我々は此實證をシエークスピア自身より得るのである。

第三幕の第一場で、ハムレットはオフエリアに云ふ――

『わしは何時ぞやお前を愛したことがある。』

オフエリア

ハムレットとドン・キホーテ

『王子さま、貴君は私に貴君の愛を信じさせて下さいました。』

ハムレット

『お前は私を信じてはならなかつたのだ。……私はお前を愛してゐなかつたのだからねえ。』

此最後の詞で、ハムレットは自分が想つた以上に眞理に接近してゐるのである。彼が無辜な殆ど神聖な程純潔な、オフエリアに對する感情は冷笑的であると同時に（彼が宮中演劇の際「第三幕第二場」オフエリアにむかひ、* Lady, shall I lie in your lap? と許しを乞ふたとき、彼が二重の意味を仄かす詞を用ひたことを想起し給へ）又阿諛的でもある。（諸君は彼がオフエリアの墓地に跳び込み「四萬の兄弟が總がゝりとなつて來るとも、わしの戀と競ふことはできぬわい？幾百町歩の土を我等が頭上に積み上げよ！（第五幕第一場）と大言を吐く、レヤーチーズと爭鬪の場を注意し給へ）彼がオフエリアに對する一切の關係は、彼にとつては矢張り利己的關係に外ならない。彼は叫んで曰ふ——『おゝ妖精（ニンフ）よ、お前の神聖な祈禱のうちに、わしを記憶して呉れよ。』といつたうちに、我々は本は性來病的な無力——愛し得ない無力——『神聖なる純潔』の前に額づく、殆ど迷信ともいふべき無力に對する、稍々深い自覺の在ることだけを認めるのである。

* 譯者——lie に「置く」と「坐る」との兩義がある。ハムレットは、オフエリアに「貴力のお膝に lie してようムいますか」と訊いたので、オフエリアは「坐る」意味に解してゐると、ハムレットは、頭を置くの意味につかつて、頭といふ詞をわざと略したやうに言ひくるめたのだつた。

ハムレット型の暗黑面を語ることはもう澤山である。そんなことは我々に明白に示さるれば示される程、愈々我々を苛立たせるものである。だから今度は彼の正しいところ、又正しいが故に永遠に殘るべきものを評價してみやう。消極的根本性格が彼に於て體現してゐる。他の大詩人（ゲーテ）がすべての純人類的性情から離して、魔王メフイスフエレースの形で、我々に示した根本性格の體現が彼である。即ちハムレットはメフイスフエレースである。けれども人間性の生活圏内に立て籠つたメフイストフエレースである。それ故に彼の消極性は邪惡ではない。消極性そのものは邪惡に向ふのである。ハムレットの消極性は善を疑ふけれどもそれは惡を疑はずして、惡に對して假借なく鬪爭を挑むのである。善を疑ふのは則ち善の眞實さ、誠實さを疑つて、それは善ではない、僞善であるぞといつて攻擊するのである。善の假面の下に、又しても太初以來彼の敵たる嘘僞が潜んでゐるといつて、それを攻擊するのである。ハムレットはメフイスフエレースの惡魔的な冷笑を浮べない。彼の辛辣きはまる微笑のうちには、彼

の苦悶を語り、その故に彼と和解せしめる憂愁の色がある。ハムレットの懐疑は亦道德に無關心ではない。是にこそ彼の意義と功績とがある。善惡、眞僞、美醜は一箇の偶然、暗默、得體の知れぬ或る物となつて彼の眼前に混淆することはない。ハムレットの懐疑は、所謂現實の眞理が存在することを信ぜず、假借なく嘘僞と鬪ひ、遂に彼自身でさへその全體を信じ得られない眞理の擁護者の一人となるに到る。けれども消極性には火に於けるが如く、破滅の力がある破壞すべきものと、赦免すべきものとが屢々融合し、又結合して、分離すべからざるものとなつてゐる。それに對して此力を如何程の範圍にとめ置くべきか、如何にそれを用ゆべきか、その勢力はどこまでゞ止まるを以て正しと爲すべきか、何時破壞せねばならぬか、何時容赦すべきか？此處に屢々、人生の最も悲劇的な方面が現はれるのである。行爲には思想が必要であるけれども思想と意志とは既に分離して、しかも日を追ふて、分離が一層甚しくなつて行く……

And thus the native hue of resolution
Is sicklied o'er by the pale caste of thought
意志本來の色は斯くて
思想の蒼白い覆ひで醒される……

とシエークスピアはハムレットの口を以て我々に語る。そして爰に一方には思索的、自覺的で、且つ屢々包括的でありながら、又屢々無能であり、而して無爲を非難せられるハムレット型の人々があり、他方には有るか無きかの一點——それは屢々彼等が現に見るが如き形をしてはをらない一點を認るだけのことで、利益を收め、人を動かす半狂亂のドン・キホーテ型の人間がある。玆に於てか疑問が生ずる、曰く——眞理を信ずるには、發狂せねばならないか？自ら統治する理智はそれが爲めにその力を失はねばならぬか？と。斯る問題は淺薄な批判をするだけでさへもなほ我々を高遠な方へ導くものである。

我々は此人間性格の分裂に於て、換言すれば既述の二元論に於て、人生一切の根本原理を認めねばならぬことと、人生は總て此兩者不斷の分裂、不斷の合致たる原理そのものが永久的協和と、永久的爭鬪とに外ならぬことをいふだけに止めて置かう。若し我々が哲學的術語を以て諸君の耳朶を驚かすことを憚らぬならば、ハムレット型の人々は、總ての生物が、我こそは被造物の中心であつて、その他は只我々の爲めに存在するものであると思ふ、かの自然の根本的中心力を眞に表現してゐると、我々は言ひたい。(これは恰もアレキサンドル大王の額を刺す蚊は、その血を自分に與へられた食物と心得、自分の權利に安んじて之を吸ふやうなものである

ハムレットは之れ程までは增長しないで、彼自身を輕蔑する——蚊はそんなことは少しもしない——けれども丁度そのとほり、常に一切のものを彼自身に關係せしめたと云ひ得られる。)若し此求心力(主我主義(エゴイズム)の力)が無かつたならば、丁度他の力たる遠心力、則ちその法則に從ひ、あらゆる物が、他のものゝ爲めに存在する、いま一つ別な力がなかつた場合と同樣、自然はその存在を保つていけないであらう。(此力を、此熱誠と犧牲の原則を、ドン●キホーテが代表してゐるのである。)沈滯と活動、保守と進歩とを代表する此兩勢力は、あらゆる生物の根元的力の眞髓である。それが我々に花の成育を說示し、又それが我々に强盛な國民の發展に通曉し得べき鍵關を與へるのである。

我々は此雜解枯淡な思辨を去つて、我々にもつと馴染の深い思索に急がう。

シエークスピアの作中、恐らく一番世に持て囃されるものはハムレットで、此悲劇は疑ひもなく、興行毎に滿員を以て迎へらるゝもの一つである。我邦現在の社會狀態にあつては、自覺に對するその努力、自己に對するその懷疑、その若々しさ等に鑑みて、斯る現象は理解するに困難ではない。けれども此作が美に滿たされてゐることは、しばらく擱いて言はずとするも、是は最も新らしい時代精神の、最も顯著なる產物であらう。自分も多くの點に於てハムレット

に似た者でありながら、創作力を自由に驅使して、彼を自己より分離し、その姿を後世の子孫に對して、永久なる研究資料に提供した著者の天才には驚かざるを得ない。此姿をつくつたものは北方人の精神である。反省と解剖の精神、諧和と光明美の缺けた陰欝、苦惱の精神、華麗にして、往々纖巧な形式にとらはれず、却て深刻、遒勁、複雜で、自主獨立な指導の精神である。シエークスピアは、自己の胸中よりハムレットの典型を抽出し、それによつて詩の領域に於ても、他の國民生活の領域に於けると同じく、ハムレットを充分に理解するが故に、彼が敎へ子達よりも一段高い位置に立つてゐたのである。

南方人の精神は、ドン●キホーテに宿つてゐた。此精神はかゞやかしく、喜ばしく素朴で、感受性が鋭いけれども人生の奧底まで到達せず、包括的ではないけれど、しかも人生のあらゆる現象を反映してゐるものである。我々は玆に於てか、ある慾望の起ることを禁じ得ない。それは卽ちシエークスピアと、セルヴンテスとを比較することではなく、只兩者の相違並に類似の點を示し度いことである。多くの者は考へる——シエークスピアとセルヴンテスとを奈何に比較し得られやうか?シエークスピアは巨人であり、半神ではないか……と左樣、だがセルヴンテスはリア王を造つた巨人の前には倭儒となつて現はれはしない。人間として、全然人間

として現はれる。併し乍人間は半神の前に於てすら、自分の脚で立つ權利を所有してゐる。勿論シエークスピアは――ひとりセヴルンテスに對してのみならず――その想像の豐富にして、強力なる詩才の高邁にして嚇々たる、知識の該博にして、深遠、廣濶なる、優にセルヴンテスを壓倒するのであるが、セルヴンテスの小說中に、諸君は誇張せられた嚴酷、不自然な比較、作爲的なくすぐりは一つも無いことを發見されるであらう。又切斷された首、飛び出した眼玉、血液の流れ、鐵の如き頑固な殘虐、中世紀の恐怖すべき暴行、更に又北方人の苛酷な天性の中より、他に比してヨリ遲緩な速度で消え去つた野蠻性等も認めることも出來ない。然るにセルヴンテスもシエークスピアも同樣に聖バルトロミユーの夜と同時代の人であつた。

譯者――一五七二年八月二十四日及び二十五日、聖バルトロミユー祭當夜佛國の新教徒三萬人が殺戮せられた。

その後も永く異端者は火刑に處せられ、又血潮は流された。何時の代にか血の流れは歇まうぞ？中世紀の有樣はドン・キホーテに於て、プロヴンス風の詩の反映を以て物語られてゐる。又セルヴンテスがそのいろ〳〵な小說の上に傾けた人の好い笑まひ、又その最後の文學的貢獻たる『ペルシレスとシヒスムンド』を書いたその善良な笑ひによつて、物語られてゐる。

原註――ドン・キホーテの前篇の後に、騎士「物語ペルシレスとシヒスムンド」が發表せられたといふ。

シエークスピアはあらゆる方面からその模型を看取する――天からも亦地からも――何ものも彼に對しては閉されない。何ものも彼の透徹する眼光を免れない、彼はその贄を襲ふ鷲の如き勢ひと言ひ表はし難き力を以てその模型を描く。セルヴンテスはその讀者の前に、丁度父親が子供に對するやうに、その數多からぬ模型を、親みを以て持ち出してみせる。彼は單に手近かなものだけをとるけれども、此手近いものがどれ程彼にとつて親みをもつてゐるだらう！人は皆英國詩人の力强き天才に征服せられたやうである。セルヴンテスはその詩的の富みを、簡短明白潤澤ではあつても、彼にむかつて殘酷ではない人生の經驗から取り入れる。七ヶ年の俘虜生活は徒爾ならで、彼が所謂る忍耐の學問をセルヴンテスに學ばした。彼に從ふ周圍は、シエークスピアのそれよりも一層狹隘である。けれども彼にも又、他の生きた人間箇々の場合と同じく、あらゆる人間味があらはれてゐる。セルヴンテスは諸君に千萬言を連らねて、曉らしめることをしない。彼は勝ち誇つたインスピレーションの巨人的力を以て、諸君を震駭させはしない。彼の詩は時に荒れ立つ海となるシエークスピアのそれではない。それは樣々な岸の間を

悠るやかに流れ行く、深い川である。少し宛その各方面から來るところの澄明な浪に惹かれ、捕らはれて、讀者は欣然とその流れの、眞の史詩的靜穩と平明とに漂はされるのである。我々の想像は一六一六年四月二十六日、卽ち同日に死んだ、時を同じくした此兩詩人を好んで眼前に喚起する。セルヴンテスは眞個シエークスピアについては何事をも知らなかつた。けれども英國の偉大なる悲劇作家は、死に至るまで、三ケ年間退隱してゐたストラットフォードの閑居で、當時既に英語に飜譯せられてゐた此有名な小說を讀んでゐたゞらう。シエークスピアがドン・キホーテを讀んでゐるところは漫畫家の筆を揮ふべき絕好の場景ではないか！當代及び後代の先導者たり、指針たる人々を、その中心に有して、渴仰する國民は幸福なる哉！偉大なる人に冠する不滅の月桂冠は、又その國民の頭上にも置かれるのである。

我々は此不完全なる研究を終らんとするに際し、なほ二三の事を述べてみたい。

英國貴族の一人(此事に精通する人)は我々に贊成して、ドン・キホーテを眞の紳士の典型と稱んだ。若し擧作の單純と平靜とが、所謂る几帳面な人物の顯著なる標徵でありとすれば、ドン・キホーテは斯く稱ばるべき充分の權利をもつてゐる。彼はヒダルゴー(スペイン紳士)である。滑稽な公爵の女中が彼の顏中を洗つたときでさへ、彼はヒダルゴーであつた。彼が擧動の單

純さは、我々が自己愛惜と稱ばうとするものを彼が持たない所から起るのであつて、自尊によつてゞはない。ドン・キホーテは決して自己の爲めに働かない、そして自分と他人とを尊んで氣取らうとはしない。然しハムレットはその華美な外觀を以て佛語の所謂る Ayant des airs de parvenue (成金風に見える)彼は時には粗暴なぐらゐに騷がしく、身振りをし、又嘲笑する。その代りに獨特で、正鵠を得た表現の力、及び自己を慮る、總ての人物に固有な力が彼に附與せられてゐる。それ故にその力は全然ドン・キホーテの及び難きものである。ハムレットの深さ鋭さ、彼の多方面に亘る教養(彼が井ッテンベルヒ大學にまなんだことを記憶せねばならぬ。)とは、彼に殆ど欠陷のない趣味を發達せしめた。彼は批評に秀でゝゐた。彼の役者に與へる意見は目醒しい程眞實且つ聰明である。典雅な感情は彼にあつては、ドン・キホーテに於ける義務觀念と同じ程度に力强く發達してゐる。

ドン・キホーテは總て現存の制度、宗教、君主、貴族等を深く尊重すると同時に自由を愛好し、又他人の自由をも尊重する。ハムレットは君主や廷臣等を非議しつゝも、實際は壓制家で且つ短氣者である。

ドン・キホーテは僅に文字を解する。ハムレットは確に日記をつけてゐたに相違ない。ドン

キホーテは無學ながらも政治行政に關する一定の思想を有つてゐる。ハムレットは決して斯ることにかゝはらはぬ。

多くの者はセルヴンテスがドン・キホーテに負はせる果てしない打擊に反抗した。我々は此小說の後篇に於て、此あはれな騎士は殆ど打擊を受けないことを憂に說いた。けれども斯る打擊がなかつたとしたならば、此小說の熱愛者たる小兒に、ドン・キホーテの氣受けは惡るからう。又我々大人にも、彼はその眞の光りに於て現はれ來らずして、却て彼の性格に反した、冷たく傲慢なものに見えたであらう。我々は今後篇で彼は打擊を受けないと言つた。けれどもその末尾に於てさへ明月（ブランカ・ルウナ）の騎士（實は學士カルラスコが變裝してゐたもの）に打ち負かされて後、騎士たることをやめてから、死を去る事遠からぬとき、豚の群が彼を蹂躙するところが書かれてある、そこで我々はセルヴンテスに對する非難を聞いた。曰く何ぜ彼は古くして、既に一度棄て去つたと想はれる此惡戲を再び主人公の上に試みたか？と。けれども此點がセルヴンテスの天賦の才能が發現したものである。斯る不體裁な出來事にこそ深甚なる意味が籠つてゐるのである。豚の足で蹂躙せられることは、ドン・キホーテ型人間の生涯で常に遭遇するところのものである。卽ち一生の終る前に、是ぞ彼等が上納の義務を負ふ稅金である。……是こそ

バリサイの徒が橫顏に喰らはす平手打である。その後始めて彼等は瞑目するのである。彼等は試煉の爐火を通つて、不死の生命を獲得する。不死の門は彼等の目前に開かれる。

ハムレットは時として狡猾で、殘忍でさへもある。國王から英國へ遣された二人の廷臣を彼が殺さうとしたことを想へ、又彼に殺されたポロニアスに就て、彼の言ふところを想へ。とは云へ、我々が今まで述べ來つたものゝうちに、なほ我々を去るその遠からぬ中世紀が現はされてゐる。更に又我々は正直で、几帳面なドン・キホーテに於て、半ば無自覺にして半ば無邪氣な詐瞞及び自尊の傾向——殆ど常に絕ゆることなき熱狂的な幻想の存在を認めねばならぬ。彼がモンテシノサの洞穴を見た話は明かに彼が案出したことであつて、橫着で單純なサンチョ・パンサを欺したのではなかつた。

ハムレットは至極些細なことで落膽して、歎き悲むけれど、ドン・キホーテは身動きもならぬ程囚人たる奴隸に打ちのめされながら、露聊かも、自己の企圖の成功すべきことを疑はなかつた。フウリエ（譯者註、佛國共產主義者の祖一七七二年）は、多年の間、彼がその計畫（譯者註米國に理想の共產村を建てる計畫）を遂行することに必要な百萬法の寄附を求むる旨、その主宰する雜誌で發表して、斯る篤志家の面會にくるのを心待ちにしながら、每日その事務所に出かけていつたさうである。勿論そんな人には

逢へなかつたけれど——是は本當に滑稽な話である。けれども玆に一つ我々の頭に浮ぶことは古代の人が、その神を妬みの神と稱へたことである。時に彼等は犧牲を捧げてその神々を宥めて置くべき必要があると思つた。（ポリクラテースが海中に指環を拋つたことを想へ）。然らば新たなる大事業を行ふ人々の性質に幾分の滑稽が、妬みの神に對する宥恕の犧牲として、又貢稅として混入するものであると、我々に思はれぬ筈もないではなからう。けれども此滑稽な畸人＝發明者がなければ人生は進歩しないであらう。又ハムレット型の人々が考ふべき何物もないであらう。

左樣、我々は繰返して言ふ——ドン・キホーテ型は發見し、ハムレット型は開發する。然しハムレット型は一切を疑つて、如何なるものをも信じないのに、何を開發することが出來るだらうか？——斯ういふ疑問が我々に起る。是に對して、我々は答へよう——巧妙なる天の配劑により、完全なるハムレット型の人間がゐないと同時に、完全なドン・キホーテ型の人間もゐないものであると。是は單に二つの傾向を指示する道標に過ぎない。それに向つて人生は努力するけれども、決してそれに到達することがない。解剖の原則がハムレットに於ては遂に悲劇の發生となるが如く、ドン・キホーテにあつては喜劇と轉化するのである。然し乍ら、人生に

於ては、全然喜劇的なこと、又全然悲劇的なことは減多に遭遇し能はぬものたることを忘れてはならぬ。

ハムレットは、我々の眼に映ずるところでは、彼に對するホーレ！ショの心服によつて多くの利益を享けてをるやうに見える。此愛嬌ある人物も亦屢々現今我々の遭遇するもので、誠に以て我々の時代にとつて名譽な次第である。ホーレーショに於て、我々は此詞の最善の意味の祖述者並に教師の典型を認める。ストイックで、直截な性格、熱烈なる感情、稍々不足せる智識を以て、彼は自己の缺陷を感得して、斯る人間には珍らしい程謙遜な心をもつてゐる。彼は教へられ、誡められんことを渴望し、その故に賢明なるハムレットを崇拜し、厚誼の報酬をすら求めずして、その正直なる力を傾注して彼に仕へるのである。彼はハムレットを王子として仕へるのではなく、指導者として仕へるのである。ハムレット型の人間の最重要な奉仕の一つは、彼等がホーレーショに類似した人物を育成、發達せしめることである。卽ちハムレットから思想の種子を取り、それを自己の胸の中で實のらせ、次にその實を全世界に散布するの意味である。ハムレットがホーレーショの重要なることを承認するに用ゐる詞は、彼自身の名譽を高めるものである。その詞には人間の高度な價値に關する彼の理解と、如何なる懷疑もその力を減殺し

能はぬ彼の幸福な努力の特異さとが現はれてゐる。『聞け』と彼はホーレーショに言ふ——

私のいとしい魂が擇ぶといふことを知つて
人間を見別けることが出來るやうになつてから、そのお眼鏡にかなつたものはお前だつた。
お前は總てに惱みながら、何にも惱まぬ人、打たれても賞められても、
等しく感謝して受ける人であるから……その血と智慧との斯くもよく雜り合つて。
幸運の爲めにその欲する一節の曲を、
笛の音に吹くともない程だ。
情慾の奴隷とならぬ人をわしにくれ。
わしはその者を心の奥底に、
否心の底に隱さうよわしがお前にするやうに……

第三幕第三場)

正直な懷疑家は常にストイックを尊ぶ。古代が壞滅したとき——又古代と同樣な各時代に於て——最善の人々は、なほ人間の價値を維持し得る唯一の避難所として、ストイックに趨つた古來懷疑家達は、死すべき力をもたなかつた場合——『逝きしもの未だ一度も還らざる鄉土へ

出發すべき』——力をもたなかつた場合には、エピクウロス流の樂天家となつた。是は我々の記憶に存する悲しい、又餘りによく知悉せられてゐる現象である。

ハムレットもドン・キホーテも等しく悲壯な死を遂げる。けれども兩者の最後はどれ程ちがつてゐることだらう！ハムレットの最後の詞は美しい。彼は心靜かにホーレーショを慰め、生き永らへよと言ひ、王位の繼承について少しの汚れもない權利の代表者たる、若いフォーチンブラスに有利な遺言をする。けれどもハムレットの眼光は來世へは向はなかつた。死せんとする懷疑家はいふ。『此上は只沈默』と。そして永久に沈默する。ドン・キホーテの死は、人の心に言ひ難き憐憫の情を催起せしめる。此瞬間にこそ、此人物の偉大なる價値が何人にも明瞭になる彼の以前の楯持が、彼を慰めんとして、我々は程なく再び騎士修業に出かけようと、彼に告げたとき、瀕死の人は答へた——『もうそんなことは皆過ぎ去つてしまつた。私は皆の者に詫をいふ。私は最早ドン・キホーテではない私は再び元々どほりアロンソのお人好し——Alonso el Bueno——だ』と。

此言葉はまつたく驚嘆すべきものである。此綽名を最初と最後とに回想することが讀者の心を動かすのである。又此一語のみが死の面前にあつてなほ大なる意義を有するのである。

ハムレットとドン・キホーテ

ツゥルゲーニェフ編

至高の位も權勢も、偉大なる天才も皆塵介と散じて、
總ての偉大なる地上のものは
煙の如く飛散する……。

けれども善事のみは煙と飛散しない。善事は輝く美以上に永久のものあでる。『總てのものは過ぎ去るも、只愛のみは殘る』と、使徒保羅は言つた。

我々は此上何等附加すべき詞を有たぬ。我々は諸君の前に或る思想——多分我々のものとはちがつてゐるかも知れぬ——を喚起した人間精神の二傾向を示すことにより、幾分たりとも我々の問題を解決し、諸君の注意を倦ましめなかつたならば、幸福の至りである。

（一八六〇年）

ビェリンスキイの回想

私がビェリンスキイと親しく知り合つたのは一八四三年ペテルブルグで會つたのが始まりである。けれどもその名を知つたのはずつとそれ以前であつた。彼が最初の評論が『モルヴァー』や『テレスコープ』誌上に載つて間もなく、ペテルブルグでは恐ろしく氣の荒い、猛烈な誰の前でも憚るとろなく、あらゆるもの——勿論文壇のあらゆるもの——を攻撃する人間だといふ噂が立ち始めた。是以外の評判は聞えなかつた。當時の新聞雜誌の上では、青年間に於てすら多くの者は彼を非難し、彼は餘りに大膽で、ひどく傲慢であると見做した。ペテルブルグとモスクヴとの變な格執から、ネヴ河岸の讀者が、此新たなモスクヴの光りに對するその不信用は一層の深刻さを加へた。それと共に彼が平民出身たること（彼の父は醫者で、彼の祖父は補祭であつたから。）はアレキサンドル帝時代『アルザマス』その他の時代以來我が文壇を支配した貴族的精神を挑發した。その暗黑、隱微な時代には、文界その他に於て、あらゆる批評の起りは重に浮説であつた。今日でも浮説はその意義を全然失つたわけではないことは勿論である。

それは只充分に公開せられた自由の光りの裡に於てのみ消滅するのである。ビェリンスキイに關しても直ぐに假構の說が全部出來上つた。世間は、ビェリンスキイは、不品行の爲め、當時の學監ゴロフワストフにより、大學を放逐せられた、生意氣な官費學生であるといつた。(ビェリンスキイと不品行！) 又世間は彼の容貌は最も恐しい、どこやら苦蟲を嚙み潰したやうで、その敵に簇け〻爲めに養成せられた、ブル犬の面に似てゐると信じた。そしてまるで叱つてゞもゐるやうに、執拗に彼を『ビェルインスキイ』と稱んだ。稀には彼にとつて利益な聲も聞えたことは本當だ。たとへば當時殆ど唯一の大雜誌(トールスウイ●ジウルナル)の發行者が彼を評して、彼は爪をもつた小鳥、活潑な小兒で、文壇の名簿に加へるのも惡しぐはなからうといつて、遂に、それを實行して、雜誌の爲めにも、發行者自身の爲めにも大成功を博したことは人の記憶するところである。私が文學者としてのビェリンスキイと昵懇になつたのは次のやうなことからである。

ベネヂクトオフの詩集が一八三八年に發表せられた。それは表紙に唐草模樣のある小型な本で、創作家、批評家、青年達の間に非常な感動を惹き起した。私も他の者に劣らず、此詩集に陶醉して、そのうちの多くの詩を暗記し、『岩』、『山』、又立派な駿馬にまたがつた『マチルダ』に

さへも狂喜した。然るに或る朝、仲間の大學生が、菓子屋のベランジエに、ビェリンスキイの論文の載つた『テレスコープ』が出てゐるが、その論文で、彼、『批評家』は私共の偶像に手を觸るゝ大それたことをやつてゐると、立腹して、知らして來た。私は直ぐにベランジエへ行つて、其論文を始めから終りまで通讀しだ。そして勿論同樣に腹を立てた。けれども不思議にも、讀んでゐるときも、又讀み終つた後も、不本意ながら私は『批評家』に同意し、彼の所論は尤で、反對し難きことを發見して、窃に驚き、且つ怒つたのであつた。私は此全く豫期してゐなかつた自分の感じを恥ぢて、此内部の聲を押し默らせようと努めた。友人仲間に向つては私はビェリンスキイ自身や、彼の論文について一層激烈な批評を加へてゐたのだが、心の奥底では何者かゞ、ビェリンスキイのいふのは本當だと、矢張り囁いてゐた。幾何かの時が經過した。すると私は最早ベヂクトオフを讀まなくなつた。今では、當時ビェリンスキイの言つたこと、無禮な暴言と思はれたことが、英人の所謂るnaïvetéism(自明の理)として、何處でも萬人に承認せられてゐることを、誰か知らぬであらう？我々の子孫は他の多くの同じ判決に署名したと同じく、此宣告に承認の署名をしたのであつた。ビェリンスキイの名は既にその時以來、私の忘れ得ないものとなつたが、親しく知り合ふに至つたのは猶ほ後のことであつた。

私の小さな詩『バラシヤ』が發表せられたとき、私は當時、ビェリンスキイに會ふ爲め、田舍へ向つて、ペテルブウルグを發つたのだ。(私は彼が何處に住つてゐるかを知つてゐたけれど、それまでは訪問したことはなく、たゞ知人の宅で二度彼と出會つたきりだつた。)それから姓名を告げずして、彼の家人に詩集一部を渡して歸つた。田舍に私は約二ヶ月を過した。『オテチエストヴエンヌイヤ・ザピスキイ』の五月號を受取つて、私はそれに載つた私の詩に對するビェリンスキイの批評を讀んだ。彼は、私が嬉しく思ふよりも、寧ろ當惑した程私の詩を褒めて、熾に稱揚したことを記憶してゐる。私は信じられなかつた、そしてモスクヴで、故キーレエヴスキイが私に祝辭を述べに來たとき、『バラーシヤ』の著者は自分ではないと、實子の否認をしてしまつた。ペテルブウルグへ歸つてから、勿論私はビェリンスキイのところを訪ふて、それから我々の交際が始まつた。彼は間もなくモスクヴへ發つて行つた、それは結婚の爲めで、そこから歸つて來ると、レースヌイの別莊に落着いた。私もバルゴロフの別莊を借りて、その年の秋まで殆ど毎日のやうにビェリンスキイを訪ふた。私は衷心から、深く彼を愛した。彼は私に親切であつた。

私は彼の容貌を書かう。

或る版畫の、恐らく只一つしきやない彼の肖像は、彼に就いて誤つた觀念を人に抱かせる。彼の姿を描くのに、畫家は精神の躍動、性質の修飾を爲して、次には威風あたりを拂ふやうな表現、何にやら軍人的で、殆ど將軍のやうな風彩、不自然な姿勢、ビェリンスキイの性質にも習慣にも少しもそぐはぬ、全然眞實でないものを描かうと頭をしぼつてゐる樣が見える。ビェリンスキイは中丈で、一見かなりに醜い、不揃ひとさへ見へる、病身らしく、胸の平たい、伏眼勝な人であつた。一方の肩胛骨は他の方よりは突き出てゐた。醫者でなくとも此人は肺病に罹つてゐると、直ぐに氣付く程、此惡疾の症狀があらはれてゐた。のみならず彼はしよつちう咳をした。彼の顏は小さく、蒼く、紅味を帶び、鼻は押し平められたやうに形が惡るく、口は稍歪み、特に開いたときにはそれが甚だしく、齒は小さく、密生してゐた。厚い、ブロンドの髪は、低いけれども、白く、美はしい額に、房々と垂れ下つた。私はビェリンスキイの眼程美しい眼を見たことがない。瞳の底に黃金の光りをもつ、淺碧りのその眼は、普段は睫毛に半ば閉されてゐるが、氣が張つてきた時には豁然と開かれて、敏捷に動くのだつた。愉快な折りの眼付は慇懃な人の好さと、憂ひない幸福とを表はした。ビェリンスキイの聲は不滿を含んで低か

つたけれども、氣持よかつた。彼は口早に、顫へながら、片意地で、妙な强調(アクセント)と脣音とを以て話した。彼は小兒のやうに心(しん)から笑つた。彼は美しい、小さな手の指でもつて、露西亞煙草の入つた嗅ぎ煙草入れを彈きながら、室內をあちこちと歩きまはるのが好きだつた。厚い緣無し帽子を被り、古びた熊の皮の毛外套(シューバ)を着て、くちや〳〵な外覆靴(ゴロシュ)を履いて、急ぎ足に神經質なあるきやうをして、塀際に沿ふて通りながら、物怯ぢしたやうに、行きかふ人をふりかへる、路上の彼を見たゞけでは、決して彼について正當な觀念をもつことができない。私は或る田舍者が、彼を見て恁麼ことをいつたのを記憶してゐる——『私は森の中で狩のとき、こんな狼を見たつきりだ！』途中、見知らぬ人の間では、ビェリンスキイは怯びえ、且うろたへた。家に居るときは、大抵彼は綿の上から灰色のフロックコートを着て、醜張りとしてゐた。彼の發音、姿態、動作は彼の人となりをよくあらはした。彼の習癖は全然露西亞式、又モスクヴ式であつた。純粹な血は徒に彼の筋肉に流れなかつた。是が幾百年間外國血統の影響を受けなかつた我が大露西亞の屬性である。

ビェリンスキイは、我々の國には珍らしい程、眞に感じ易い、又眞に誠實な人で、熱烈であ

るが、非常に眞理に忠實で、怒りつぽいが、無私で、公平に愛し、公平に憎むことが出來たっ無暗に彼を非難する人々は彼の不躾を立腹して、彼の粗暴を責め、筆を揮つて彼を排斥し、彼を誹謗してまはつた。恁麼人達は、此シニカルな人間が羞恥と見える程の淸節、柔弱な位の穩なしさ、古騎士にも等しい廉直をもつてゐると知つたら、本當に吃驚するだらう。此最後の點では、彼は當時のモスクヴ人に似なかつた。ビェリンスキイが他人に對し、亦自己に對してどれ程誠實であつたかを想像することは出來ない。彼は單に自分が之は眞理である、自分の主張にかなふものであると認めたことだけを思ひ、行ひ、且つ生活したのだつた。此處に一例をあげやう。私が彼と昵懇になつて間もない頃、解決がつかぬか、乃至は一面の解決を受けるかしても、人、殊に青年には安心を與へない問題、卽ち人生の意義、人間相互の關係、人と神との關係、宇宙の發生、靈魂不滅其他の問題が再び彼を煩はし始めた。外國語を一つも知らない上に（彼は佛蘭西語でさへ讀むのに非常に困難した。）彼の試みに滿足を與へるやうな露語の本が一つも無いので、ビェリンスキイは止むを得ず友人達と、始終、解說、批判、質疑の爲めに話をしなければならなかつた。そして彼はその眞理を渴仰する魂の、病(おこり)のやうな熱誠を彼等に披瀝した。斯麼方法でもつて、猶ほモスクヴに居るうちに、彼は當時青年の心を絕對に支配して

るたヘーエル哲學の辯證と、術語さへも收めて自家のものとなした。勿論其間には誤りもあつた、嗤ふべき誤りすらあつた。ビェリンスキイの先生株の友達自身が拙劣淺薄に、これを解して傳へたこともあつた。けれどもゲーテが言つた如く

Ein guter Mann in seinem dunklen Drange
Ist sich rechten Weges wohl bewusst……

（善人はその窃やかな憬れに於て、その正しい道を知る。）

ビェリンスキイは正しくその善人であつた。正しく、正直な人であつた。其場合彼はその天賦の本能によつてそれに到達した、然り是について前以て一言して置くが、私がビェリンスキイと知己となつた時、彼は疑惑に苦しんでゐたのだ。それで此文句を私は屢々聞き、又自分も一再ならず用ゐた。然し實際、之は全然ビェリンスキイ一人に適合したものだ。疑惑が彼を苦めた、彼から眠りと、食事を奪つた、絶えず彼を嚙み、彼を締めつけた。彼は自分に忘却を許さず、疲れを知らなかつた。彼は日も夜も自分が自分に與へた問題の解決に苛まれた。私が彼を見舞ふや否や、痩せ衰へてゐる病氣の彼は（彼は當時肺炎を患つて、殆ど死ぬところだつた。）直ぐに寢臺に起き直り、辛くも聽きとれる聲で、始終咳きをしながら、頻に神經的な紅味

を帶び、胴は一秒百を算へるのに、前夜中止した會話（はなし）のあとを續けるのであつた。彼の誠實は私を動かした、彼の熱情は私に通じ、事柄の重大は私を興奮さした。けれども二三時間も話してゐると私は弱つた、青年の浮氣な心が起つた、私は休息したく思つた、私は散歩や、食事やを思つて、ビェリンスキイの妻君さへ、少しでもいゝから待つてくれ、一寸でもいゝから此爭論を罷めて下さいと、その良人や私に懇願して、良人に醫師の戒めを注意した。けれどもビェリンスキイを落付かせることは容易でなかつた。——『僕等は未だ神の存在に關する問題を解決してゐない』——と、彼は或る時苦々しさうに反抗した。『それだのに貴下は喰べたがつてゐるのだ！』こんな詞を書いたら、私は、讀者の多くが顏に微笑を浮べるだらうと想ふ。然し如何にビェリンスキイが是等の詞を發したかを自ら聞いた人には、笑ふべき考へなどは頭に起らぬだらう、又此可笑なことを想ひ出して、微笑が口のあたりに浮ぶならば、それは恐らく憐憫と驚嘆の微笑であらう。

當時滿足な結果を僅かに得るや、ビェリンスキイは沈着いて、此重大な問題についての考察を延引して、常の仕事に立ち戻つた。私とは特に悅んで話した。その理由は其頃私は半學年宛二度、伯林にゐて、ヘエゲル哲學を研究して居つた當座で、最新、最近の議論を彼に傳へられ

る位置にゐたからである。我々は當時未だ哲學や形而上學の効果の重要なことを信じてゐた。尤も彼も又私も決して哲學者ではなく、純粋に又抽象的に獨乙風の思索の爲すべき手段をもつてゐなかつた。却て當時我々は哲學の中に、純然たる思想以外に、世界にありとあらゆるものを搜し索めたのであつた。

ビェリンスキイの智識は廣汎でなかつた。彼の知るところは僅かに過ぎなかつたとしてもそれはちつとも怪むべきことではなかつた。彼は仕事を好まず、怠けてゐたのに、敵でさへ彼を責めなかつた。然し彼の貧乏は彼を窘しめ、教育の足りなさと、不幸な事情と、早くからの病氣と、次にはパンの爲めに急いで仕事をする必要など、悪魔ちのが皆積つて、ビェリンスキイが正確な智識を得る妨となつた、尤もたとへば露國文學の如き、又その歴史の如きには彼は精通してゐたのである。然し乍ら、私は更に進んで斯う言ひ度い、此智識の不足は此場合、性格上の徴標であつて、殆ど必然なものであると。ビェリンスキイは私の所謂る中心的性格と稱ふ人であつた。彼はその全存在を以て、その國民の中心に近く立ち、國民を充分に、その善悪兩方面に於て現した。學者とは『教養ある人』であると私は云はない、是は別な問題である、學者はそ

の學問の力で四十年の間に、斯くの如く露國の中心的性格とはなり得まい、學者は、彼が働かねばならぬ範圍の中心に自分を適合せしめることは不可能であらう。彼は彼、中心は中心だけでそれ〴〵相違した關係を有するだらう。そこに調和があるまい。眞に相互的の理解があるまい。社會的、美學的批評、批評的自覺の業に於て現代人の指導者は（私の說は一般に適用せられるやうだが、此場合私は單に此一面に限るのだ。）私は言ふ、當代人の指導者は勿論、民衆よりも抽んでゝ、一層整つた頭をもち、一層眼が明かで、性格が一層確固としてゐなければならぬが、此指導者と追從者との間に深溝があつてはならぬ、換言すれば、追從者は或る方面への進行と、堅固な結束の可能を信ずべきものである。指導者は、彼が驚かし、騒ぎ立たせ、押進める人々に怒りを發せしめることもある。人々は彼を詛ふもいゝが、常に彼を理解しなければならん。指導者は追從者よりも一段高く立たねばならん、けれども又彼等に接近してゐなければならん。彼は追從者達の資質や天賦を分有するばかりでなく、又彼等の不足を滿たしてやらねばならん。彼は自ら此不足を最も深く、且つ最も大きく感ずるのだ。センコヴスキイは比類なき大學者であるが然し、私は此處ではビェリンスキイよりもと言つてゐるのではなくて、彼と同時代の露人の大多數よりも學者であつたといふのである。然るに彼は如何なる結果を殘し

たか？私の知るところでは、彼の事業が不結果、有害に終つた所以は彼に學問があつたからではなく、却て彼が確信をもたず、我々にとつては外人であつて、我々を理解せず、我々と同感しなかつたが故である。けれども之に對して私は何の議論をも試みまい。併し彼の懐疑主義そのもの、彼の見掛け仆し、醜怪、彼の無禮な嘲笑や、衒學、冷淡等、總て彼の獨自性は、學者、專門家の場合と同じく、その目的も又同情も、社會大多數のものとは違つてゐる源から發するらしく私には見えるのである。センコヴスキイは獨り學問があつたばかりでなく、彼は賢く、奇智があり、快活であつた。若い文武の官吏は、特に地方のものは彼に感激せしめられた。けれども讀者の大多數にはそれは必要でなかつた。彼等に要したものは、批評的、社會的の感覺、趣味、時代の要求より日常必須な理解、別して小さな、愛と、熱である。然るに彼にはその痕跡だも認められない。彼は窃かにその讀者を無學と輕侮して、彼等を顧みなかつた。すると讀者の方でも彼を顧みず、ちつとも彼を信じなかつた。私は無智蒙昧を辯護し、又は推稱する積りではない。―私は只我々の意識の發達に於ける生理學的事實を指示するだけである。その種族の指導者、その國民の代表者たらんが爲めには、レッシングの如き人たらんものと殆ど一切を包括する程の學問を有したのでなければならん。即ちその人に國民の意志があらはれ

そのうちに種族の聲の見出さるゝ人でなければならん。レッシングは獨逸の中心人格であつたことが判る。併し或る程度まで露國のレッシングと稱んでも差支えのないビェリンスキイは、思想と光輝の點よりして、その權威の、獨逸大批評家の權威を偲ばするものかある。彼はレッシングと同じ事を爲し得た、しかも大きな學問の造詣なしにそれを爲すことが出來たのであつた。彼は大ピット（ロード・チヤサム）を其子小ピットと共に嗤つた――何たる不幸ぞ！『我々は皆何物かを若干宛、どうにかして學んだ』……彼は爲すべきことを、充分に知つてゐた。彼が時處の如何に拘らず常に文化の爲めに働いたその熱心、その感情は、若しも彼自らが無智蒙昧のあらゆる苦惱を經驗しなかつたものとすれば、何處から彼はそれを持つて來たのか？獨逸人はその國民の缺陷を、その害毒を熟考、承認して、矯正せんと努める。露國人はなほ永くそれによつて惱まされるのだ。

ビェリンスキイが大批評家の資格を備へてゐたことは言ふまでもない、又科學や、智識のことでは彼が友人達から借りものをして、彼等の詞を信じたにしても、批評については、彼は誰にも訊いたことがなかつた。却て他の者が彼に聽き、先鞭はいつも彼がつけることになつてゐ

た。彼の美感は殆ど謬りがなかつた。彼の眼は常に深く、鋭く決して晦まさるゝことが無かつた。ビェリンスキイは皮相や、外觀に欺かるゝことなく、何の勢力、何の思潮にも盲從しなかつた。彼は直に美なるもの、醜きもの、眞なるもの、嘘僞なるものを辨別し、大膽に自家獨自の批判を下した。充分に、省略するところなく、熱烈に又力强く、說得せんとあらゆる努力をもつて批判を下した。上手の手からも水の漏るやうな批評の謬りを見た者は、(ボゴドチンのマールフワ・ボサヅエッアの中には「どこやらシエークスピア式のものがある」と言つたブウシュキンすらも想ひ起す價ひがある。)ビェリンスキイの正鵠を射た批判、眞實な趣味本能、彼が隱れたる意味を看破する巧さに對して、尊敬の念を起さゞるを得ない。彼が其論文で我々の過去の詩歌にそれ〴〵適當な位置を與へたことについては私は最早や言はない。又それによつて現在作家の意義が決定せられ、彼等の活動の總計、前述の後繼者(ビエリンスキイのマルリンスキイ、バラチンスキイ、サゴースキン等に關する論文を見よ)に受け入れられ、勢援せられた總計が締め上げられる論文についても私はいふまい。けれども新たな天才、新たな小說、詩歌、物語りが現はれたとき、誰もビェリンスキイに先だち、彼よりも上手にその眞價を、切實、的確なる詞で言ふ者はなかつた。レェルモントフ、ゴーゴリ、ゴンチャローフ——最初に此人々をあげ、彼等の意義を說いたのはビェリンスキイでは

なかつたか?他に亦幾人あつたらう!ビェリンスキイの批評的診斷、立派な觀察の一つである『文學雜誌』に、無名でかゝげられた、商人カラシュニコフといふ詩について、彼が爲した小さな傍註は未來の偉大な著者を豫言したもので、覺えず驚嘆しないではいられないものだ。同じやうな描寫はビェリンスキイのものに斷えず發見することが出來る。私は玆に一例をあけよう。一八四七年『オテチェストヴェンヌィヤ・ザピスキイ』誌上にグリゴロヴィチ氏の『村落』といふ物語があらはれた、之が丁度我々の文學を國民の生活と結び付ける最初の試みで、我々の「村落物語」Dorfgeschichten 最初のものである。その話は幾らか洗鍊せられた言葉を用ゐて書かれ、センチメンタールなところがないでもなかつた。けれども百姓の生活を如實に複寫せんとした努力であることは疑ふべくもなかつた。氣質のよい、けれども極端に輕卒でほんの皮相のみを見る故イ、イ、バナーエフは『村落』の或る二三の可笑しな表現にとらはれ之を冷評す機會を得たことを悅び、話全體に對して嗤笑の聲をあげ、或る二三友人の家でそれを朗讀さへした。彼の意見に從へば、それは最も變手古な、おかしなものであつた。けれども彼の驚きがどうであらう?、哄ふた友人の當惑がどうであらう?、ビェリンスキイはグリゴロヴィチ氏の話を讀んで、啻にそれが最も重要なものであることを見出したばかりでなく、又直に

その意義を決定して、その後間もなく我々の詩文に起つた彼の革命、彼の運動を豫言したではないか?、そこでバナーエフには只一つの爲すべきことが殘されてゐた、それは『村落』の斷簡を續けて讀むことであつた。けれども彼はその時には既にそれに魅入られて、讀んだのであつた。

私は序に、當時、事務的才幹にめぐまれた割に、審美的の能力には侮辱せられた部厚な雜誌の一發行者が、一再ならずしてやられた誤魔化しについては此處で言はずに濟ますことが出來ない。その一例をあぐれば、ビェリンスキイの仲間の誰かゞ新らしい詩を持つて來て、自分の拂つた犧牲について前以て何にも言はず、何處にその詩の精髓があるから、朗讀の價値があることをも告げずして讀んだとする。最初口調は反語的に進んで行く。すると發行者は此口調から推して、無趣味な、馬鹿げた詩の雛形をみせられてゐるものと合點して、冷笑を浮べたり、肩をすぼめたりしだす。その時、朗讀者がその調子をいくらか皮肉から眞面目に、重々しく、又愉快なふうにかへる。すると發行者は、自分は間違つた、そんなふうにさとるのではなかつたと思つて、如何にも立派だと、褒めるやうに頷き、頭をふり、時々掛聲さへするのだ—『うまい!結構だ!』その時、朗讀者が又冷笑するやうな調子になつて、一旦聽者を元へ引き戻して

置いて、再び愉快な氣分に移つて行くと、聽者は又もや褒めそやすのである。若しひよつと詩が長いことがあると、指の使ひやう一つで、その表現が自由に變化せられる、ゴム毬の玩弄にも似た變態が、幾度も〳〵起るのである。結局不幸な出版者はすつかり眼が眩んで、最早ひどく表情に富んだその顏に、贊成した樣も、又賓斥の狀も、ちつとも表はさなくなつてしまふのであつだ。然しビェリンスキイは頑强な、神經の持主でなかつた上に、斯ういふことにかけて修業を積んでゐなかつた。おまけに彼の正直は餘りに大きかつた。彼は冗談の上にもその正直を枉げることが出來なかつた。けれども彼は既述の誤魔化しが告げられたとき、涙を流して哄つた。

批評家としてのビェリンスキイの性質で、他に著しいものは、轉機に際してゐるもの、即座に解決を要するもの、『當時の邪惡』といはるゝものを理解することであつた。時ならぬ客は韃靼人よりも惡いと、諺に言ふ、時ならぬに告げられた眞理は嘘僞よりも惡い、時ならぬに起された問題は只混亂錯雜するのみである。ビェリンスキイは決して、才氣に長けたドウブロリュボフの陷つた誤りを、彼自ら套襲しなかつたゞらう。例へば彼はカヴール、バーマーストンを

一般に議會政治を不完全な、それ故に信頼し得られぬ統治の形式として偏窟に非難するやうにはならなかつたゞらう。カヴールに向けられた非難の當つてゐることを許容しながらも、彼は斯る攻撃は總てその時機を得てをらぬ事（我々、露國では一八六二年に是があつた）、を知つただらう。彼はどんな黨派に彼等が仕へねばならんか、彼等を悅ばす者は誰であるかを知つてゐたゞらう。ビェリンスキイは、自らがその中心に位置して、働いた事情の下では、純粹な文學評論の範圍から踏み出してはならないといふことをよく知つてゐた。第一、當時の官民、檢閲の狀態に鑑みれば、それ以外の行動は困難であつた、既に、我々の僞クラッシック主義の著者達が彼の非難に憤激して、彼を脅嚇し排斥する暴風の荒らびに、彼が反抗するのでさへも、殆ど疲勞を感ずる程であつた。第二、彼は、各國民の發展に於て、文學的時期が他の時期に先つことを明かに見、且つ悟つてゐた。それを通過し、それを征歴した上でなければ、進歩は不可能で批評は嘘僞を非難する意味に於て、文學に於ける諸現象の解剖を先づ行はねばならぬ、則ち斯くすることにこそ批評本來の職分があると彼は思つたのである。彼の政治的、又社會的信仰は非常に力強く、又決定的に鋭利であつた。けれどもそれは本能的の同情又は嫌惡の範圍にとゞまつた。私は繰り返して言ふ、ビェリンスキイは、斯る信仰を應用し、又實行に導くことを考ふ

べき必要はないと悟つてゐた。その上若しそれが可能であるとしても、彼自らに充分な準備もなく、又それに對して必要とする氣もないのであつたらう。彼は此事をも知つてゐた。彼は獨特な自己の位置を實際に知るものから、彼自らその活動の周圍を限り、それを或る範圍に縮めたのであつた。それ故に彼が文學批評家として立つたのは、英人の所謂る『適材を適所に置いた』もので、是以上彼を適切に言ひ表はす辭句は他にない。それ等の問題は一層困難で、一層錯雜してゐたのは本當である。その死する少し前、ビェリンスキイは新たな路を取り、そのせゝこましい周圍を立ち出づべき時機が到來したと感じ始めた。政治經濟の問題は、審美的文學的の問題と交代せねはならなかつた。併し彼自身は既に身を退いて、その後繼者を他人—詩人の兄弟ヴェ、エヌ、マイコフーに名指したのだつた。不幸にして此才幹の秀でた青年は、その出世の冒頭に於て世を去つて、多くの有爲な青年の他の一人、デ、イ、ピーサレフが近頃失くなつたそのまゝの死樣をしたのだつた。

ピーサレフの名は私に下のことを想ひ出させる。一八六七年の春、私がペテルブウルグを通つたとき、彼は私を訪ねてくれた。私はその時まで彼と會つたことはなかつたが、彼の論文はそのなかの樣々なことや、大體その傾向が私の意見とは合はなかつたけれども、興味を以て讀

んでゐたのであつた。特に彼がプウシュキンに關して書いたことが私を激せしめた。會話のうちに、私はざつくばらんに自分の意見のあるところを彼の前に披瀝した。ピーサレフは一見、正直な、賢い人で、斯る人に對しては單に眞實を話し得られるのみでなく、又話さなければならぬ人のやうに思はれた。『貴君は、』と私が口をきつた、『プウシュキンの詩中最も悲壯な一つを泥土の裡に踏み墜しました。貴君は、詩人は只讀者に讀めよ、悲みに醉ゐよと忠告すべきものと御信じですね。貴君の美感は餘りに生き〳〵してをります。貴君は之を眞面目に話すが出壯來ませんでした。貴君は之を目的をもつて、態とお話しになりました。貴君が此目的を實現なさつたかどうか見ませう。私は誇張を理解してゐます、私は漫畫を許します、然しそれは眞理の誇張、思想の働いてゐる、眞實を目指してゐる漫畫です。若し私共のうちの青年が、單に詩が書いたことを、曆のなかの祝福せられた時節に於けるが如く書いたと致しましても、私は理解もしませう、御好みとあらば、貴君の惡意ある叱責、貴君の嘲笑を是認さへも致しませう。私は思ふでせう！間違つてはゐるけれど、有益だと。失禮ですが、貴君は一體誰に向つて、まるで雀のやうに、惡口を爲さるのですか？私共のうちには五十歳又はそれ以上で、まだ詩作をやつてゐる老人が、みんなで三四人居ります。そんな人は攻擊に價しますか？まるで他には、

記者として、貴君が何よりも先に、缺くべからぬ、必要な、打ち棄て置かれぬとお思ひなさるもの——一般の注目を惹くようになさらねばならぬものが幾千もあることが分つておいでならぬやうですね。一八六六年の詩人に對する攻擊！おまけに是は古臭い陳腐な攻擊、擬古主義です！ビェリンスキイは決して斯る困難に陷りはしませんでした！』ピーサレフが何と思つたかは知らないが、彼は何とも私に答へなかつた。まつたく、彼は私に贊成しなかつたのだ。

ビェリンスキイが彼の時代、彼の使命に對する理解はその論文の言々句々に滲み渡る彼の確信を妨げなかつたことは勿論である。彼が批評家としての消極的の行動は彼が政治の發達した社會に於て、同じ役割を演じたと假定しても、是以上に及ばなかつたらうと思はれる程、適當なものであつたことも、疑ふべき餘地がないのである。彼が何を感じたか、又何と思つたか、それは彼獨りのみが知つてゐたことで、彼が二三の友人も又それを知つてゐた。然し彼が爲したこと、彼が出版したものは、執拗に、又嚴然と文壇に根を卸ろして、文壇と共に絕對に進步して行つた。只一つの手紙に、レェルモントフが——

……夜の暗に

涙と惱みとにはぐゝまれて、

ビェリンスキイの回想

と詠じた熱火の迸り出るやうな感情が、あらはされてゐる。

私は此處に、讀者に對して、私が一八五九年僅かな人々の集會で朗讀したプウシュキンに關する講演の拔萃を挿入することの御許しを願はう。三十年、四十年代の性格を叙述するのに、私はゴーゴリの諷刺詩、レェルモントフの抗議を記して、後にビェリンスキイ（此名を一つ言ふと私の聽者の大多數が腹を立てる。）の批評の意義に移る必要がある。此處にその斷片がある。（私は遠まはしに始めるけれど、是は止むを得ない）

我々の偉大な藝術家（プウシュキン）が仲間を去つて、出來るだけ國民に接近し、その秘藏の創作を想つてゐた間、一方彼の心には、それの研究は、只彼一人のみが、我々に國民的の劇と、國民的の史詩を與へ得るのではあるまいかと、そゞろに思はせる形式が浮んだ。卽ち我々の社會、我々の文學に於て、よしや偉大とは行かないまでも、注意すべき事件が起つたのである。歐洲當時の（一八三〇年から一八四〇年頃）生活の特殊な狀態、特殊な機會の影響を受けて、我々の確信——勿論公平な、けれども此時代には恐らくは尙早な——が幾分か出來上つた。我々は嘗に偉大なる人民たるのみならず、又偉大な、全然自己を確實に支配してゐる國民

であつて、藝術に、詩に此偉大さ、此力の價値ある先驅者たるべしとの確信が出來た。此確信の普及と共に、又恐らくはそれに喚起せられて、疑ひもなく天賦があると同時に、彼等が共鳴を以て奉仕した、かの偉大ではあつても、純然たる外部的な力にふさはしい、普通な外觀や、修辭をすへも其天賦としてもつ一團の人材が出現した。此種の人々は詩歌に、繪畫に、新聞雜誌に、又劇壇にさへも現はれた。玆に彼等の姓名を羅列する必要があるまい。彼等は皆各人の記憶に存するではないか？靜寂が沈默したプウシュキンの周圍に起つた時、誰が拍手せられ、誰が喝采せられたかを憶ひ出せば足りるのだ。我々が『僞壯重主義』とでも稱ばうかと思ふ社會生活への闖入は長くは續かなかつた、尤もその發現は固有な文學藝術の領内に於けるよりも、批評の解剖を受けることの少ない區域内では、今日に至るもなほ歌みはしないのだ。それは永續しなかつたが、何たる騷々しさであつただらう！どれ程廣く此流義が當時は弘まつたらう！その運動者の或る者はお芽出度くも自らを天才と認めた。それと共に、或る不眞實なもの、或る打ち果つべきものが、その最も殷盛の觀を呈した刹那に於てさへも、その中に存在することが感知せられた。又それは生きて、獨立した智惠を一つたりとも恢復し難きまでに打ち敗ることが出來なかつた。此一派の產物は、自贊に陷る程な徹底的自信で露國の名譽に貢獻すること

であつたが、それがどんなことであるにしても、その本質の中に一つも露西亞的のものを持たなかつた。是は一種デモクラシーの普及、騷々しく、輕卒にその原因不明な、愛國心に煽り立てられて弘まつた或る裝飾に過ぎなかつた。こんなものが皆鳴聲し、絶叫し、自己を以て大國家、大國民にふさはしい裝飾だと思つた、けれども没落の時節が到來した。然しブウシュキンが晩年ものでない深遠な藝術的の作は此主義没落の原因を爲したけれどその諸作が彼が生存中に發表せられたとしても、當時の狂氣した一般に尊ばれたであらうかを我々は疑ふものである。之れは爭論の用には立たなからう、それはその特有な美をもつて、此美と力とが、かの僞壯重派的幻影の醜さと、弱さと對照せられることによつて勝利を繫ぎとめ得たらう、否繫ぎとめ得たのであつた。けれども最初は此幻影の衣を剝いで、その虛しさをあらはす爲めに、それよりも異つた武器、異つた一層猛烈な力――バイロン式情熱の力が必要であつた。その力は既に一度び我々のうちにあらはれたものであるけれども、淺薄、不眞面目に、批評の力、滑稽の力としてあらはれた。又その武器は出現することを躊躇しなかつた。藝術家の立場でゴーゴリが語り始め、彼と共にレェルモントフが語つた。批評、思想の領域で是を爲したのがビェリンスキイである。

『……貴君方と我々が過般會談の折、將來の文學歷史家がプウシュキンの出現に附與する意義について私はお話した。併し、我々の注意を惹くのは、マコレエフ（若し、我々にはマコレエフだけを持つべきものと許るされてゐますなら）である。次には――一方には騎兵の士官であつて、その口から、社會は嘗て聞いたことのない、苛辣な非難を聞く、人生の獅子と（譯者――プウシュキンのこと）それにその額には「顏が歪んだとて鏡を怨むな。」と、警句を書き附けた、その恐ろしい喜劇をもつ、憂鬱な小露西亞の先生（譯者――ゴーゴリ）が立ゐると、他方には、我々はなほ文學をもたない、ロモノソオフやペトロオフばかりでなく、デルジャアヴィンも、ドミイトリエフも我々の模範とはなり得ない、最近の大人物達は何事をも仕出かさなかつたと、圖太い公言をする矢張り目先の暗い、半可通な學生（ビェリスキイる）が代表して立つてゐた時代が我々の注意を惹くのである。恐らく御互にその働きを知り合ふ此三者協力の下に、嘗に我々の所謂る僞壯重派と文學者連の一派が癈頽したのみでなく、他の多くの、老衰した、無價値なものが崩壞に歸したのでらう。勝利は速に決定した。此時まで新運動者達がさしも滿ちたる愛を以て取り卷いてゐた、彼等自身にとつて尊き名であつたプウシュキンの光輝も薄れて減少した。彼等が、意識的に又無意識的に奉仕した理想は（ゴーゴリは人の知る

とほり、最後まで理想から遠ざかり、これを拒絶した。)此理想は、彼等自身に反してブウシュキンの理想と相携えて存立することが出來なかつた。物的力は分離した人間の、いかなる力にもまさつて強いのである。それは丁度私共に於ては概して私共獨自の傾向よりも強力であると同じである。純眞な詩の時代は、僞壯重派の時代と同樣過ぎ去り、批評、討論、諷刺詩の時代が到來致した。「到來した」といふ詞の代りに、我々はフォンヴィジインや、ノヴィコオフを想起して「還つて來た」とも言ひ得られるだらう。同樣な、歷史の環の輪轉に伴ふ「回歸」は、國民生活の觀察者達には皆知られてをる。ふと己れの不滿をさとつた社會は、他の、未來に於て一層苦がい、幻滅の不滿を豫感して—それは起つたのである(私が此講演をしたときは一八五八年の巴里の平和から未だ三年を經てゐなかつた)—新たな聲を貪り聞き、只その新たな要求に、何と答へるかといふことだけを受け入れた。クウコリニイクの「トルクワート・タッソオ」「至上者の手」(又石鹼玉のやうに消え失せはしたけれども「鎭鍮の騎馬者」、がある)等は、「大外套」と同じ時代に愛賞せられ得なかつたのである。

次の詞でゴーゴリとレェルモントフの詳細な特質が充分に認められやう——

『嘘僞に對し、俗惡に對し、——併し社會の何れの階級に於てか俗惡がなからうか?——此僞社會的な、不正當に定められて、人を心服せしめる合理的な權利をもたぬことに對して、獨立とに不羈で、批評的、反抗的な人物が謀反を起すのである。』と云つて、私は斯う續けた——

『私共は諸君に今お願ひ申して、諸君の耳に佳き響きをその名がつたへない、第三者のこと言及するお許し願ふ。私共はビェリンスキイのことを話したいのである。此名には或る情熱の回想が伴ふ、然し私共は敢てその偉業を想起するのである。彼の言葉は今日も生きてをる。我々は、渴望を以て今彼の詞を讀み、(丁度當時彼の全集の初めの諸冊が出たばかりであつた。)露國は彼に對して、全然正しい愛をもたなかつたことを認めざるを得ない。我々が彼のことを言ふのは、彼と箇人的交誼がある爲めではないのである。我々は彼の行爲の原則そのものに諸君の注意を向けられんことを望むのである。此原則に冠せられる名は、理想主義である。ビェリンスキイは詞の最上の意味で理想主義者であつた。彼の中には三十年の初めにあつて今、にその痕をとゞめるかのモスクヴ社會の傳統が生きてゐた。獨乙哲學思想(此思想とモスクヴのそれとの間に於ける不斷の連絡は著しい)の强大なる影響を蒙つた此社會は特に歷史家の注意を要するところである。此處からビェリンスキイは死に至るまで拋てなかつた彼の確信——彼が奉

仕した彼の理想を得たのであつた。此理想の名に於て、ビェリンスキイはプウシュキンの藝術家的意義を宣明し、又そのうちに民本主義の缺陷を指摘した。此理想の名に於て彼はレェルモントフの抗議も、又ゴーゴリの諷刺をも歡迎した。此理想の名に於て彼は古き權威、我々の所謂る光榮――そのものについて彼は歴史的見地から見ることも出來ねば、見ることをさ欲しなかつた――を破壞した……』

恐らく或る讀者は、私がビェリンスキイを特性づける必要上、『理想主義者』と言つた詞に驚いたどらう。それに對して私は言ふ、第一に、五十九年には眞にその名を多くの物に附けることが出來なかつた、然し第二には、私は自白する、私には、ビェリンスキイの名を以て、直ちにシニカルな、深い唯物主義なぞといふ觀念を形造くる人々の集會する席上で、彼を『理想家』と、說明することが、私自身に對して尠からぬ喜悅を與へたからであると。その上に又同樣な名が彼に臨むのである。ビェリンスキイは否定者であると同程度に、理想家であつた。彼は理想の名に於て否定したのである。此理想は科學、進步、人道、文明、とゞのつまりは西歐的と今まで、種々樣々に名付けられたし、又名付けられもするのではあるが、最も決定的な、又純

一な本質であつた。善い心をもつてはゐるけれど、親切氣はもたぬ人々は革命といふ詞をさへ用ゐる。然し肝要な事は名目ではなく、明白にして、疑ふべきところなく、又それについて、傳播する價のない誤解の有り得べからぬ、その本質に存するのである。ビェリンスキイは此理想に自身を捧げて仕へた、あらゆる同情、あらゆる行動により彼は、その敵の所謂る『西歐人』の陣營に身を投じた。彼は西歐の科學、西歐の藝術、西歐の社會組織がすぐれてゐることを公言したが爲めに、西歐人であつたのではなく、彼は露國特有の力を發達せしめ、その特有の意義を進展せしめんが爲めに、露國があらゆる西歐の所產を取り入るゝ必要を深く信じてゐたからである。彼は、我々の踏むべき路は、只ピョートル大帝が示して、當時スラーブ黨の人々が極力排擊したところの路であつて、是より他には、救はれる途はないと信じきつてゐた。(ビェリンスキイは屢々レェエーフ、プウシュキン、卽ち大詩人の兄弟の詩、『ピョートル大帝』を愛讀して、改革者を最大なものとして表はされてゐるその詩を、感情をこめて吟誦した。)西歐生活の結果を受け納めて、之を我々の生活に取り入れ、我々の特異な性質、歴史、氣候に適合せしめる。――併し批評的に、自由にそれに對して――、斯くの如くにしてこそ我々は、彼が理想せられるよりも非常に尊重すべき獨立を得ることが可能であるといふのが彼の意見である。

ビェリンスキイは全然露人で、愛國者でさへあつた――勿論エム、エヌ、ザゴースキンとは同一ではないのだが。血族の安寧、その偉大が、彼の心裡に深く、力强い誘ひを起さした。左樣ビェリンスキイは露西亞を愛した。けれども彼は亦熱烈に文明と自由とを愛した。彼にとつて興味深き此至高のものを一つに結合するところに、彼の行爲一切の意味があり、彼はそれに向つて努力したのであつた。彼が一つの、卑屈で、譯の分らぬ半可通な謙遜な心から、西歐の前に屈したと信ずることは決して彼の全體を知るものとは言へない。おまけに通常半可通の者等は不謙遜なところから罪を犯すのである。ビェリンスキイはそれ故になほもピョートル大帝の記憶を崇拜した、そして躊躇することろなく、彼を我々の救主と承認し、アレクセイ・ミハーイロヴィチの下に、彼は古い社會的、市民的社會のうちに、疑ひもなく頽廢のあつたことを認めた、その結果、彼は我々の組織の西歐に發現したと同樣な正當、正常な發達を信じ得なかつた。ピョートル大帝の事業は權力を以て爲されたもので、近頃では之をクウ、デ、タと稱ぶものである。然し此權力的で、寸法外れな物總ての御陰を蒙り、我々は歐洲國民の仲間入りが出來たのである。同樣な改革の必要は今日に至るもなほ歇まない。此意見を確めるには最近の例を引き得られるだらう。我々は此歐洲といふ家族の如何なる位置を占めてゐたか、之は歴史の

示すところで明かである。然し今日まで我々が辿つて來たこと、辿つて來ねばならなかつたことは（そのことはスラーヴ黨の人々は不賛成であることは勿論だが）、組織的に發達し來つた西歐人より多分異つた道を踏んで來ねばならなかつたことは疑ふべくもないのである。

然しビェリンスキイの西歐信仰は、毫末も彼が衷心のあらゆる露國的感情、理解を弱めにしなかつた、彼の本質であつたその露國的の筋路を變へなかつた。此事は彼の各論文が證據立てゝゐる。（プウシュキン、ゴーゴリ、コリツォフ、殊に民謠、ヴィリナ物語に關する彼の論文を讀め。當時の言語學的、考古學的の與件の稀少なるにも拘らず、それは讀者に、國民精神と、國民的創造を深く、生々と示す。）然り、彼は露國の本質を誰にもまさつて强く感ずる。我々の僞古典派、僞國民派の諸作家を認めず、彼等を轉覆すると同時に、彼は、總てにまさつて切實に、總てにまさつて眞實に、我々の文學を評價し、他人にその實際の獨立、獨創をさとらせることが出來たのである。誰の耳も彼のもの以上に鋭敏ではなかつた。誰も我が國語の美と諧和とを彼にまさつてヨリ以上生々と感銘しなかつた。詩的の文句、詞の美はしいあやは彼を倏忽と驚かした。單純で、いくらか單調ながら燃えるやう、又、正しく、彼がプウシュキンの詩とか、レェルモントフの『ムツイリイ』を朗讀するのを聞くことは、眞個愉快であつた。散

文、殊に彼自身の愛するゴーゴリのものを讀むのはまづかつた。その上彼の聲が直ぐに弱つた。

なほビェリンスキイが、批評家としての著しい一つの性質は、彼が英人の所謂る in earnest (眞面目)であつたことだ。彼は自分が研究してゐるものにも、讀者にも、又彼自分にも冗談を許さなかつた、却て最近一般的流行となつてゐた嘲笑の風を、取るに足らぬ輕卒、或は怯懦として斥けたらう。嘲笑する人は屢々自分で自分のことをよくは言はない、かゝる人はそれを嬲り、冷評かし、如何なる場合に於ても、その背後に獨自な確信の動搖と不明とが存在することを隱す爲めに、斯うした屏風を擴げるものであると、人は知つてゐる。人は嘯き、嘲笑ふ……彼の言葉を聞き、推測し、判斷せよ、彼はその言葉を何處へ向けるか？恐らく彼は、實際笑ふに價するものを笑つたのだらう、けれども恐らく彼は又獨り笑ひに『齒をむく』のであらう。只、眞實を示唆し得る時代のあること、又笑ふ口元に、ヨリ容易く眞實を示唆し得る時代のあるといふことを私は聞いてゐる。ビェリスンキイは、あらゆるものが純眞に表白せられ得るこんな時代に住つてゐたのだらうか？嘯きに對し、齒を露はす笑ひに對して、助力を求めはしなかつた。かの『嘯き』によつて社會の或る部分に惹起される同情的の笑ひは、センコヴスキイの無

道徳な攻擊が出會つた、かの笑ひを去ること遠からぬものである。而して其處此處に無作法な慰みや道化の性癖、遺憾にも露國人固有の性癖、それを大目に見逭されない性癖がひよつくりと頭を擡げた。愚昧の笑ひは殆どその惡意と同じく厭ふべく、同じく又有害である。之に反して、ビェリンスキイ自身は、自分は冗談には長じてゐないと言つた。彼の反語は非常に重苦るしく、且つ輕快でなかつた。反語が諷刺となるや直に、それは額でなく、眼にあらはれた。又會話に於ても、手にしたペンを用ゐると同じく、彼は機智を閃めかさなかつた。佛人の Esprit (頓才)を持たなかつた。巧みな辯證法を弄んで人目を眩さなかつた。然し彼のうちには正直で不撓の思想から生ずる、言ひしらぬ權力が宿つてゐた。そしてそれが適當な形をとつて現はれ結局人目を駭ろかした。普通に雄辯を大ならしめる要素の全然缺如してゐるのに——一見辭令、『教訓』等に拙劣で、之を嫌惡してゐるのに——若し雄辯といふ詞を、例へば雅典人がペリクレースに認めた力、卽ち彼の演說が毎時聽者各自の魂の底にまで滲みとほつたといつたやうなその力、確信の力を意味するものとすれば、ビェリンスキイは露國最大雄辯家の一人であつた。

ビェリンスキイは人も知る如く「藝術の爲めの藝術」の主張者ではなかつた。又藝術は彼の

思想の總ての傾向によるも、それ以外たることが不可能であつた。一度こんな可笑しな攻撃をブウシュキン――勿論、居ないところで――に加へた。それはブウシュキンの『詩人と平民』のうちにある文句のことについてだつた。

尿瓶(しびん)はお前にとつてもつと大切だ、

お前はこれで食物を煮るんだから！

『勿論、』と、ビェリンスキイは眼を露き出し、隅から他の隅へ歩き乍ら云つた、『勿論遙に大切さ。僕は自分一人だけのものを煮るのぢやない、僕は自分の家族のものを、他の貧乏人のものをその中で煮るのだ――又偶像の美にチャームせられるよりも先に――この偶像が、アポロンであつたとしても――自分の家族や、自分自身を養ふのは僕の權利であり、僕の義務である』と。

然しビェリンスキイは餘りに賢明であつた、彼は藝術を否定し、啻にその重要なことと、その意義とを理解しないばかりか、それ自身の性質、その生理的の必要を理解しないには餘りに健全な思想を持つてゐた。ビェリンスキイは藝術の裡に箇人性の根本的發現の一つを――則ち日常の經驗により、我々に示された我々の性質の法則の一つを認めた。彼は一箇の生活の爲めの生活を許さなかつたであらうと同樣、一箇の藝術の爲の藝術を許さなかつた。彼は徒に理想

家ではなかつた。總てのものは一箇の原則、即ち藝術に――科學と同樣、けれども又それ〴〵特別な形式で――仕へねばならぬといふのであつた。實際、小兒らしく、その上に新らしくもない、自然を模倣した藝術の生温るい解釋は、彼の駁擊も受け得ず、又注意をも惹くことができなかつたであらう。然し描かれた林檎が實物に優るといふ議論は、林檎に飽きてゐる人をつれてくるや否や、名論卓說も直ちに權威を奪はれるのであるから、彼にとつては、痛痒相關せずであらう。私は繰り返していふ、藝術は、科學の如く、社會の如く、國家の如く、人類活動の當然な領域であつた。けれども藝術からは、人間からと同樣、彼はそんな藝術と、活潑な生命のある眞理を求めた。然し彼自らは、藝術の範圍内に留つて、只詩や、文學にだけ得手であることを感じた。繪畫を彼は理解しなかつた、音樂には僅な同感をもつてゐた。彼は自分でよく其短處を知り、彼の本領以外に口を差入れなかつた。ゴーゴリがイヴーノフとブリューロフに關する論文は、人間がその本領の埒外に踏み出す時には、そのお喋舌がどれ程恐ろしい嘘僞、どれ程見掛け仕しの、いかさまな悲哀となるかといふ恰好の見本となるのである。『ロベルト・デアヴォル』の中の惡魔の合唱だけが、ビェリンスキイの記憶する唯一のメロデーであつた。機嫌の善い時には、彼は小聲で此惡魔の歌を口吟んだ。ルウビンの歌は彼を動かした、然し彼は

そのうちの完備した音樂を賞したのではなく、悲壯な、努力的なエネルギイ、表現の劇的なところを賞したのであつた。あらゆる脚本的芝居的のものが深くビェリスンキイの精神に滲透して、その精神を燃燒せしめた。モチヤロオフ、シチエプキンに關する論文、一般の劇に對する論文は人の熱情をそゝるものがある。彼がハムレット劇に於けるモチヤロオフの演出の記憶がどんな感銘を彼に與へたかは――則ち罪を犯した國王の前で、悲劇が演出せられる或る場面で彼は喜びと嫌惡とに喘ぎながら――

『牡鹿は矢に傷いた……』

と叫んだことを見ても知るべしであらう。

時に、ビェリンスキイが演劇、脚本について語ること避けた――特に餘り近しくない人々と――については其處にわけがあつた。それは彼が、何時ぞやモスクヴで書いて、『觀察者』に發表した喜劇『五十才の叔父ちやん』を思ひ出しはしないかと懼れたからである。此喜劇は確に弱點の多い作品であつた。それは不健全な涙もろい道德的な、感傷的に親切な種類に屬するものであつた。その中には自分の姪に戀して、その戀を競爭者に捧げる寛大な叔父ちやんが出てくる。總て恁麼ことから――ビェリンスキイは創作の才を持たなかつたといふ――誇張され

た、空しい生命のない詞が話されたのである。此喜劇、並にメンツェルに關する彼の論文はビェリンスキイにとつてはアキリースの踵(致命的の弱點)であつて、之を言ひ出すと、彼は怒り、且つ悲しんだ。特にメンツェルに關する論文を彼は自分でも容赦することが出來なかつた。喜劇の方は審美的、文學的の過失であると認めたが、此論文に於ては、彼は自分の本質よりも、遙かに惡い謬りを見たのであつた。メンツェルに關する論文を、彼が書いたのは、到達し難き理想の領土を去つて、確實に現實的で、當時實在してゐるやうにも想はれて、眞實な意義をもつこともの出來るであらうし、又良心ある人間を滿足せしめることも出來たのであらうと思はれる或るものへ移つて行き度い焦々しい、一時の出來心が起つたからであつた！勿論あはれなビェリンスキイはメンツェル氏が何んな人間だかをさとらず、此人を全然演繹的、抽象的見地から論じたのであつた。此場合事實を充分に知らぬところから彼は惡謔に陷つてしまつた。なほボロヂンスキイの一年祭に關する小論文がある。私が一度彼と此事を話さうとしたことがあつた。すると彼は兩手に耳を覆ふて、下を向いて、身を横に振りながら、室内を歩きまはつた。けれども彼は久しからずして、酸酒(クワス)の(露國流?)愛國心が鼻についた。概して、ビェリンスキイの最上の論文は彼が立身の始まりと、終局とに書かれたものである。中頃、約二ケ年間、彼が

へエゲル哲學に趨いて、それから脱け出せずに、嘘のやうな熱の發作でその公理、そのうちの或る條理や、術語や、その所謂る Schlagwörter（合ひ詞）に醉ふてゐた時代には立派な論文がかけなかつた。眼には當時持て囃された詞の轉換や表現が、多く漣の如く立つてゐたのだ！ビェリンスキイも亦その時代に税金を上納しなければならなかつたのだ！然し此浪は、その後に只善き種子を殘して、速に退き去り、明晰、健全、流暢なる言語であるビェリンスキイの露西亞語のどこまでも男性的で、卒直な單純さを以て、再び現はれたのであつた。ビェリンスキイは彼の論文を即興的に書いたといつてもいゝ。彼はそれを一月の終りの日に、デスクの前に立ちながら、汚點のない、大きな〳〵字で書いた。彼は句をかざつたり、各表現を計測、考案してゐる暇をもたなかつた。それだから幾分知らず〳〵に多辯に陷つた。けれども故ピイサレフの輕い手でもつて、雜誌の批評欄に斷言せられた無限の饒舌には、彼は遠く及ばなかつたと言はねばならん。然し彼の論文は文學的作物として殘つた。乾びた會話に、又平凡な問題に對して、厚みのある變化をあたへた。その變化は、あらゆる論難にも拘らず、後代の手本となるものである。

ビェリンスキイが關係してゐた雜誌の勘定高な發行者が、どんな負擔を彼に負はしたかは誰れも既知のことである。どんな本に彼が關係しないですまされたらう。彼が全然知りもしない夢占書、料理書や、數學書までやらされたのだ！月の一日にきちんと雜誌を出ししてまつたその後には二三日の休みがあつた。どんなに彼は此休みで慰められたゞらう、どんなに仕事のないのに滿足して、友人と談したり、又時としては哥錢（コペイキセン）のプレフェランス（骨牌遊びの一種）をやつたりして、憂さ晴しをしたゞらう！彼は骨牌は拙かつた、然し何をやつても彼には附き物の誠實な印象と、一風かはつたところがあつて、骨牌を弄んでも矢張りその風は失せなかつた。一度斯麼ことがあつた——我々は或るとき彼と金をかけずに骨牌をした。すると彼が勝つて昂然と鼻を蠢めかしてゐた……然るに突然輪金（まけがね）を支拂はされた、四點を持たなくなつた。我がビェリンスキイは秋の夜よりも烈しく憂欝になつた、死罪を言ひ渡された人のやうに頭を垂れた。苦悶、絶望の色が、彼の額にあらはれた。遂に私は悚え兼ねて、『何だねそんなことを。耻しいぢやないか、若しそんなに悲むくらゐなら、骨牌をしないがいゝぢやないか』と、叫んだ程であつた。『いゝえ』と、彼は澁々答へて、眉の下から私を見た、『みんなお終ひだ。僕は只ダイヤの一點まで勝負をやつて、今日まで生きてきたのさ！』此の間、私は、彼がその言つてゐるところ

は、眞に確信をあらはしてゐると思つた。

私は晩餐の後、屢々彼を訪ふて休息した。彼はアニチユコフ橋から遠くはない、フオンタンカの階下に宿をとつてゐた。それは不愉快な、濕々した部屋であつた。私は繰り返して言はざるを得ない。その頃は苦しかつた。今の青年は少しもそんなことを經驗してゐない。讀者自身で判斷して御覽、朝になると、赤い條(すじ)で血まみれになつたやうな、一ぱいに訂正せられて、減茶苦茶になつた校正刷が君に返されるだらう、或は檢閲官に出頭して、無駄で、卑屈な說明や辯明をしながら、檢閲官の訴えどころのない、往々噴き出したくなる御托宣を聞いてゐなければならん、氣をつけて身のまはりを御覽、收賄が熾に行はれ、强力な權勢が懸崖の如く聳え、牢獄が第一の平面にあつて、裁判は無く、大學閉鎖の噂が傳はり外國旅行は不可能となり、旅行日程は書けず、何かの暗雲が絕えず、所謂る學問、文學の報道の上に低迷した。然しなほ其處に騷擾があり、告發が匂ひずりまはる。青年間に共通な結合がなく、共通の興味がなく手一つ動かすさへもあたりの總てを恐れ、屈從してゐるのであつた。扨て君が此處ビェリンスキイの宅に行くとし給へ、第二、第三の友人もやつて來て、會話が始まる——そして賑やかになる。會話に上ることは大部分は、當時の意味で、無檢閲のものであつたが、けれども自ら

政論は闡はされなかつた。その無益なことが各人の眼に餘りに明白であつたのだ。我々が會談は普通哲理的文學、批評的美學の範圍内で、氣が向けば社會問題にも及び、稀には歴史も話題に上つた。時には非常に興に乘つて、力瘤を入れることさへあつた。又時には幾分か上つ辷りがして、輕々しいこともあつた。眞面目に、その性質の實際に高尚なるにも拘らず、ビェリンスキイは時には小兒のやうに振舞ふことがあつた。ジオルシュ●サンドとかペ●レールとかのどこか非常に好きなところなどを聞くと——その時は流行兒になつて、彼の作はビョートル●ルイジイの名で秘かに謄寫せられた——聞いて、直ぐ樣その箇所を寫してくれと頼つて、それを愛唱する。けれども是が皆彼が始めたことだつた。生きた露國人が其處に語られた。時としてはツマラヌ事が彼を怒らした。一度彼はまる六週間ゲーテの「西東の臥椅子」をポケットに入れてゐた。萬事が此式であつた。私は彼にこんな詩句を引用した——

Lebt man denn, wenn andre leben! (他の人が生きてゐるとき生きてをれるか)

彼は此詩句を、ゲーテの主我主義(エゴイズム)を叱責する爲めに、或る時代には名を知られたゲーテの飜譯家ア、エヌ、エスの前で復誦した。其人は引照の正確を疑ひ、ビェリンスキイの經卒を殆ど齒牙にかけまいとした。そこでビェリンスキイは『臥椅子』の例を私に問ひ、いつもそれをち

やんと記憶にとめて、會つたらエスをやり込めてやらうと待ち構えてゐた。けれどもビェリンスキイは此邂逅が遂に行はれなかつたところから、大に癇癪を起してゐた。死に先だつ二ケ年間に、愈々惡化した病氣のため彼は非常に神經質になつて、憂鬱症（ヒポコンデリー）に陷つてゐた。

私は四冬の間ビェリンスキイに會つた――一八四三年から一八四六年までゞある。そして又特に屢々一八四七年一月以前に會つた。此時から私は永らく外國に出た、又『ソヴレーメンニク』の創立された時、則ち故ベ●ア●プレートネフ氏から買はれたも此時である。此雜誌の創立の歴史は樣々な教訓を與へる。併しそれを正確に說明するのは今なほ難事である。古い汚物を取り擴げるやうなことになるだらう。只ビェリンスキイは漸次、又甚だ巧妙に、特に彼の爲めに創立せられたその雜誌から離れ去つたこと、彼の名聲によつて雜誌は共働者を得、彼が大に考案した年中行事の一つとして、ビェリンスキイの評判のいゝ立派な論文を滿載した事だけを言つて置けば澤山である。ビェリンスキイは『ソヴレーメンニク』の爲めに『オテチエストヴェンヌイア●ザピスキイ』との關係を斷つた、が新らしい雜誌に於て彼は、全權をもつ經營者の位置に就く代りに、舊によつて局外の共働者、傭人として仕事をした。私は此時分の事に關

した、ビェリンスキイの珍らしい手紙をもつてゐる。その手紙の斷片を少し許り讀者は本文の末尾で讀まれるだらう。特に私に關してのことなら、私が文學者として、彼を訪ふた後非常に速に――又全然正しく――彼が冷淡になつたことを言はねばならん。彼はその折り私が熱心にやつてゐた詩作を見て私を奬勵することは出來なかつたのだ。然し私は直ぐに同じ課程をつゞけてやるべき必要はないと、自ら悟つた。そして全然文學を棄てようと堅く決心した。只『ソヴレーメンニク』の第一號の雜報欄を埋めることの出來ないイ●イ●パナーエフの乞ひにより私は『ホーリとカリヌイチ』と題のついたスケッチを彼に殘した。（『獵人日記』の詞はイ●イパナアエフにより、讀者に卑下する目的で、考案せられ附加せられたものである。）此スケッチに成功して、私はもつと書かうと思ふ心が起つた。そこで私は又文學に立ち歸つた。けれども讀者はビェリンスキイのその詞から、彼が私の散文に一層多く滿足してはゐるものゝ、特別な希望を私にかけてゐないことを悟つた。ビェリンスキイは人の好い謙遜、同情の熱誠を以て、新進の作家で才幹のあるものを推奬し、その出世の面倒を見てやつた。けれども彼等がそれ以上の企てに對しては嚴しく拒み、容赦なくその缺點を指摘し、常に公平を以て褒貶した。それだから、始めのうちは、彼は或は優しく、非常に涙もろく、殆ど泣てゐるやうに又、殆ど我を忘れ

てゐるやうでもあつた。ドストイエヴスキイ氏の『貧しき人々』が偶々手に入つたとき、彼はすつかり喜んでしまつた。『さうだ』と、彼は自分が至大の偉業を成就したものゝやうに傲然として言つた——『左樣、父よ、私は貴下に告白する——烏は大きくはムいません。』と、そして彼は此處で手を以て床から僅か一尺ばかりのところをさした。烏は大くはない——けれども爪は鋭い！その後間もなく彼がドストイエヴスキイ氏と會見したときの私の驚きはどんなであつたらう——私の見たその人は中丈以上だつた——如何なる場合にもビェリンスキイよりも高い。けれども新たに生れた才人に對して、父らしい優しさを以てビェリンスキイは彼の息子に對するやうに、自分の『子供達』に對するやうに取扱つた。それは丁度一八四三年の夏で、私と近づきとなつたときのやうに、愛撫し、あらゆる方面から推奬し、ネクラーソフを人々の中に出してやつた。

熱烈な魂をもつた人、熱狂家には何れも皆あるやうに、ビェリンスキイには氣短かなところがあつた。彼は反對者の意見に少しの眞理をも認めなかつた、熱してゐるときには特にさうであつた、又その謬りを發見したときは、その本來の意見を拋棄した。その憤りを以て、彼等から

眼をそむけた。眞理は彼にとつて餘り尊かつた。彼はどこまでも頑張ることは出來なかつた。或る淺薄なモスクワ派や、スラーブ黨の人々に對しては彼は生涯敵であつた。彼等とビェリンスキイの愛してゐる事と、信じてゐる事の間には非常に溝渠が劃されてあつた。大體ビェリンスキイは憎むことが出來た——he was a good hater——そして全心をこめて適當な非難を與へた。ライブニッツは何處やらで、彼は何物をも殆ど非難しない——Je ne meprise presque rien——と言つた之は常に精神的思索の天國に住む哲學者の言葉としては、分つてゐるし、又賞すべきことでもある。然し我々の兄弟、平凡な人間で、地上を歩む者は是程偉大なる靜觀にまで到達して冷靜に身を處する力を有たない。我々にフアデイ・ブウルガリヌイが鼓吹する輕蔑の情は、我々の道德心、我々の良心を支援して、堅固ならしめる——特に失策したときには、ビェリンスキイは猶豫なく告白した。區々たる自負心はその痕跡だも彼の心に止めなかつた。『僕はおしやべりだな！』と、彼は微笑していふたこともあつた。その時の人の善い顏といつたらありはしない！ビェリンスキイは自分のその技倆をさう高く買ひ被つてはゐなかつた。彼の謙遜は繕はぬ、純眞のものであつた。此處では謙遜は價がないかの如くであつた、彼の意見では、そんな客な人間は彼にとつては、全然不愉快であつた。然し全く『自分の皮から跳び出すな』である。そ

れだから彼が任に當る仕事、彼が庇護指導する思想より以上肝要で、又高いものは一つもなかつた。であるから彼が怒らんとしてゐるとき――彼の手の下に居る者こそ災難だ！此處に彼の大膽があらはれる――彼の體質と神經とに拘らず、必死の勇があらはれる、此處で彼は一切を犧牲に供して悔いずといふ意氣をみせる！そんな力強い忿怒と相並んで、そんな弱い、個人的の感じ易さ……否！斯の如き人間には私は前にも後にも逢つたことがない。

一八四七年の夏、ビェリンスキイは後にも前にもたつた一度外國へ踏み出した。私は彼と共にシレジヤの小都ザルツブルンネに二三週間を過した。此處はその水が肺病に効能があるので名高かつたが、彼には効能が少かつた。ザルツブルンネで彼はゴーゴリの著『友人等との交通』に立腹した、そして怒りにまかせて、ゴーゴリに手紙を送つた。その後私は彼と巴里で會つたそこで彼は肺病の專門醫ティラ●ド●マルモルといふ人の治療を受けた。

多くの者はその醫者を山師だといつたけれど、彼はビェリンスキイをその脚で立たした。彼の咳は止まつて、顏の色がよくなつた。けれども餘り早くペテルブウルグへ歸つたので、何もかも無駄になつた。奇怪なことだ！彼は退屈だといつて、外國へ出て却て衰へた、そこで彼は露西亞

へ引き返した。彼はどこまでも露國人で、露國以外では、魚の空中に於けるが如く弱かつた。私は記憶してゐる、バリーで彼が始めてコンコルドの廣場を見たとき、直に私に訊いた――『是が世界に於て最も美しい廣場の一つだといふのは本當ぢやないか？』私がさうだと答へると彼は叫んだ――『ウン立派だ。さう私もさうだらうと思ふ――抛棄つとけ、よし〳〵』さういつて彼はゴーゴリのことを話した。私は彼に、此街路にこそは嘗て革命の斷頭臺が立てられたことや、此處でルイ第十四世が首を切られたことを彼に話してきかした。彼はあたりを見まはして言つた――『噫！』と、彼は『タラアス●ブウリバ』の中のオスタポーフの處刑の光景を想ひ起した。ビェリンスキイは歴史の智識が尠かつた。彼は特に歐洲の大事件が起つた土地に興味をもつことが出來なかつた。彼は外國語を解しなかつたから、その人民を知ることができなかつた。けれども悠長な好奇心、凝視、徘徊等は彼の性質にかなはなかつた。音樂や繪畫は既に述べた如く彼を感動せしめることが少かつた。けれどもバリが我々の多くの祖國人を力強く動かしたやうに、純潔で殆ど、厭世家らしい彼の倫理的感念を苦しめた。しかも終りには、なほ二三ヶ月滯在すべきところを、彼はもう疲勞して、冷淡になつてゐた。

私はビェリンスキイとその妻との關係を話しただらうか？彼自らも此デリケートな問題には決して觸れなかつた。彼は概して自分自身のことや、過去のことなどが世間に擴まるのを好まなかつた、私には此問題に話頭の向けられる機會が幾度もあつたが、彼はいつもそれを拒んだ。彼はまるで恥ぢてゐるやうであつた。彼はまるで好んで、個人の暗黑面を話すことは、それよりも一層重要で、有益な會話の主題が他に澤山あるとき、何の爲めにするのだか理解しないものゝやうであつた。若し彼が自分の過去に觸れたならば、それはきまつて滑稽な事ばかりであつた例へば大學から追はれて、飯が文字どほり食つていけないので、彼はボール・ド・コカの小說を二十五留貫ふ約束で飜譯した。そして彼はどんな失策をやらかしたかといふことを、或る時私に話してきかした。彼は疑ひもなく、恐ろしい貧乏を經驗してきたのだ、けれども決してそれを友人間にふれ散らすやうな、世によくある眞似をしなかつた。ビェリンスキイには同樣なことを喋り散らすには餘りに潔癖があり過ぎた。が又聊か傲慢過ぎたかも知れない。傲慢と自負心とは非常に違つたものだ。

ビェリンスキイの考へによれば、彼の顏は女の氣にいるたちのものではなかつた。彼は頭の骨髓までも、此信念に堅まつてゐた、そして勿論此信念は女達との關係に於て、その憶病と武

骨とを甚だしかならしめた。私はビェリンスキイがその熱烈で、感受性に富んだ心をもちながら、その爭論好きで、その情熱をもちながら、當代第一流の一人であり乍ら、婦人に愛せられなかつたことを推測すべき理由をもつてゐる。彼の結婚は熱情に基いたものではなかつた。若い時分に彼はツヴェリの地主B家の娘に戀想した。此娘は詩人的の人物だつたけれども他の者を愛した上に、程なく死んでしまつた。又ビェリンスキイの生涯には、單純な職業をしてゐる娘との變な、不快な話が澤山ある。私はその女について彼の斷片的で、暗い話を覺えてゐる。それは私に深い感銘を與へる。けれども事はそれだけに止まらない。彼の心は無言で、窃かに朽ち行いた。彼は詩人の言葉で叫ぶだらう——

オー、願くは、若し一度でも
此焰が意のまゝに生ひ立つならば、
疲れ惱まぬならば——我は照りかゞやきて、消えなん！

けれども人間の夢想は實現し難く、又憐愍は効果がない良い番號を引き當てない者を——空虛を以てよそほへ、そして誰にも語るな。

然し、少しでも、私は此處に、一般に婦人に對するビェリンスキイの寛大、正直な見解を問

想せざるを得ない、彼は殊に露國婦人、その狀態、その將來、その許されない權利、その教育の不充分、換言すれば今日婦人問題と稱ふるものに對して寛大、正直な見解を持してゐた。婦人に對する尊敬、その解放、啻に家庭に於けるのみならず、又社會的の婦人の意義が、彼が此問題にふれるところでは、到る處で語られる。それは當時は今日のやうに騒々しく叫ばれない眞理であつた。

一再ならず聞く語がある——丁度いゝ時節に死んだと。けれども此詞は誰に向つてよりも、ビェリンスキイに對する程痛切でない。左樣！彼は丁度いゝ時節に死んだ！死ぬ前、（ビェリンスキイは一八四八年五月に逝去した。）彼が愛して、それによつて勵まされた冀望の、壯嚴な有樣を實地に目堵することは出來たが、その最後の破壞を見なかつた。若し彼が永らへたなら、どんなにみじめであつたゞらう！警察では毎日彼の健康狀態及び彼の苦悶の模樣を調査してゐた。小うるさい審問から、彼を赦免したものは死であつた。それに彼の健康が最早彼の活動を許さなかつたからそれを伸ばし遲くすることが必要でなかつた。

A struggle——and I am free.——Byron

モウ一もがき。——すりや私は自由になる。（バイロン）

總てが斯うだ、然し生きとし生けるものは『一人の旅人も未だ歸つて來たことのない』不明の境へ死が伴ひ行く、我等のうちなる者を思つて、時折り悲みの念に打たれざるを得ない。私は現に行はれた偉大な改革——農奴解放、公明な裁判の設定等について、ビェリンスキイが何を思ひ、何を云ふだらうか？覺えず心に問ふのである。此結果の始まりが彼の心にどんなに喜悅を呼び起したらう！けれども彼は遂にそれを待ちつづけることが出來なかつた。彼は亦彼の心の慰めをも待ちつづけ得なかつた。彼はその後我々の文學に成就せられた多くの善い事業を見なかつた。彼が世に永らへてゐたなら、トルストイの詩才、オストローヴスキイの力、ピイセムスキイの滑稽、サルツイコフ兄弟の諷刺、ヴェショートニコフの眞實を彼はどれ程悅んだであらう！その種子のうち多くを自分が播いた彼ならで、誰かその發生の實見者たるべきぞ？、然るに彼は實見者となり得なかつた。

私は彼に近い婦人の一人に、彼が臨終の模樣を詳しく傳へて欲しいと願つた（當時私は外國に出て、巴里に居たのだから）。その婦人の手紙と私に宛てた彼の手紙の二三の斷片により、ビェリンスキイに關する私の回想を終らう。

是がその婦人の手紙である（一八四八年六月二十二日附）。

『貴下は何かビェリンスキイに關して御聞きなさり度いとの御望みですけれど私は、詳しくは申上げられません、その上近頃は病氣ですから窶れ果てゝいらしたあの方のことについて殆ど何にも申上げることはムいません。此のかあいさうな御病人が、徐々と朽ち果てゝいかれるのを見ることは、どれ程苦しく、又いたましいものであつたか、迚も貴下に申上げることは私の力に及びません。あの方がバリからお歸りなさつたときは、御氣分も、御身體も非常によくて、お醫者を始め私共まで、御恢復の望みがあると思つた程でムいました。そこであの方は幾日か私共のところで、始終根氣よくお話をなさつて、お過しになりました。そして私共皆々はその中に、以前の、未だ充分に健康なビェリンスキイを發見して悅んでをりました、けれどもあの方が外國からお歸りと共に、その性質まで全然變つていらしたのは不思議でムいました。柔しく穩しく、以前よりもずつと〳〵辛棒强くなつていらつしやいました。家庭の生活でも、以前は非常にあの方の御氣に觸つたことも、いさかひなしに、協和しられたやうで、あの方の落着きやうは嘗て知られぬものでムいました。あの方の健康狀態は永續致しませんでした。あの方はペテルブウルグで間もなく風邪をお引きになりました、そしてその爲めに日毎に御容態は絕望に

なりまして、一度お目にかゝる度に、私共はあの方が恐ろしくお窶れなさつて、もう之以上は惡くなりやうがないと思ひましたが、も一度見たときには一層惡う ムいました。最後に私は、お亡くなりなさるまで一週間、あの方のところにをりました。私共はあの方を肱掛椅子に靠せかけました。あの方の御顏には全く死相が現はれてをりました、けれども眼は巨きく、輝いてをりました。呼吸は苦しさうで、あの方は私共に向つて斯う仰被いました。『私は死ぬ、全く死ぬ』と。けれども此詞は確信も、安心もなくして話されました、寧ろ論駁して貰ひ度い希望を以て話されました。その時二時間ばかりを、どんなに私共が心苦しく過したかは、迚も貴下にお話し申すことは出來ません　勿論あの方はお話なさることは出來ませんでした、けれどもそれでもつてあの方が以前に生活していらつしたかの物（原稿）についての話をあの方にすることも出來ねば、お勵まし申すことも出來ませんでした。御逝去前三日間、あの方は寢臺に臥て、自覺のあるうちは望をつないでいらつしやいました。死の前夜あの方は夢中になつてお話をなさり、その日モスクヴからグラノヴスキイの御入來なさることを察知してゐらつしやいました。おかくれになる直ぐ前、まるで露西亞の國民に對するやうに、二時間打つ通しにお話なさいました。そして屢々奧さんに向ひ、自分の詞をその宛てられた人に間違ひなく傳へるように、皆

よくおぼえてゐて下さいとお頼みなさいました。けれども此長いお話のうちから、何一つ解つたものはムいませんでした。その後、あのお方は突然口を緘み、半時間苦悶の後におかくれなさいました。おかあいさうな奥さんは一分間も傍を離れずに、御看病なさつたのですが、何やらおつしやりながら、あの方を寢臺からお持上げになりました。此御婦人は、まつたく尊敬すべき方で、熱心で、辛棒強く、ちっとも不平を言はず、御病氣の御良人に、冬中お仕へになつたのでムいます。

以下はピェリンスキイが私に呉れたる手紙の斷片である。

一八四七年二月十九日（三月三日）ペテルブウルグ。

貴下が旅行に立たれるとき、私は貴下に於て何物を失ふかを前以て知つてゐました——けれども貴下がおたちになつたとき、私は思つたよりも多くを失つたことを悟りました。貴下と別れて、私はどうやら無感覺な自暴氣味の退屈を感じました。私は今までに嘗てない退屈を感じました。十一時、折々は十時に床に入り十二時まで眠り、七時八時又は九時に起き——又終日一時に午後は全く——（夕餐後から）——睡眠する——是が私の生活です！

××はペテルから詰問の手紙を受けました、けれども×××にはみせません。後者は何にも知らないのです。けれども想像はつきます。彼はそれでも自分のすることはします。私の釋明を聞いて、あの人は機嫌を悪くして咳をしながら、吶りながら、私の利益の爲め（と思はれます）承知が出來ない、その理由は只今玆に述べるが、又私には語つてきかされない理由もあるのだと申しました。是は私の欲するところではありません。で私は何にも理由を知らうとは思はぬと答へて、私の條件を言ひました。彼は悅びました。そして今度又會ふと、私に兩手を差伸べました。全然私が氣に入つたと見えます。けれども私の手紙の調子によつて、貴下は私が怒つてゐるでもなし、又誇張してゐるでもないことをおさとりでせう。私は彼を愛しました、或る時は彼を遺憾に思ひ、又或る時は腹立たしく思つた程彼を愛しました、但し彼の爲めにであつて自身の爲めではなかつたのです。私は胸中、人に不平を抱いて過ごすことは困難です——尤もその後では何でもないのです。天は私に、箇人的に自分に爲された不義を償る方法を僅かより與へて居りません。私は寧ろ信念の葛藤、不足、邪惡等全然私箇人にとつては無害なことで、人を嫌ふやうにできてゐます。私は××を今尊重します、又彼は私の眼には、その手に富裕となるべき資本を持てる人でありますのです——けれども私は之がどうしてなされるかを知つて

ゐます。既に私から始まつてをります。けれども此事についてはもう澤山です。

……新聞を一つ書きます。私は多分シレジヤに行きませう。Bが私に二千五百留を世話してくれます。私は斷然斷はるかも知れません——何ぜかといへば私はそれをもつて家を去るのですから——然し解職手當を貰ふ爲め辭職することは好まなかつたのです。けれども×××と會つて事情を聞いてみると、私は馬鹿々々しく敬遠しられたなと思ひました……彼は大變悅んで、只私さへいゝなら何でもする覺悟である……と申しました。私はBに手紙を出しました

そして今彼の手紙が事をきめるところです。

『貴下の「カラターエフ」はよろしい、もつとも「ホーリとカリタイチ」よりはずつと落ちますけれど。』

……私には貴下が純然たる創作の才をもつておいでか乃至は少しもお持ちでないか——乃至は少しお持ちか——どつちかでおいでなさるやうに見えます、そして貴下の才はダーリの才と同樣なやうに見えます。是が貴下の眞の性質です。此處に「イエルモライとメリニチハ」にしろ些事かも知れませんが、聰明凱切な思想を以て立派であります。けれども「プレッテル」では貴下は作爲せられたと思はれます。貴下の道を發見すべく、貴下の位置をさとるべき、人間

に對するあらゆるものが此中にあります。是は人間が彼自らの爲めに爲すべき事です。若し私が間違つてゐないならば、貴下の御職業は、眞の現象を觀察し、それを幻想によつて、傳へることです、けれども啻に幻想にだけ倚り賴むのではないのです——只神かけて、何方ともつかぬ宙ブラリンのものを出版なさいますな。惡くもないが、又非常に善いものでもないものをお出しなさるなといふのです。是は恐らく令名の總額を(御免なさい、拙づい言ひまはしを——もつと巧い詞が思ひ當らないのです。)損じます。けれども『ホーリ』は貴下が顯著な文學者としての未來を約束致します。

……ゴーゴリは輿論にひどくこらされて、あらゆる雜誌で叱られてゐます。彼の友人すらも、モスクヴのスラーヴ黨でさへ、彼からではないけれども、彼の本の愚かさから背き去りました……

……妻及び家内の者總て——貴下の名付け子(ツウルゲーニェフは彼の子息の名付け親であつた)から貴下へよろしく。

一八四七年三月一日(十三日)ペテルブウルグ

ピェリンスキイの回想

私は今××の或る行爲の原因について私の見方を殆ど變へたことを貴下に申上げ度い。彼は今客觀的正理に基き良心を以てそれをやつたと想はれます——けれども他の、至高の正理に關する觀念については、彼は未だ發達しきつてゐません——けれどもそれを獲得するのは、汚穢な積極性に生えるが故、不可能なのではない、又嘗て我々の態度に對する理想主義者も、浪慢主義者がなかつたからでもありません。私は、彼の例からして、此理想主義、浪漫主義がどうして彼等自らに表はされたか、彼等の性質に有用であるかを知つてゐます。彼等——此理想主義、浪慢主義は醜いです、けれども、若し人を死病から救ひ出して、彼の身體に死病でなくて、他のものを注ぎ込んだなら、味の悪い藥も用に立つならば、人にとつて何でもありますまい？此場合に肝要なことはその醜いことでも何でもなく、それが用に立ちさへすればいゝのです。

私のシレジャ旅行は決定しました。之はポチンキンのお陰です。彼は決行の方法を發見してそれを私に說明しました。いや私はまだ彼が私のことをお喋りした程、自分のことをお喋りしたことはありません、又お喋りをしもしますまい、どれだけ手紙を彼は私に書きましたらう、此事について A—に、Q—に、その兄弟にあつて、どれだけいろ〳〵なことを話したり、說

明したり致しましたでせう！近頃彼はAから返事を受けて、それを私に持つて來ました。Aは私に四百法を奐れました。貴下は、此人が几帳面ではあるけれど、斷じて富有でないことを御存じです——外國に行くには何時だつて、最小限度に見積つても、些少の金では追付かないことを、貴下は御存じです、けれども之はまだ〳〵何でもありません、是は私が常にAに期待してゐたところでした。けれども私が感心したこと、心の底までも響かされたことは、此人が私の爲めにその旅程を變じて、希臘へ行かず、コンスタンチノープルへ行かず、シレジャへ行つたことです！それですから私は、當惑さへしたのです。又若し私がAをどれだけ力强く、又多く愛するか知らず、又深く感じなかつたならば、斯る事件は私にとつて寧ろ腹立たしく、不愉快でしたらう。私は最近の汽船で出發します。

一八四七年四月十二日（二十四日）ペテルブウルグ、

……私の親愛なTさん、貴下へ二三行書いてあげます。貴下が私にお宛ての第二信を受けて間もなく——その手紙に貴下は私の伴の健康狀態に滿足する旨お書きでしたが——伴は亡くなりました。私は恐ろしい目にあひました。私は生きてはいかず、そろ〳〵と死にかけてゐま

す。けれども用事の方を申しませう。私はシテッチン行き汽船の切符を求めました。船は五月四日（十六日）に出帆します。

五月九日（二十一日）私はシテッチンに行き其處でビニリンスキイに會つた。ベテルブウルグから私が受取つた手紙には、生後三ヶ月の彼の子息が亡くなつたことは、彼を言ひしらぬ懊惱に陷らしめ、その一年忌も過ぎないのに、彼にその後を追はしめた。

今は當時から最早二十年を經過してゐる――そして私は彼を尊い影として呼び起す。私はどれだけまで讀者に彼の主要な面影を傳へることに成功したかを知らぬ、けれども私は彼を少時の間偲び得たことを以て滿足してゐる。私の記憶に残るところ……

彼は一箇の人間であつた！　一八六八年

アルバノ及びフラスカティへの旅

（ア、ア、イヴーノフの回想。）

一八五七年十月の晴れた一日、古臭い傭ひ馬車が、窓硝子をがたづかせながらローマからアルバノに通ずる大道を靜に駈けてゐた。

山羊皮の上には頰髭の澤山生えた、どう見ても卑怯な、好色らしい、澁つ面の御者が乘つてゐた。けれども同じ馬車の中には三人の露國の Forestiere（異人）が乘つてゐた。それは亡くなつた畫家のイヴーノフとヴエ・ベー・ボートキンと私の三人だつた。けれども『フオレステイエル』といふ名は只ボートキンと私とだけに適用せらるべきものであつた。イヴーノフは或はフアルコーネ旅館からカフエ・グレコに至るまで尊稱せられたやうに――アレッサンドロ大人 il Signor Alessandro で、衣服の着付けといひ、身のこなしといひ、生え抜きのローマ人になり濟ましてゐた。

永く人と交際を斷ち、孤獨な生活をして、いつも同じ、變らぬ考へを抱いてゐたところから

イヴーノフは特に憂鬱になつてゐた。彼には或る神秘的で、子供らしく、賢哲めいて、呆然(ぼんやり)としたところなどが同時にあつた。又純潔、誠實で、しかも包み隱して、狡猾とさへ思はれるものもあつた。一見彼の全身には何やら不信用な、なにやら粗奔な、媚びるやうな憶病さがあつた、けれども彼が人に馴れてくると――直ぐに馴れるのだ――彼の柔かな魂は打ちとけてきた。彼は至極平凡な洒落にでもフト哄ひ出し、ホンノつまらない事にでも呆れかへる程驚き、少しの鋭い詞にも仰天した。(我々の一人が、或る露國の女流作家は愚物だといつたのを聞いて、彼は飛び立ちさへしたことを記憶する。)――そして突然、道理と成熟とに滿たされた、著しい智慧の確實な働きを證據立てる詞を發するのであつた。が遺憾ながら、彼も又我國畫家に通有な餘り淺薄な教育を受けてゐた。

辛棒強く、彼は此缺陷を補ふべく自身の教育に努めた。彼は古代の世界のことに精通してゐた。彼はアッシリヤの古物を研究した。(それは彼が後に畫く繪にとつて必要であつた)。彼は又聖書、殊に福音書を逐語的に學んだ。彼は喋るよりも寧ろ聞くことを好んだ。それにも拘らず、彼と話すことは眞に愉快であつた。彼にはそれ程善良正直な眞理の希望があつた。彼は我我の夜會にはいつも第一番に來て、議論に加はるや否や緊張して、ぢつと忍耐しながら、注意

深く各思想の發展を追ふていつた。當時ローマに住つた露國人のうちに、一人の善い、愚かではないが、小さい、けれども頭に不明なところがあつて、舌の縺れる人があつた。イヴーノフは我我よりも後に彼をいけないといつた。文學、政治に彼は捗はらなかつた。彼は藝術、道德哲學の問題に興味を有した。一度誰やらが彼に巧みな漫畫の本をもつて來た。イヴーノフは永いことそれを眺めてゐたが、卒然頭を上げて言つた、『キリストは一度も笑はなかつた』と。彼は何處でゞも歡迎を受けた。廣く、白い額、疲れて、人の好さうな眼、柔かで、子供にみるやうな頬、尖つた鼻、放心したやうな、けれども又愉快な口などをそなへたその顏を一見すると、人各々の心に、不覺ず同情と親愛の念とが起つた。彼のせいは高くはなかつた、短軀で、肩幅が廣かつた。彼の全體は腮鬚から、ふくれた、指の短かい手や、太い指のある敏捷な脚に至るまで、露國流であつて、歩みぶりも露國風であつた。彼は自惚れ者ではなかつた、けれども自分の勞作については高い自覺をもつてゐた。彼は徒にその勞作に彼のあらゆる力を打ち込みはしなかつた。

我々の御者は馬を休息させ、且つ自分でも『フィオレッタ』(一種の濁酒)を飲む爲めに、下等な旅宿の前に車を駐めた。我々も馬車から降りて、パンとチースを求めた。チースは悪くなつ

てゐたし、パンは半燒けで、酸ばかつた。けれども我々は、常にローマの空氣に漲る、特に黄金の秋の日に漲るやうに思はれる、不斷の美を感ずる、喜ばしく、明るい心持を以て、我々の貧しい朝飯を喫べた。黒眼の、あさ黒い、けばけばしした襤褸を着て、跣足な、店主の娘は、その家内の石の牀の上から、物靜かに、又横柄なふうさへ見せて我々を眺めた、けれども主人は打見たところ四十恰好の年輩で、磨りきれた天鵞絨のジャケツを片一方の肩にひつかけ、小暗い旅店の木製の卓に就いて、我々の御者が、時節のいけないことや、外人客の尠いことなど滾すのを聞きながら、大まかに微笑してゐた。けれども突然氣せはしくなつたイヴーノフは餘り多くの御喋舌を御者に許さなかつた。我々は更に遠く進んだ。

會話は再び御者の事に及んだ。

『明日は又あそこへ行かなけりやならん。』と、ボートキンが言つた、『けれども君等は昨日のやうに、そこから僕等のところへ御飯喫べに來給へ。』(我々は毎日ボートキンと一緒にホテル・ダングルテルで同じ食卓に就いた)。

『御飯喫べに?』と、イヴーノフが叫んだ、そして突然眞蒼になつた。『御飯喫べに?』と、彼は繰り返した、『いや、どうも有難う、だが僕は多分明日までは生きちやゐまい。』

我々は、前夜、彼が冗談にしたことを仇めかしてゐると思つた。(彼は概して多量に又貪り食つた)、そして彼を說きふせにかゝつた。

『いゝえ〳〵。』と、彼は一層蒼醒め、且つ當惑して、言ひ張つた、『僕は行かない、彼處では僕を毒殺する。』

『どうして毒殺する?』

『ウン、毒殺するよ、地獄だ。』と、イヴーノフの顏は妙な色になつて、彼の眼は定まらなかつた。

我々はボートキンと目配せした。何とはなしに不安の念が我々二人に起つた。

『どうしてさうだね、アレキサンドル・アンドレエヴィチ、どうして地獄なんだね、君にとつて食卓を一緒にすることが?まつたくそんなら皆の皿に毒が塗つてなけりやなるまい。おまけに誰が君を毒害する必要があるんだ?』

『僕の生命の入用な人がやるのだらう。けれども皿のことは……、あいつは盆の上に投げつけて僕に出すのだ。』

『誰のこと?あいつといふのは?』

『ボーイだよ、給仕(カメリエレ)だ。』

『ボーイ?』

『さうだ、買收された奴だ。君等は未だ伊多利人を御存じないのだよ。是は恐ろしい國民だ、こんなことには妙を得てゐる。背廣の緣の下から出すんだ――こんなふうにして一摘み入れるんだ……それを誰だつて氣付きやしない！ほんとに僕が物を喰つたところでは到る處で毒を盛られた。此處には只一人正直なボーイがゐる――フワルコーネ旅店の、下の部屋に……今は未だ是にたよつてゐられる。』

私は歸らうとおもつた、けれどもボートキンは跪づいて私にこつそりと說いた。

『ねえ、アレキサンドル・アンドレエヴィチ、僕此處に君に提議することがある。』と、彼は始めた、『君は明日、何事もなかつたやうに、我々のところに御飯を喫べに來給へな。僕等は幾度でもお盆を出すたびに、君のと取換へることにして……』

是にはイヴーノフも賛成した、そして彼の蒼い顏色もなほつて、唇の顫へも止まり、眼も落着いた。我々は後で、イヴーノフは過度に飲食した後では、いつも家へ走つて行き、吐劑を服し牛乳を呑んだことを知つた。

かあいさうな世捨人よ！二十年の孤獨な生活は徒(たゞ)爾ではすまなかつた。

半時間經つて、我々は既にアルバノに着いた。イヴーノフは突然活氣づいて、馬を傭つてフラスカティへ行かうと言ひ出した。いろ〳〵な彎曲した小路から三疋の、粗惡な裝具をつけた、よぼ〳〵の痩馬が我々に曳いて來られた。永い問宿の主人と談判した末――その間私は始終イヴーノフの鐵の如き執拗さに驚いた――とう〳〵、値段が折合つて、我々は各々のロッシナンテ(譯者註、ロッシナンテはドン・キホーテの乘つた馬、此處では痩馬)に乘り、フラスカティの方向へ進んだ。路は山にか〻り、所謂るガルレアと稱ばるゝもので、谷道は總て大きな、常緣の槲が立ち並んでゐた。その槲の一ツ〳〵は數百年を閲したもので、既にクロド・ローレンやブウセンは斯る樹木のクラッシカルな姿態に惹き付けられたであらう。そのうちには、私が知つてゐるどの樹にもない程一本の樹に美と力とが溶和してゐた。此槲に加ふるに、松、絲杉、橄欖などが驚くべき程並び立ち、それがローマ地方の天然を支配する、彼の特殊な協和した諧調を形成した。眼下には圓いアルバノの湖が青く、仄かに煙り、周圍には山岳溪谷連環し、近く、遠く、驚くべき澄明な祭禮布を以て、神々しい色が敷き延べられた。けれども私はそんなことを筆にすることを約束しなかつた。愈々高く昇つて、懷かしい、輝いた、卽ちまるで夏草のやうに輝いた、エメラルド色の林

ツウルゲーニェフ編、

を旅行して、遂に、懸崖の頂きに、鳥の巣の如く密着したロッカ・デイ・パパと稱ぶ小村に到達した。

我々は廣くもない辻公園で馬を降りた。それに向ひ合つて、正面に螺旋裝飾のある、ロムバルド風に建てられた教會があつた。我々は法王の紋章と、羅典文の額がかゝつて、半ば崩れた圓柱の間に銀水の湧く井戸のそばに暫時腰を卸した。辻公園からは、階段のやうに、狹く、曲りくねつた、小路が八方に岐れていつた。襤褸を着た子供が、我々を見に、直ぐ走せ集まり、お定りの御施し、『パオロ』といふ錢を貰つた。何處からか、女の――その大部分は老女の――頭が覗いて、明かな喉音が響いた。遠くには幻のやうに、出入口の中央に、アルバノ風の衣裳をつけた、姿のいゝ美人があらはれ、石塀が投寫する殆ど黑い影のうちに、畫のやうに佇んでそつと身をかへして、消え去つた。荷をつけた驢馬は、その籠をきしまして、大きな橋石に、騷騷しく音を立て、用心深く歩るいて、通り過ぎた。その後に靑い汚れたマントを着て、その下端で、彼の顏の一部を隱くし、誰の前にでも脫いだことのない、穴だらけな帽子を被つた、粗野な百姓が、まるでコンスル（昔の羅馬の執政官）かなぞのやうに、威張つて歩るいた。イヴーノフはポケットからパンの皮を出して、井戸の端に腰かけた、そして片手に馬の手綱を持

ち、時々パンを冷たい水に浸しながら喰ひ始めた。彼の顏から悲みの痕は悉く消え失せた。顏は穩かな、美術家らしい滿悅を以て輝いた。此時彼には世界に何の缺けたものもなかつた。彼自らが藝術家にとつて價値あるものゝやうに私に見えた――此愛らしく、美しい小さな都會、その後ろから灰色な百合色をした山が輕く、且つ高々と、明るい空氣の深淵に聳え立つ、その暗い教會を背景としてイヴーノフ自身　そは……あゝあはれ！彼が其處に年又年住まふならば……けれども死が既に彼を張り番してゐた。

我々は再び馬に乘り、一層遙かに山の下を旅行した。イヴーノフは話をした。彼は我々に樣樣な事を、忘れられたローマの昔話を、いかにも子供らしい輝やかしさで語つた。そこへ手を後ろに縛られ、二人の騎馬憲兵に警固しられた二十二歲の美しい若者が我々の方に向つてやつてきた。

『あの者は何をしたのですか？』と、そのうちの一人に、イヴーノフが訊いた。

『人をナイフで突いたのです。ha dato una coltellata』と、一人の憲兵が素氣なく答へた。

私は勇敢な若者を見た。彼は微笑した――それで大きな、眞白な齒が露はれた――そして親しげに私に頷いてみせた。自分の山羊が居る下の畑に立つてゐた百姓女も亦微笑した。一樣に

輝く齒を我々にみせ、先づ若者を、次に我々を見て、再び微笑した。

『幸福な國民だ！』と、イヴーノフが言つた。

我々は餘程遠くフラスカティに到着した。最終列車は四十五分の後出發した。我々は單に、美しい庭園をもつた近くの別莊に行けたゞけであつた。私はその名を忘れた。アルバノに行く數日以前、我々はイヴーノフと共にチブルリのヴィルラ●デステに行つた、けれども、紀念物中大仕掛で、宏大な別莊のうちで、恐らくは最も顯著な此邸宅を充分に賞することは出來なかつた。但し之はチユチエフに彼の美しい詩句をインスパイアしたものゝうちの一つではなく、それを見る諸君の想像には、メヂチイやファルネーゼ時代の樞機官や王侯やアリオストやデカメロンの詩や、天鵞絨やら、絹やらのぴかゝした服を着て、白い頸のまはりに眞珠の頸飾をつけ、孔雀や一寸法師をそばに置いて、テオルボや笛の音に恍惚と聲き入る美人をあらはした鍍金の天井に、オリムポスの神々の大理石像や、窟、半羊神、噴泉がついてゐる、バウロ●ヴエロネーズの繪が浮び出るであらう。フラスカティで我々は總ての別莊を急がはしく通つて、それを下から眺め、その藝術園のテレースを瀧に沿ふて行つた。其處で夕映の眺めが特に力强く我々を驚かしたことを記憶する。無暗と華美な夕映が、金色の血汐の流るゝ如く染めなされ

宮前の廣場で、我々の此北方の城邑の一屬性たる、粘々として、靈氣を帶びた、埃りの柱が絶えず舞ひ騰る裡に、私はイヴーノフと邂逅つた。彼は呆然したふうで、私の挨拶に答へた。彼はたつた今エルミタージュを出て來たところだつた。海風は彼の制服の裙を捲しあげた。彼は二本の指でその帽子に觸つて、それを押へた。彼の畫は既にペテルブウルグへ來てゐた、そして不利益な評を受け始めた。數日經つてから、私は田舍へ行つた、そして二週間ばかりの後、彼の死去の報知が私にとゞいた。彼がペテルブウルグについて、又そこへ行くことについて常に抱いてゐた恐れは、殆ど迷信ともいふべきものだつたことが憶ひ起される。

私は今イヴーノフの或る畫の功過を詳細に論じやうとは思はない。そんなことなら他の人々がやつた。又その人達の方が私よりも遙かに適任だ。私は只イヴーノフの才幹が私にどう見えるか、その意義を私が奈何うとるかに就て二三言を費したい。故ア●エス●ホミヤーコフは、彼のいつものペン尖に成つたものと同樣に、魅力ある一文を『ルウスカヤ●ビェセエダ』に寄せた、が私はそれに贊成することは出來ない。彼の意見によると、イヴーノフは純潔にして、雄大な畫家で、宗教的感情の横溢した、露國生活の中核より直接出て來た人である。無信仰と、一般的藝術墮落の時代がきてゐるのに、彼はその穩和、敬虔な心の奥底から、基督教々義に新たな

た、そして、天空に向つて飛び立つ如き、輕い圓柱をもつ高い、見透しの廊下の端なる、素敵な大理石の四角な窓に注ぎ入つた。

暫時經つても、此天に燃える大火の反射が私自身の顏にも、又私の同伴の顏にも殘つてゐるやうに思へた。

鐵道の客車の中で、若い、新婚の夫婦と乘り合はせて、再び我々の前にかの樹脂のついた、重くるしい髮、女の輝く眼や齒——近くからは幾らか大きな、かの相貌、けれども又偉大、純朴にして、どうやら荒削りな、雅びやかさのある輪廓が現はれて來た。

『君等にマリアンニナを紹介しなけりやならん（或るモデル女）』と、イヴーノフは突然大きな聲で言つた……彼はその後その女を我々に紹介した。

永遠の都（ローマのこと、譯者）は程なく我々をその懷に入れた。我々は徒步で、最早暗くなつた街路を步いた。イヴーノフは我々をピアッツア・デ・スパーニャまで案內した。そして心のうちに、樂しく過ぎ去つた日の印象をもつて別れた。

八ヶ月ばかり經つて、暑からず、又寒からぬ、うら淋しい七月の一日、ペテルブウルグの冬

肉を付けて導き出し、それによつて繪畫の基礎、特に露國繪畫の基礎を据ゑ、一般に繪畫を復活せしめた。と、斯る觀察は何か慰むるところがあるやうに見えるし、又理論的にも正しいやうである。けれども遺憾ながら眞理に適合するところが尠い。イヴーノフがその總ての努力に於て、飽まで露西亞人であつたことは爭ふことが出來ない、けれども彼は、過渡期の露國人であつた。彼は我々皆と同樣、未だ約束の地に踏み込まないで、その地を遠くから眺めた。彼はその地を豫感した。然し彼はその境界に到達しなかつた。彼は諧和と獨立の創造的畫家の一人ではなかつた（そんな人は未だ我々露國のうちには居ない）、彼の才幹そのもの、特に畫才は、彼にあつては弱く且つ不安定であつた。それ故に一切のものがそのうちに存ずる彼の作品を只注意深く、公平に觀んと欲する者は、理想に對して驚くべき、正直な努力と、熟考——換言すれば、只一つ要用なもの則ち、創造力と、自由なインスピレーションを除き一切のものが彼の製作のうちに在ることを認めるのである。又イヴーノフにあつて、全天賦を構成する部分を分割する宿命的法則、今日に至るまで露國の全藝術に覆ひかゝるかの法則が、その全力をふるつてゐることも認めるのである。彼がブリュロフの才幹を持つか或はブリュロフがイヴーノフの感情を持つたとしたなら、どんな奇蹟を我々は見たことであらうぞ！然し彼等の一人が表

現し度いだけのことを表現し得ても、遂に言ふべき何物をも持たなかつた、然るに他の一人は言はうとすれば、多くを言ふことが出來たらうに、彼の舌は澁つてゐた。一人は効果はあつても、詩もなく、内容もない嚴しい畫をかき、他は深く探ぐつた、新たな、生命のある思想をあらはすに力を入れたが、出來上りは平滑を缺ぎ、大摑みで、生命がなかつた。一人の方は、マアに言つてみれば、我々に僞りをあらはし、他は僞りらしくあらはした、別言すれば、弱く不眞實に、我々に眞理をあらはした。イヴーノフは三十四度もアポロン・ベリヴエデルスキイの頭とバレルモで彼が發掘したビザント式基督の首を素描(スケツチ)して、徐々歩を進めて、遂に彼の洗禮のヨハネを得たといふことである。眞の藝術家は斯の如くして製作しないでゐやうぞ！若し兩者その一を擇ぶべしとなれば、眞の指揮者が現はれるまでは、イヴーノフに組みすることがまさつてゐる、千倍もまさつてゐる！思想は特殊な力で附與せられる。思想は人がイヴーノフの如く、無慾に自已を犧牲とするまでそれに仕へたときには特に徹底して、成功不充分のときすらも光り輝くものである。多くの人は、イヴーノフは、彼の力以上の物にかゝづらつて無駄骨を折つたと言ふだらう。然らば我々はその内容が左程深くはないが、その代りに仕上げは一層自然で、且つ生々(いき〳〵)としてゐる彼の畫の最初のスケツチを指し示すことが出來る。此及び難きこと

に對する努力の可能に於て、勿論、或る異常(アブノーマル)な、或る悲劇的なものさへある。けれども此努力が純潔な源泉に發するものであるなら、それはよしや充分に成功せず、目的を達成しないでも、偉大なる効果を齎し得るのである。ブリユロフの影響を受けた青年は、それだけでも既に畫家として失はれたものだ（我々は此例をどれだけ見たであらう！）。けれどもイヴーノフの製作に浸徹する内面的の光りを了解し、愛着した青年は發達して、なほ遙かに進歩し得るものである、尤もそれは自然が彼に才能を與へることを拒みさへしない場合のことである。此半途に仆れた勤勉者、殉教者イヴーノフは力もなく、又尊ばれもしなかつた。けれども彼は眞理に趣き彼が後繼者『未だ告知を受けない當選者』は、彼の道、先づ彼に提議せられた道を歩むのである。

私はなほ反對の議論を豫見する。人は或は曰ふかも知れない——けれども何ぜ、偉大な、疑ひもない、優勝の模範が他にあるのに、不完全、不明瞭な工人イヴーノフを研究するのであるか？何ぜ高らかな詞があるとき、暗示をするのか？と。けれども第一、イヴーノフは、獨立な露國の性格として、若い露人の心に、切實に力强く訴へるのである。彼は青年等には一層判り易く、且つ一層尊い。第二、彼が摸範を指示し、それによつて導き、覺醒し、搖り動かすことに

理想家、思想家の務め、偉大な務めが存在するのである。彼は自らも滿足せず、又他の者にも安つぽい滿足を許さなかつた。そして彼の弟子達自身に、高尚で、困難な問題を解決せしめ、ブリュロフの繼承者等がそんなに矜りとする省筆とか、燒點とかいふものゝ技巧を以て滿足しなかつた。此見地よりして、イヴーノフの缺點は、他の幾多の美にまさつて有益である。

此處ではイヴーノフ本來の思想が何によりて構成せられるかを檢覈する餘地がない、然しながら、私は彼の描いたキリストの素描帳が世に發表せられんことを希望する旨を述べないうちは、私の此文を終れない。此素描帳は今彼の兄弟の手にある。此珍らしいスケッチに、イヴーノフを導いた根本思想がヨリ明白に出てゐる。そのうちでは、彼は畫筆に妨げられてゐない。彼が意の如く驅使し得なかつた畫筆、特に緊張した不斷の努力により疲れた彼の眼が、變つてきた生命の終りに於て、自由に驅使し得なかつた畫筆が彼の自由を妨げてゐない。そして彼の畫で、キリストの姿は、人の知る如く、彼にとつて、他の總ての畫よりも大成功を收めた。特にヴェ・ペェ・ボートキンの所有に係るスケッチにある基督の姿は注目すべきものである。此スケッチの寫眞の複寫は、正直にして、善良であつた、不幸な露國畫家アレキサンドル・イヴーノフの尊敬者一同に、眞實な贈り物となるであらう。

（一八六一年）

『父と子』に就いて

私はワイト島（英蘭土沖にある＝譯者）の小都ヴェントノアの海水浴に行つてゐた。それは一八六〇年の八月で、當時、その御陰をもつて、私に對する露國青年等の最厚が破れてしまつた——永久に破れたやうに見える——小說『父と子』の最初の考案が私の頭に浮んだのであつた。私は批評で、一再ならず、私が作品に於て『理想から離れ』或は『理想を導き出す』といふことを聞いたり、讀んだりした。或る者はその爲めに私を褒め、他の者は之に反して非難した。然し無理想ではないが、適當な要素が絕えず混入し、附加せられる或る生きた人間を出發點としてもたなかつたときには、私自分では、一度も『典型を造らう』とはしなかつた。自由な發明の力を多く有たないので、私は常に、自分が足を確立し得べき地面を必要とした。『父と子』も同樣であつた。主要人物バザーロフの基礎には私を驚かした一人物、若い田舍醫者が坐はつてゐる。（彼は一八六〇年近くに死んだ）。此注目すべき人物に於て、後にはニヒリズムの名を得た、殆ど生れ立ての、まだ定かならぬ主義が體現したのであつた。此人が私に與へた印象

は非常に力強いものであつたが、同時に全然明瞭でなかつた。初めの程は、私は彼のことを詳しく知らなかつた、そこで一生懸命に私の周圍のあらゆるものに見、且つ聞いたりした、まるで本能的の感じといふものは過りのない、眞實なものであると證據立て度いとおもつてゞもゐるやうだつた。次の事が私を當惑さした。卽ち私を總ての方面から驚かしたことはそれは我國の創作の一つに於ては影さへも止めぬ稀有の事例であつたのかとおぼえず疑問も起つたのだ。私は幽靈のあとを跟けてゐるのではないか?と思つたのだ。私と一緒に、一人の露國人で、故アーロン・グリゴリエフが當代の『思潮』と稱んだものに對して、非常に微妙な趣味と著しい感じとをもつた男がワイト島に住つてゐた。私は自分の抱いてゐる思想を彼に告げた、すると開いた口も塞がらぬ程驚いたことには次のやうな話を聞かされた——

『さうだ、まつたく君は同樣な典型(タイプ)をもう「ルウヂン」で描いたぢやないかね。』

私は口を緘んだ。何といつていゝだらう?ルウヂンとバザーロフとが同一の典型?

此詞は、數週間は私が考へてゐた自分の著作に關する一切の想念を拋棄せしめた。けれどもバリに歸つてから、私は再びその著作を頭に入れることになつた。骨組が後から私の頭に出來てきた。冬の間に私は初めの數章を書いた、けれども六月にはパリと、田舍とで小說を書き終つ

てゐた。秋にはそれを二三の友人に朗讀して聞かして、或る箇所を訂正し、追加し、一八六二年三月に『父と子』は『ルウスキイ・ヴエストニク』に發表せられた。

私は小說によつて生じた印象の擴がることについて何とも思つてゐない。私がペテルブウルグに歸來するや否や、彼の有名なアブラークシン宮殿炎上の當日『ニヒリスト』なる詞は既に數千の聲に合唱せられ、私がネヴスキイ街で會つた最初の知人のその最初の叫びは『御覽なさい、貴下のニヒリスト達が何をやつてゐるかを!あいつらはペテルブウルグを燒きますよ!』

私はそのとき、性質こそ種々ながら、しかも何れも苦しい印象を經驗した。私は憤怒にまで達した冷かさを、私に近い、多くの同情者に認めた。私は殆ど、接吻せられんばかりに、私に反對側の陣營から、敵から祝賀の詞を受けた。私當惑した、悲しんだ。けれども良心は私に反對しなかつた。私は自分が正直で、曾に先入主となつた信念を有たなかつたのみならず、又同情を以て、私の導き出した典型と關係した。

註——私は自分の日記から次の一節を抽き出す。七月三十日、日曜。三十分以前私はとう〳〵自分の小說を完成した。どんな成功を得るやは知らない。『ソヴレーメンニク』はきつとバザーロフの爲めに私を輕蔑するにちがひない、そして書くうちに始終私は、知らずして彼に惹付けられてゐた××を信じない』

『父と子』に就いて

私は斯る事で頭を曲げるには、餘りに畫家や文學者の職を尊重してゐる。尊重するといふ詞さへ此處では全然適當でない。私はさもなければ單に働くことが出來なかつたのだ、そしてとう〳〵その原因は思ひ當らなかつた、私の批評家達は私の小說を『バムフレット』と名付け、『挑發しられた』『傷けられた』我儘に過ぎないといつた。けれども何の目的を以て私はバムフレットを書かう――私が殆ど會つたことはないけれど、人間として、又作家として私の高く評價するドブロリューボフに對して書くのか？どれだけ私が自己の天賦について、自卑な意見をもつてゐやうとも、私はバムツレット『諷刺文』の作は天分以下のもの、天分に似合しからぬものと思つたし、又思つてゐる。『傷けられた』我儘のことなら、私な言ふ、ドブロリューボフの論文「父と子」及びその前の私の最近作。並に「その前夜」に就いて（けれども彼は眞個興論の代表者と思はれた）といふ、一八六一年に發表せられた此論文は、最も熱烈な――良心に誓つて私は言ふ――最も不當な褒詞に滿たされてゐた。けれども批評家諸君には、私を怪しからぬバムフレット書き Leur siege etait fait として現はす必要があつた、――そしてなほ今年も私は『コスモス』の附錄第一號（九十六頁）に次の事を讀んだ――

『遂に何人にも分つて來た、ツウルゲーニェフ氏の立つた足臺はドブロリューボフの重要な範例

によつて打ち毀された』と。けれどもそのさきの方（九十八頁）では私の『偏屈』に言及せられてゐる、それを批評家達は却て理解して――『あはれみ、宥しさへする』

批評家諸君は概して、著者の心中に何事が起つてゐるか、何が彼の喜悅、悲哀、努力、成功不成功であるかを眞實に想像し得ない。彼等は、例へば、ゴーゴリの記述するその慰めをすら不審としない。その慰めたるや、彼が案出したる人物によつて、自分及びその缺陷を譴責することから成立するのである。彼等は著者といふものは只間違ひなく『その理想を導き出す』こととをするものだと、信じきつてゐる。彼等は、人生の眞實、人心を正確、强烈に再現することがよしやその眞理は著者本來の同情には反するものでありとするも、なほ文學者にとつてはそれが最高の幸福であるといふことを信じ度くないのだ。二三の例をあげてみよう。私は生粹の西歐黨である。私は少しも之を隱したことがない。然しそれにも拘らず、私は特別な滿足を以てバンシンの人物に（『貴族の家』のうちの）西方人のあらゆる滑稽な、平凡な側面をあらはした。私はスラーヴ黨のラヴレッキイをして『あらゆる點に於て發達』せしめたのだつた。何ぜ私はさうしたか――スラーヴ黨の敎へは僞噓、無効と思つてゐる私が？斯麼工合に世の中が出

來てゐると私は信ずるが故である、然し私は何は措いても誠實で、眞正でなければならんのだ。バザーロフの姿を描くに當り、私は彼が同情の圈内から、總て藝術的のものを排斥して、彼に調子の鋭さと、打ち解けた心安さとを附與した――若い人々を怒らせるつもりからでは全然ないのだ！

註――私の「青年に對する惡意」のあることを證據立てた數多くのうち、一人の批評家は、バザーロフが、父のアレクセイを、骨牌遊びで負かすところを引いて云つた。『そんなら單に彼を傷けて、貶しめる爲めか判らない！又、そんなら、骨牌を弄ぶことが出來ない！』。若し私がバザーロフに勝たしたなら、同じ批評家は疑ひもなく嚴かに叫ぶであらう。『事は明白でないか？著者はバザーロフが小學生たることを解せしめんと欲するものだ！』

然るにそれは只私の知つてゐるドクトル・デー及び彼と同じやうな人々を觀察した結果に過ぎないのだ。『此の人生は斯の如く組織せられてゐるのだ。』と、經驗は再び私に告げる――恐らく此經驗は誤りであらう、けれども、私は繰り返す、それは善良だと、私は詭辯を弄すべき何物をも持たない。そこで私は斯の如く彼を描かねばならなかつたのだ。私の箇人的傾向は此處では何の意味もない、けれども私が藝術に對する意見を除外する裏面には、「私が、殆ど總て彼と同

じ信念を有する」と彼等に告ぐるならば、私の讀者の多數はきつと驚くことだらう。けれども私は『父』の方で――ハヴェル・キルサーノフの姿で藝術的眞理に對して罪を犯し、之を汚しさへした私は、彼の缺點をカリカチューアにまで引きずり込み、彼を嗤ひ物にすると、私は言はれる！

註――外國人は、バザーロフの爲めに私に加へられた容赦ない苛責を決してそんなふうに解しない。『父と子』は幾度も獨逸語に飜譯せられた。此處に、リーガに於て發表せられた最近の飜譯を批判して、或る批評家が書いたものがある。（Vossische Zeitung, Donnerstag, D 10 Juni, Jweite Beilage, Seit 3): Es bleibt für unbefangenen……Leser schlechthin unbegreiflich, wie sich gerade die radicale Tugend Russlands über diesen geistigen Vertreter ihrer Richtung (Bazaroff), ihrer Ueberzeugungen und bestrebungen, wie ihn T. zeichnete, in eine Wuth hinein erhitzen konnte, die sie den Dichter gleichsam in die Acht erklären und mit jeder Schmähung überhäufen liess. Man sollte denken, jeder moderne radicale könne nur mit froher Genugthuung in einer so stolzen Gestalt, von solcher Wucht des Charakters, solcher grüdlichen Freiheit von allem Kleinlichen Trivialen, Faulen, Schlaffen und Lügenhaften, sein und seiner Parteigenossen typisches Portrait dargestellt sehn,――

即ち――拘らはれてゐない……讀者には、露國の急進青年黨が、ツゥルゲーニェフが描寫したやうな、彼等が進むべき方向の精神的代表者（バザーロフ）と、彼等の信念と、努力に對して、そんなに眞赤になつて腹を立て、著者をも貶して、あらゆる罵詈を負はせるのはどうしたわけだかちつとも判らない。恐らく總て近代の急進黨は只そんなに敬虔な滿足を以て、斯る力强い性格、斯る小事、細事、腐敗、惰眠嘘僞より根本的に解放せられた倨豪な姿によつてのみ表現し得られると思はれる。）

疑惑の原因、所謂一切の『困惑』は皆、私が創造したバザーロフ型が、ざらにあるところの文學型のものが不斷は通つて行く局面を經て行き得なかつたが故である。得意を感ずる理想化の時代は、オニェーギンやペチョーリンのものでなかつた如く、バザーロフのものともならなかつた。新人バザーロフが現はれたその時、著者は批評家として――客觀的に――彼に關係した。此事は多くの人を狼狽せしめた。誰か知らうぞ！此うちには、誤りではなくとも、恐らくは、正しからぬものがあつたことを。バザーロフ型は、少くとも、彼の前にあつた型と同じだけ理想化に對する權利を有する。私は只今、著者がその創造した人物に對する關係は讀者を狼狽せしめたと言つた。若し著者が假作の性格を以て、現存の人物の如くに思つて、之に對するならば、別言すればその人物の善惡兩面を觀て、それを表現するならば、しかし又、主として、

若しも彼が自分の小兒に對して、あらはな同情、或は冷淡を示さないならば、讀者にとつていつもそんな作を拙いもので、それに對し疑惑を起し、讀者は憤りさへも容易に發するのである。讀者は、既に明かに知られてある道筋を辿らせられるのではなく、却て自分で自分の小徑を開かねばならん、と云つて、もう怒りかけるのである。

『大きに骨折りが要る！』

と、いふ心が知らず〳〵彼に起る。

『本は娯樂の爲めにあつて、頭をいためる爲めにあるのぢやない。そしたら何んにも著者が、慈藤人物は私にどう思へるか、著者自らはその人物をどう思ふかと、語ることは要らんのぢやないか！』

けれども若し著者が此人物に對する關係がなほ一層曖昧な性質のものであるならば、又若し著者自分でも（私が日記に――愛にあらず――と記した「無意志の戀着」が基で、同樣な事がバザーロフと私との關係に於て、起つた如く）、表はされた性格を愛するか否かを知らないならば、それは全然いけないことだ！讀者は動もすれば著者に拵へた同情か乃至拵へた反感を强ゐて只不愉快な『無解決』からのがれ出ようとする。

『父でもなく子でもなく』と、私の本の朗讀のとき、賢い一人の貴婦人が私に言つた、『是が貴下の小說の本當の題ですわ。貴下御自分がニヒリストでいらつしやるわ。』同樣な意見が一層猛烈な勢で『煙』の發表せられたとき述べられた。私は反駁もしない。恐らく此貴婦人は眞實を語つたのだらう。著作の業に於て、人皆は（自らに鑑みれば）その欲するところを爲すのではなく、その能ふところを爲すのである、そしてそれだけが成功するのである。私は、美文の製作は、全體として批評すべきもので、著者の嚴重な良心を要求して、彼が活動の方面を、敢て冷淡にとは言はぬまでも、靜かに觀照せねばならんものと信ずる。けれど私の批評家達の御氣に召すやうな、良心の不足の廉で以て私は罪を負ふことは出來ないと言ふのである。

『父と子』について、手紙其他の書類の頗る珍らしい蒐集を私は有つてゐる。それを對照することは若干の興味がないではない。一方では、私が若い子孫（バザーロフ）を侮辱したと非難して後れ走せに、私の肖像を輕侮嘲笑して燒き棄たといふ知らせがくると同時に、他方には却て此青年バザーロフの前に私が膝を屈することを、立腹して責める者もあつた。『貴下はバザーロフの足下に匂ひつくばつてゐます。』と、一人の者は叫ぶ、『貴下は只彼を誹す

る眞似をしておいでです。眞個は、彼の前に媚び、彼の冷淡な微笑一つを恩惠として、頂戴しようと待構へてゐるのだ。』一人の批評家は私に直接會つて、力强い雄辯で、私をカトコーフと一緒に、離れた室でその汚ない密計を謀らし、若い露國の勢力に對する誹謗を語り合ふ二箇の人物であると言つた。狙ひは美ん事當つた！眞箇のところ此『語り合つた』ことは斯うであつた。カトコーフ君が私からその內容は同君には少しも知らしてない『父と子』の下書を受取つたとき同君は當惑した。

註——カトコーフ君は私が此處に同君の手紙の或る部分を公表することを咎めないやうに願ふ。『若しバザーロフが神に祀り上げられなければ、彼がどうした拍子にか、高い足臺の上へ乘つたか分りません。彼はまつたく周圍のもの總てを壓碎してゐます。總ての物は彼の前では着古しの衣服か、さもなければ腐いものか、未熟であるかするです。斯る印象を求める必要がありましたらうか？小說では著者は、自分が餘り同情してゐない、或る主義の性格化を欲してゐたけれども、恰も調子の撰擇に逡巡して、知らず〳〵主人公に服從したかの如くに思はれます。著者が小說の主人公に對する關係には何うやら拘束せられたところ、何やら拙づいところと、作爲とが感じられます。著者はバザーロフの前に途方に暮れて、彼を愛せず却て、愈々空しく彼を憚つてゐます！』なほカトコーフ氏は、私がオヂノツオーフにバザーロ

フを皮肉らせないことを遺憾とするなどといつた――總てがこんな調子である！『話し合つた者』の一人は他の者の仕事に全然滿足してはゐないやうだ。）

バザーロフ型は『ソヴレーメンニク』誌が殆ど神に祀り上げたものと、カトコーフ氏には見えたのだつた。彼がその雜誌に私の小說を載せることを拒んだにしても、私は別段意外にも思はなかつたであらう。Et voilà comme on écrit l'histoire, 此處に歷史が書けてゐる！と叫ばれもしやう。けれども恁麼小さな事を、恁麼大袈裟な名で叫ぶことは許さるべきものであらうか？

他面、私は自分の本によつて、或る一部の人々を怒らした原因を知つてゐる。それは些細な理由ではない、そして私は、僞りの謙遜をぬきにして、私の頭上に下された非難の一部を是認する。私により放たれた詞『ニヒリスト』は、露國の社會を支配する運動を始めんと、機會と口實とを只待ち設けてゐた人々に利用せられたのだつた。罵詈する爲めに、或は侮辱するが爲めに、此詞を私が用ゐるのではない。只事實――歷史的な――を表はす正確な、適當な表現として之を用ゐるのである。此表現は回復し難い非難――殆ど罪の烙印の――告發の武器に變へられた二三の悲しい出來事が此際に起つて、生れ出でた疑惑に一層多くの勢ひを加へた。（そして危險の擴まつたことを信ずるものゝ如く、我々の『祖國の救濟者』――何ぜかなれば我々のうちにもルウシに對する『祖國の救濟者』が當時出現したのであつたから斯ういふのである――の努力と繁忙とは當然のことであると認めた。我々の未だきまつてゐない輿論が早くも反對の浪を湧かし立てた。）けれども私の名の上に影がさした。私は自らを欺いてはゐない、私は知つてゐる、此影は私の名にそぐはないと。けれども他の人々――その人々の前に私は自分の小さなことを餘りに深く感ずる人々は大きな詞を Perissent nos noms; Pourvu que la chose publique soit sauvée! （我々の名を死せしめよ、さらば公けの物の救はれもやせん！）と吐き得ぬではないからう。彼等を眞似て、私も又蒙つた利益に就いて自ら心を宥めることが出來る。斯う想へば不當な叱責に對する不愉快も何でもない。左樣、眞箇（まつたく）のことだ――價値とは何か？今から二三十年も經つて、一杯の水に立つ風波に過ぎない、此總ての空ら騷ぎを――私の名に關した――影がさしたとか、或は影がさゝなかつたとかいふ――そんなことを誰が記憶するだらうか？

けれども私のことを語るのはもう澤山である。又今は、讀者にとつて恐らく興味の少ない、此斷片的な回想をやめる時でもあらう。只終りに臨み、私は私の同時代の若い人々、私と同じ

く文壇に立つ人々に二三の忠言を贈り度い。私は既に言つたし、又繰り返して言はう、私は自分の狀態について旨日ではないと。私が二十年に亘る『ミューズの神への奉仕』は一般が漸次冷却のたゞ中にあつて終りを告げた——そして私は新たに社會が再び温和になるだらうと思ふ理由を豫見しない。新らしい時代が來て、新らしい人が入用である。文學の老巧者は古武者(ふるつはもの)と同じで——殆どいつも疵がついてゐる—、そして適當な時に自ら退職願を差出し得る者は幸福だ！自分が何の權利をも有たぬ教訓者式の調子をもつて私はそれを言ふのではない。半ば謙遜、半ば焦慮的な注意を以て傾聽してゐる、舊き友人の調子を以て、私の告別の辭を——若しその辭が無用の談議に陷らないならば、此處に述べ度いと思ふ。私はそれを避けることを努めよう。

そこで私の年若い兄弟達に私の呈する詞の一は是である。

Greift nur hinein ins volle Menschenleben! (人間生活の中心に手を入れてそれを掴め)

と、私は我々共同の先生たるゲーテの詞を以て諸君に告げる——

Ein jeder lebt's—nicht veile ist's bekannt, Und wo ihr's packt-da ist's interessant!

(人は各々その中心によつて生きてゐる——それを熟知するものは尠い。君等がそれをとらへ

るところ、そこに興味がある！)

生命の此『掴む』力、此『捕へる』力を生むものは只才能であるが、才能は求めても獲難い由けれども又才能ばかりでは不充分である。君が再現する中心點と、常に連絡を保つことが必要である。正義が入用である。固有の感情との關係に於て動かされぬ正義が必要である、自卽ち觀照と理解の完全な自由が必要である——そして最後に教養が必要である、智識が必要である！

『噫！私共は理解する！貴君等が何處に趨つて行くか知つてゐる！』と、マア澤山な人が此處で叫ぶ『ボツウギーンの理想——文…明！ Prenez mon ours (? 我が熊をとらへよ！)

そんな叫びは私を驚かさない、けれども寸分も退かせない。學問は啻に光明であるのみならず、我國の俚諺によれば、それは又自由である。知識の如く人を解放するものは世に一つもない。又美術や詩の業に於ける程、自由の必要なところは何處にもない。美術の公用語に於てすら、『意志』の自由は無用でない。若し人が内心の我と結ばぬならば、彼を圍繞するものを『掴み』『捕へる』ことが出來やうか？プウシュキンは此事を深く感じた。誰でも一度讀み始めたらシナイ山の十誡の如く暗記しずにはおかれない、彼の十四行詩、不朽の十四行詩に於て、彼が

『父と子』に就いて

斯う言つたことは徒爾でない——

……尊い自由により

お前を自由な知識が導く方へ行け……

斯る自由のないことによつて、わけても、疑ひもなく天才を有せしにも拘らず、スラーヴ黨の一人たりとも、一度も何等生きたものを造らなかつた理由が説明せられる。彼等の一人たりとも自己から——一瞬たりとも——色眼鏡を取り除くことが出來なかつたことが此點から説明される。

（註——スラーヴ黨を勿論無智や、教養の不足であると皆めることは出來なかつた、然し藝術的効果をあげる爲めには、最新式の語で言へば、要素の連合した働きが必要である。スラーヴ黨に缺けた第一の要素は自由であるが、第二の者が教養に乏しければ、第三の者は才能がないといつたふうである）。

けれども、眞の知識の缺乏より起る眞の自由の缺乏した最も悲むべき例はエル・エヌ・トルストーイの最近の作（戰爭と平和）によつて我々に示される。その作は同時に創造的、詩的天分によつて、一八四〇年以來我々の文學に現はれた一切の事績の殆ど先頭に立つものである。否！教養なく最も廣い意味に於ける自由がない——自分自身、自分の豫想した理想や組織、自分の

國家に又自分の歴史についてさへ——眞の藝術家なるものは想像されない。此空氣がなければ呼吸することは出來ない。

所謂文壇經歴の究竟的結果、究竟的評價については、ゲーテの詞が適切である——

Sind's Rosen—nun, sie werden blühn

（是が薔薇ならば、軈て花が咲かう）

認められない天才は世に無い。同樣にその定期の順番よりも後まで生きる功績もない。總ての者は早かれ遲かれ、自分の腰掛の上に仆れる。と、故ビェリンスキイは言つた。若しその適當な時に、君が力に應じたレプタ（小錢）を捧げるならば、それでもう功德である。眞に選ばれたる人々のみが、子孫に對して啻に內容のみならず、併せてその思想及び觀照、人格の形式までも傳へられる——そこまでは大體民衆に何の關係もない——ことは勿論である。凡人は全體のうちに選ばれて者を盡滅し去るか、乃至は大勢に捲き込んでしまふといふ非難を受ける。けれども彼等は選ばれし者の力を增大し、彼の周圍を擴張し、且つ深める——然らばヨリ以上に何を望まうぞ？

ツウルゲーニェフ編

私はペンを摑くに當り、なほ一つ最後の忠告、一つ最後のお願ひが年若い文學者達にある。我友よ。如何なる誹謗が諸君に負はさるゝとも辯明し給ふな、疑義を釋明せんと努め給ふな、『最後の詞』を自ら語り、聞かんとし給ふな。自分の仕事をし給へ、そしたなら總て斯るものは粉碎せられてしまふ。如何なる場合にでも、先づ或る一定期を過ごし給へ。それから私が今までやらうと試みた如く、歴史的觀察點から總て是まであつた罵詈を眺め給へ。次の例を取つて、君等の教訓とし給へ——

私が文壇に立つて以來只一度『事實を詮議』しようと試みたことがある。則ち『ソヴレーメンニク誌』の編輯局がその廣告に於て、讀者に對して、編輯局の方で、私の信じてゐることがダメだと言つて、拒絶したものと、一般の人々に信じさせようとしたとき（然るに私の方で編輯局に斷つたのである——向ふからの願があつたにも拘らず——。私は是について文書の證據をもつてゐる）私は我慢が出來なかつた。で私は事情を公けにした。そして勿論全然それを失敗に終らしたが、青年等はなほさら私に對して立腹した。

『大膽ぢやないか、お前は青年の偶像に對して手を振り上げるとは！お前が正しかつたとて何の要があらうぞ！お前は獄つてをるべき筈だつた！』

此教訓は私にとつては都合のいゝものであつた。そこで私は諸君も之を利用せられんことを望む次第である。

私の願は次の如くである——

我々の國語、我々の美しい露西亞語、此寶、此我々の前人が——そのうちにはプウシュキンの如く輝くものゝある——我々に捧げた財産を保存せよ、此偉大なる力ある武器を尊重せよ！賢い者の手にあつては、それは奇蹟をあらはすものではないか！『哲學的の娯樂』や、『詩的優美』を好まぬ人、實用的なるを愛して、眼中思想表現の法則として、單なる挺子としての話としてより外に言語を見ない人に對してすら私は言ふ——

『少くとも器械師の法則を尊重なさい、總ての物から、あらゆる利益を抽き取りなさい、然し眞個多くのだるい、ごた〳〵して、力なく、とりとめのない、雜誌の空騷ぎを讀過しなさい、然らば讀者は、諸君が此挺子を、本源の支柱と取りかえてゐること、諸君自らが、乳臭い器械師に戻つてしまつたとひとりでに思ふだらう……』

だがもう澤山だ、私の方がお喋舌してしまつた。

一八六八—一六六九年　　バーデン・バーデン。

ツゥルゲーニェフ編

（下編）　書　　翰

ツウルゲーニェフと佛文壇

ツウルゲーニェフが一八四三年、ヴィアルドォ一家と知己となつたとき、彼はやうやく二十五歳で、その名は未だ絶對に露國の文壇に知れてゐなかつた。當時彼が唯一の熱望は狩獵であつた。彼がヴィアルドォ及びその夫人に紹介せられたのは斯る時代であつた。當時既に若干時日を露國に過ごして、佛國の社會に、露國文學の作を紹介してゐたモッシュ・ヴィアルドォは美術並に外國文學に關する該博な論文により既にその名を知られてゐた。マダム・ヴィアルドォは未だ二十二歳の年若で、その内面の情火、深い感情、その美妙な、人の胸をそゝる趣味とを、巧みに綜合する有名な聲樂者であつた。此二人の藝術家はツウルゲーニェフの美感に、强い、永續的な印象を生じた。まつたく彼が後にヴィアルドォ一家に捧げた友情は彼の死に至るまで、則ち四十年が間、藝術的又智理的な同情を保存してゐた。

『外國は彼がその自國で有てなかつたものを彼に與へた』と、ツウルゲーニェフ傳の著者たるマダム・アンドレーフは言ふ、『彼の藝術的天賦の憬がれは、我々には充分に了解もせられず

奬勵もしられなかつたが、彼自身がヴィアルドオ一家に於て作つたところの還境によつて滿足を見出した』と、又彼女がツウルゲーニェフの他の朋友並にヴィアルドオ一家についての話を『彼の文學的活動に對する彼等の同情により、藝術に對する彼等の熱誠により、彼等の意見の自由と誠實とにより、彼等はツウルゲーニェフに對して、その性格と最も調和した、お訛へ向きの雰圍氣を與へた……ヴアルドオ夫婦と彼等の友人とは、ツウルゲーニェフが決して忘れなかつたその祖國の光榮の爲めに、終局までその著作を續けよと、彼に勇氣をつけた』と書いてゐる。　ツウルゲーニェフも彼の「覺書」のうちに書いてゐる『若し私が露國に居たとすれば、私はきつと「獵人日記」を書かなかつたゝらうに』と、然らば彼の私信が疑ひもなく裏切る憂鬱は何處から來てゐるか？それはイヴーノフが言つたとほり彼の精神的孤立に求めなければならんか？疑ひもなくさうではない、是がツウルゲーニェフ自身の說明するところである。

『事の狀態、全社會組織、特に私が屬する社會――地主と農奴との社會が私を自國に留め置き得べき、誘ひをもつたなつたのだ。却て私が周圍に見る一切の事物は私を困惑させ、憤怒と輕蔑の念を以て私の心を滿たした。私は久しく優柔不斷にとゞまつてをられなかつた。私は屈從して、穩しく常軌に嵌り、坦路を辿ることも出來なければ、私に近いもの、私のハートにとつて尊いものを一捻りに裂き取るかしなければならなかつたが、私は後の方を擇んだ』

(Souvenirs libelaires vol. X.of Tourgenoffs Complete Works.)

又露國の氣候、少くとも彼が居る習慣であつた露國の當該地方の氣候が、彼の健康に適しなかつたとも言ふべきであらう。彼がペテルブウルグ乃至モスクワ或はスパスコイエの領地に到着するや否や、彼は痛風か、或は他の病氣に犯されることが屢々であつた。彼が露西亞から出した手紙は此事について滾して來ないことは稀であつた。

けれどもツウルゲーニェフの最も舊い且つ忠義な友人であつた有名な詩人ボロンスキイから數年以前編者が受取つた非常に面白く、且つ詳しい手紙に於て、次の如き文句を見出される―

『ツウルゲーニェフはその所有の富を以て、カフカース、クリミヤ半島、ウルラル山脈、或は西比利亞をさへも歷訪し得ないことはなかつたのだ。然るに彼はその藝術的領域を只モスクヴ、タムボフ、アリョル地方だけに限つた。彼が觀察の區域はどれ程擴ろげられ、どんなに新らしい典型の人物が彼のペンから迸り出たゞらうぞ、若しさうしてゐたことならば！けれども運命はさうさせなかつた。』

次にボロンスキイは、ツウルゲーニェフがその廣大な故國を知ることを妨げられた數多の原

因をあげたが、總てそれは、一つに此露國の著者をヴィアルドオ一家に結び付けた深い友情に要約し得られるのである。

我々はツウルゲーニェフの外國滯在が永引いた理由に關して、最も彼と深い關係をもつ人の意見を知つてゐるのであるからボロンスキイの說明は、それが或る詩的誇張である理由からと、又愛國的な慣りの疑ひを雜へた友情の熱心な表白であることからして、間違つてゐるやうに思はれる。蓋し一國民の心魂に徹底し、その名指されない、多數民衆と協和した脈搏を感ぜんとするには、確にその大帝國を限なく探見すべき必要はないであらうか？其の種族の特殊な印象を與へる邊土に生れて、そこに物心のつくまで住ひ、うら若い感じの影響の下に成人し、注意深く、全生涯を通じて又國民生活の表現を通じて、時に或は近距離より、然し乍らヨリ屢々眼光を清澄透明ならしめる遠距離より、觀察を行ふが如き——總て斯る事は眞に高貴な性質が全國民の喜悅、悲哀を看破し、記述し、一時期全體の風習、國民の性質をヨリ少なき妄斷を以て批判することに對して充分役に立つのである。此性質をツウルゲニェフが大多量に有つてゐたことは誰でも知つてゐる。彼の生れたアリョル洲は斯る處であつた。そこで彼は Ile de France（佛蘭西の島が根）の中心に住ひながら、最も生粹な露國もので、一方、書籍中の最も人間的

なものである『獵人日記』を書くことが出來たのである。又更に時々故國を見舞つて、露國社會生活三十ヶ年の忠實な繪畫を、藝術的にも又歷史的にも秀逸な數卷の小說として書くことが出來たのである。彼はその多色な調色板（パレット）を用ゐて特殊な地方に於ける人種的標本を描くことだけに止め得ることも出來なかつたし、又止めもしなかつた。彼は我々に永久的で、同時に世界的な典型を示すことが出來たし、又示さうとしたのである。然し彼が此故國との分離は、只益益彼をして故國に愛着せしめたのみであつた。そして彼は骨髓までも露國人であつて、露國人で押し通した。彼が佛國の友達は充分に之を知つてゐた。彼の死屍が嘗て彼が愛した、又彼を愛した佛蘭西を將に發せんとするや、エドモンド・アブウは彼について左の如く言つた——

『貴下はその生涯の殆ど三分の一、三十ヶ年を我々のうちに過されましたに。我々の藝術、我々の文學、我々の敎養せられた快樂は、此巴里生活をして、貴下にとつては必要物とならしめました。貴下は嘗に佛蘭西を愛したのみならず、彼女が愛せられんと望んだとほり、優しく彼女を愛しました。彼女は、若し貴下が御望みであつたなら、貴下を養嗣子となしたでありませうれども貴下はいつも露國に忠實でいらつしやいました、そしてさうなさつたことがよかつたのです、何ぜかといへば、自國を絕對に盲目的の痴人のやうにさへも愛しない者は、決して人

間でありませんからです。若し貴下が露國者でなかつたならば、貴下は人々が貴下をお待ちしてゐる〻國で、そんなに廣く知られなかつたでありませう。私は新聞紙上で、世間に最も數多い又最も勢力ある階級――愚人の階級に屬する一人が、貴下について言つたことを讀みました

『私はツウルゲーニェフを知らない。彼は歐洲人だが、私は露國の商人だ」と、

『此可哀さうな愚人は貴下を餘りに密つしりと歐洲のうちにとぢ込めてしまひました――貴下の心は全人類のものです。けれども露國は貴下の愛情の第一位を占めました。總てに先だち總てにまさつて、貴下が奉仕なされたのもこそ彼女（露國）であります』

も一人の佛國文學者ムッシュ●シャル●エドモンはその長い文壇生活中、佛國に於ける最も著名な人々と交際し、自身も亦五十ヶ年、いろ〳〵な智識階級の、正確な觀察者であつたが、その書信に於て編者に斯う書いて寄越し――

『どんな組織になつてゐやうとも、あらゆる巴里社會に於て、ツウルゲーニェフは確に歡迎を受けた。その酬ゐとして、彼は又大に自身を捧げて盡すところがあつた。彼の博大な智恵彼の人を惹き付ける奇智、彼が舉作の爽快、彼の低い、朗らかな聲、彼の人好きのするあらゆる人品が、彼をして直にその人々と親密の一歩を辿らしめ、それが間もなく純眞な友情にまで熟

していつた。人は皆彼と會話することを好み、彼の話を聞くことを樂みとした。』

『性格の觀察者にして、鋭敏な研究者でありながら、表面舉動の靜平を保たうしたけれど、ツウルゲーニェフは、彼が一生涯その中心を形作つた三箇の問題に偶々觸れることがあるときには靜平を失して、激昂するのであつた。問題とは第一が農奴制の廢棄で、之は則ち露國の政府が農奴の自由を宣言した以前のことである。第二には繪畫で、それは此眞面目な素人畫家にはミレ、トロワイヨン及びルッソウ等第一流がところの風景畫家が代表者であつた。第三が音樂で、此處で彼の好みはグリユック、モツアルト、ベートオヴェンに傾き、そしてその人達の高い理想がまさしくマダム●ヴィアルドオに具體化されてゐることを發見した。最後に文學である。それに於ては、彼と同時代に現存した人々を除けは、彼はヂツケンスを取つた。』

『けれども彼が愛情の第一位を占めたものは疑ふべくもなく彼と同輩の露國文學者達であつた。彼は彼等の才能に眞黒になつて、その功績を天にまで褒めあけた。彼は彼等を直ぐ近所にゐる者か、乃至は自分の家族の一員でゞもあるかのやうに矜りとしてゐた。妬みの心は嘗て彼の愛國的なズラーヴ氣質に起つたことがなかつた。彼はブウシュキンを賞讃した、ミキエーイチにのほせあがつた。』

此手紙は全文を引照するといゝのだから、いづれ折りを見てさうすることとしよう。先づ我々は佛蘭西に於けるツウルゲーニェフの生活に關係ある或る程度の眞相を得ようと努めねばならない。

一八四七年、ルイ・ヴィアルドオはツウルゲーニェフの援助を得て、巴里で、ゴーゴリの二三の著作、そのうちには『タラース・ブウリバ』『狂人日記』『外套』『以前の家計』『惡魔王』などを含む飜譯を出版した。露國の大批評家ビェリンスキイは、此飜譯が非常に忠實に原文に叶つて、自由で、美しいスタイルで書かれたものだと、非常に賞讃した。下つて一八五三年ヴィアルドオは矢張りツウルゲーニェフの助力を受けて、プウシュキンの『大尉の娘』を飜譯し、それから後にツウルゲーニェフ自身の作物を譯した。けれども一八四七年ツウルゲーニェフがヴィアルドオ一家と共に伯林に行つたとき、彼はその『獵人日記』中の〔ホーリとカリヌイチ〕の初めを公けにしたばかりで、彼の新な朋友達は、彼の前途の光榮を少しも疑はなくなつた。同年彼はムッシユ・ウイアルドオ及びマダム・ヴィアルドオと巴里で再び一緒になつた。

此時分、ツウルゲーニェフは、後に彼自身が語つたとほり、全く金錢を得るの道をもたなくなつた。といふのは彼の母が、彼の出奔を怒り、身分ある門閥の家に生れながら、文學者になつ

たことを見て、氣色を損じ、彼に仕送りを斷つたからであつた。斯る位置に立つたとき、彼はヴィアルドオ一家から、最も親切な待遇を受けたロゼ・アン・ブリに於ける彼等の居所クウルダヌヴエルは、彼自身の詞を用ふれば、彼の『文學的搖籃』であつた。『此處で』と、彼は有名な露國詩人フエットに書き送つた、『パリに暮していく方法がないものだから、私は冬中老コックが奏てくれるスープ、チキンやオムレッで始終獨り暮らしをした。金を得る必要から『獵人日記』の大半を書いたのも此處に於てゞあつた、又、御存じの如く、私のスパッスコイエの娘が私のところへ來たのも矢張り此處であつた』。娘といふのは、ツウルゲーニェフが未だ若くて、大學生であつた時、彼の母たる農奴の女に生ました娘のことである。此小娘は露國に於ては非常に不幸であつたので、ツウルゲーニェフはマダム・ヴィアルドオに相談をすると、彼女は娘をツウルゲーニェフの手元へ送らせるように忠言して、その教育を監督した。一八五〇年イヴァン・セルゲーヴィチの母の死は、餘儀なく彼を故國に歸らしめた。彼が彼の友人達のところへ再び來たのは一八五五年であつた。彼は歐洲の首都若干を歴訪し、巡てヴィアルドオ一家と共にバーデンに落着いた。然し一八七〇年の戰爭は彼等をして巴里に歸ることを餘儀なからしめた。それからはツウルゲーニェフは一年おき、又は二年おきにペテルブウルかかアリヨル洲の領地

スパッスコイエを訪ふ外は決して、巴里を離れなかつた。

ツウルゲーニェフを佛蘭西の美術界並に文學界に紹介したのはヴィアルドオ夫婦であつた。一八四七年巴里に彼が着く間もなく、彼等の家で、彼は始めてジオルジュ●サンドと會見したサンドはルイ●ヴィアルドオの舊友で、サンドは彼と共に一八四一年『獨立評論』(ルバユ、アンデパダント)を創刊したのである。けれどもツウルゲーニェフはメリメエとも知己になつた。メリメエは當時既に露國文學の傑さう後のことではなかつた。

殆ど同時にツウルゲーニェフはメリメエとも知己になつた。メリメエは當時既に露國文學の傑作數篇の飜譯者として知られてゐた。矢張り同じ頃、彼がシャルルエドモンに對する友誼は親密となつた。彼は最初、エドモンと伯林で會つた、それから再び、彼の同國人マダム、●ヤズイコーフの家で落ち合つた。此家には有名な革命家のバクウニンや追放せられた露國の著者ゲルツエンも屢々出入した。

たつた一度の機會でシャルル●エドモンはツウルゲーニェフを當時佛蘭西の文壇の精華たるセント●ヴーヴ、テオフイル●ゴーチエ、フロオベル、ゴンクウル兄弟、テース、ベルトロオ、ルナン、ガヴルニ、ボオル●ド●サン●ヴイトル、シエレ、シャルル●ブラン、アドリアン●エ

バル、フロマンタン、ブロカ、リボー、ニフイツエル等に紹介した、別言すればマニイ料理店の有名な宴會に集まる總てのお客樣達に紹介したのである。彼は一八五八年以來知り合つてゐたフロオベルを除く外、是等文壇の諸星には始めて會見したのであつた。是にてつい、Journal des Goncours の一八六二年一月二十三日發刊のものは斯う書いてゐる——

『マニイの午餐會——シャルル●エドモンは「貴族の回想錄」「露國ハムレット」の著者で、優雅な才をもつ外國の著者ツウルゲーニェフをつれて來た。彼は大きな、太つた、愛嬌のある人、白髮の大男で、山或は森の親切な妖精のやうに見える。彼は美しく堂々として、非常に立派で彼の眼に天の靑さとか、の人を魅着するやうで、そのうちには子供の聲と黑奴の聲とをまぜた露國の唄聲とをもつてゐる。大喝采の裡に悠然として、彼は一種奇妙な又興味ある方法で、露國文學は小說から戲曲へ、現實主義の潮合にうまく乘つていつたことを說いた。』

ギゾオはその前『無益な人の日記』を讀んで大に驚嘆して、その著者を知り度いと言つてゐた。ラマルティヌもツウルゲーニェフに初めて會見したときのことを熱心に記述してゐる。

此露國の著者は又ジュール●シモン、エドモン●アブウ、グノー、オージエ、マキシム●デユカン、ヴークトル●ユーゴー、ジユトル●ジャナン、フランシスク●サルセー、ジユール●

クラルティ等と交はり、更に後にはフロオベルによつて、ゾラ、ドオデエ等が代表する若い自然主義の人達に紹介せられ、ドオデエ、エドモン・ド・ゴンクウル、フロオベル、ツウルゲーニェフ等、所謂『五人組』をこしらへ、月一回、或る時にはフロオベルの家、或る時にはゴンクウル兄弟の家で會合を催した。終に、ゾラの紹介で、ツウルゲーニェフは Soirèeeede Medan(メダンの夕べ)を共同でやつてゐる若い文學者達、特にギイ・ド・モウパッサンと知り合ひになつた。

我々は佛國文人との不斷の接觸がツウルゲーニュフの才幹に及ぼした影響について聊か述べるところがあつた。彼自身は又自身でそれ〴〵此新自然主義者達に影響を及ぼしたと言ふのも正しい。フロオベルやゾラによつて、佛蘭西に於て一派となりつゝあつた自然主義、否寧ろ寫實主義は、ブウシェキン、ゴーゴリ以後露國文學の特色であつたことはまつたく注目すべき事實である。けれどもなほフロオベルは彼の最大の追囁者たる、ギイ・ド・モウパッサンの指摘したとほりロマンチシズムがまだ盛時にあつて、その影響を受けてゐたとき、生ひ立つたのである。

モウパッサンはそのジオルジュ・サンドに宛てたギユスタヴ・フロオベルの書簡の序に於て言ふ、『此改新者、此公明、正大な精神が、その死後までもロマンチシズムの影響を受けたといふは、此大人物の最も奇異な一側面である。それは自分でも殆ど無自覺に、言つて見れば彼の

天才の逆ひ難き力により、彼のうちに閉ぢ込められた創造力に驅り立てられ、彼は、あのやうな新らしい樣式、箇人的の音調に特色づけられた彼の小說を書いたのである。彼の傾向はオペラの場面のやうに、歌詞の連續で自ら展開してゆく、史詩的主題に傾注していつた』

露國の作者から直に生ひ立つて來たツウルゲーニェフは、その佛國の友人達との話のうちに屢々、眞の人生と、人間の性格とを描寫することに力を入れる爲めに彼等がそのロマンチツクな形式を、その錯雜した狀態や、彼の人爲的な人物などと共に放拋すべき必要があると主張した。新らしい自然主義者達はツウルゲーニェフの創作や彼の意見が彼等に及ぼした影響を決して否定しなかつた。

ツウルゲーニェフが巴里に到着する久しい以前に、ブウシュキンやゴーゴリの作を知り、ゴーゴリ自身とも、一八三七年パリで、マダム・スミルノーヴ(此人はブウシュキンから『露國文學の聖母』と、歌はれ、ヴイアゼムキイ公からも同樣に呼ばれた人で、そのペテルブウルグのサロンは露國當時の著名な文學者達を集めたものである。)のところで會つたメリメエは、或る日ツウルゲーニェフに言つた、『貴下のところでは、詩は先づ眞を狙ひます、そして美はその後から獨りでに來ます、我々の詩人は反對に、全然その逆に働きます。何よりも先に彼等は効果

あるやうに、手ざはりが輕く、輝いてゐることを求めます、そして若しこんなことをしながらも眞理を蹂躙することを避け得れば愈々結構です……プウシュキンに於ては』と、彼はつゞけた『詩の眞の花は本然に開いて、眞理それ自體から發生するやうに見えます。』

彼が生活の晩年に於て『コロムバ』の著者は或る露國貴婦人に手紙（佛蘭西では公表せられてゐない）で、此の意見を變更するのをよしと見た——

『貴女の御願ひと、或る露國の友人達の懇願により、私はドストイエヴスキィの小說『罪と罰』を讀みました。私は之が彼の傑作であると聞きました、然し著者の偉大な才能にも拘らず、私は正直に此本は私には面白くないと申し度いのです。緊張した官能と、誇大な感情とがそのうちにあつて、彼れがその藝術的な大觀察の眞實性を弱めます。彼はプウシュキンよりも寧ろヴィクトル・ユーゴーの成果です。プウシュキンのやうな立派な模範をもつ露國の著者が、ユーゴーの足跡を踏んで、彼に於てそのインスピレーションを見出すことは價値あることでせうか』

* * *

ツウルゲーニェフと佛國文壇との交際は彼がそこにゐなかつた間に面白い通信が澤山ある。相當くその全體が保有されてゐない。或は總ての事件が未だ發見せられてゐない。たとへばツ

ウルゲーニェフがメリメエに書いた手紙の如きは、コムミューンの亂でリュ・ド・リルで『コロムバ』の著者に屬する他の書類と共に燒けてしまつて、永久に失はれたと思はれる。『メリメエとその友人』の著者であつて、メリメエに關する總ての傳記の材料がその人の手を經たムッシュ・オーギュスタン・フイロンは此書信を恢復しようと試みたが、彼が總ての努力は無益となつた。

我々は又、差當り、ツウルゲーニェフが、ヴイクトル・ユーゴーに宛てた手紙を見ようとする希望を棄てなければならん、何ぜかとなればムッシュ・ポール・ムウリスは彼の有名な友人の書類の間にそれを發見することが出來なかつたからである。シャルル・エドモンに宛てた手紙にも同樣なことが起つた。自分では一度もツウルゲーニェフと書信を往復したことのなかつたムッシュ・ジュール・クラルティのお陰で、編者はツウルゲーニェフがシャルル・エドモンへ宛てた二通と、フイリプ・バーティに宛てたもう一通とを此處に揭げることが出來た。

ジュール・シモンは編者の乞ひに答へて、彼は『ツウルゲーニェフをよく知つて、彼を愛した』『我々は手紙の取り遣りをするには餘りにしけ〳〵と往復した、その上に私の紙挾みは容赦なく荒された。』

ツウルゲーニェフ篇

我々はツウルゲーニェフがゾラと往復した手紙を公けにするとき、後程言はんとする悲痛な出來事の爲め、アルフオンス・ドオデエは、その『獵人日記』の著者から受けた手紙を編者に送ることを差控えた。けれどもドオデエ自身の遺言によれば、是等の手紙は『叮嚀で、且つ美しい』ものである。願くば、我々が今公表する手紙の光りによつて、『ル・ナバブ』の著者が、その當時、ツウルゲーニェフに對して永く抱いたやさしい感情を復活し、つまらぬ巷說に耳を傾けざらんことを。

最後にエドモン・ド・ゴンクウルは、餘りにさい〳〵往復したが爲め何等ツウルゲーニェフの興味ある手紙をもつてゐないと、編者に告げて來た。編者は此返事がドオデエのと同じ慣り――同樣、眞實の程度の疑はしい所謂る Souvenirs sur Tourguéneff（ツウルゲーニェフ回想）なるものに惹起された――を隱してをりはしまいかを危むものである。

要するに、其處で我々は現在ツウルゲーニェフがマダム・ヴイアルドオ、ジオルジュ・サンド、セント・ヴーヴ、テオフイル・ゴオチエ、フロオベル及び彼の姪マダム・ド・コムマンヴイル、テーヌ、ルナン、シヤルヽ・エドモン、ゾラ、ギイ・ド・モウパツサン、アンドレ・チユリエ、フイリツプ・バーテイに宛てたものだけを蒐め得たのである。只フロオベルとゾラと

に宛てたものだけは殆ど完全である。けれども總ては、ツウルゲーニェフが始めて文界に出でたに始まり、只彼の死によつて終る大きな傳記的興味に滿ちてゐる。

我々が一つも知らない他の手紙もあるには相違ない。我々は此處には年代的の順序に從ふことにして先づマダム・ヴイアルドオ、フロオベル、それからマダム・コムマンヴイルに宛てた手紙を掲げる。

譯者曰く――以上はツウルゲーニェフ書簡集の編者が、當時の佛文壇の事情を明かにするため、書いたものであるが、譯者はその蒐集のうちから適宜の取捨を加へた。之は紙面の都合上餘儀なき次第である。既述、其他で此譯中に漏れたものは左記の人々の書簡である……

モウパッサン・シエヴレイフ・トマ・クラルテイ・チユーリエ・パーテー・ライナッハ・ガリナンハム

マダム・ヴイアルドオに宛てた手紙

一、

一八五〇年五月十六日

私はクウルタヴネルに居ります。私は白狀します、私は此處で小兒のやうに幸福です。私は立つ前に左樣ならを言つた總ての土地へ、『御機嫌は如何?』と、言ふべきだつたのです。露西亞はその廣大、憂鬱な顏をして、エヂツポスのスフインクスのやうにぢつと動かず、覆面して待つてゐるでせう。彼女は私を早晩嚥み込みます。私は彼女の大きく、萎えた眼眸(まなざし)が、石の眼に特有な、わびしい疑惑を以て、きつと私を瞶てゐるやうに見えます。心配するな、スフインクスよ、私はお前に戻らう、そして若し私がお前の謎を解き得ないならば、お前はゆつくりと私を喰べてしまふことさ!しかし當分はマア私を平和に殘して置いてくれ、私はお前の曠原(ステプピ)へ歸るよ!

今日は美い日です!グノーは終日、一つの想念を求めてブロンヂユローの森を散歩しました

然し女のやうにむら氣なインスピレーションは降臨しませんでした。彼は何物にも逢着しませんでした。少くとも彼はさう私に話しました。彼は明日その復讐を致します。只今は熊の皮の上に横になつて『產褥』に就いてゐます、彼は仕事に就て決斷と粘り氣とをもつてゐます、彼が私を感心させます。今日の不作は彼を非常に不機嫌にしました。彼の嘆息は殆ど人を吹きとばす程で、彼はそれに氣を取られてゐることから、身拔きが出來ません。彼はふさぎ込んで歌劇の爲めに氣がちがつてゐます。私は彼を慰めやうとしました。成功したと存じます。人をそんなふうにさせて置くことは危險です。『七面倒臭い!』と、人は自令の手を組み合はして言ふに終ります。私は微笑して彼の愁訴に耳を傾けてゐました是等の小さな雲は、インスピレーションの息一つ吹けば皆消え失せるものと、彼は存じてゐましたのです、そして彼は創造的天才の小さな嘆きを打ち明けられることに對して聊か得意でありました。

イヴアン・ツウルゲーニェフ

ノウルゲーニェフはグノーとヴイアルドオの一家で知り合ひ、生涯親しく交はつた、けれども兩者の間の手紙は一つも殘存しない。マダム・シャルル・グノーは斯う書いて寄越した

マダムヴイアルドオに宛てた手紙

た—

『グノーは有名な詩人を深く尊敬しました。彼は屢々御互の友人の家で詩人に會ふ機會を得ました、けれども二人の親密な關係は其處までゞ終つたやうに見えます、といふのは彼が近頃擇り分けましたグノーの數多の手紙のうちには、ツウルゲーニェフの署名のあるものは一つもムいませんでした。』

ツウルゲーニェフがマダム・ヴィアルドオに手紙を書いたとき、グノーが思ひ惱んでゐた作曲は、一八五一年四月十六日に出來た彼の最初の歌劇サフォであつた。彼の歌詞は誰も知る如くエミル・オージエの作である。彼の兄弟の死によつて丁度起つた悲みから、グノーは、彼の母と一緒に、彼の友マダム・ヴィアルドオの所有たる或る田舍に隱れた。彼が近頃出した『藝術家の手記』に於て、その著者は語る、彼の最初の作に高名な唱歌者が出演すべしといふ自發的な約束により、既に高名であつたエミール・オージエに歌詞を書かせることも出來たし、オペラの興行に、有利な契約を取結ぶことも出來たのであると。不幸のあつたことを聞くと直ぐに、マダム・ヴィアルドオは當時獨乙に居たが、直に彼に書面を送り、彼女の田舍クウルタヴネルに彼が必要とする平和と閑靜とを求めんことを乞ふ

た。

『私は彼女の忠言に從つた』と、グノーは附け加へる、『我々は、出發した、私と、母とである。場所はマダム・ヴィアルドオの母堂で有名な唱歌者の未亡人マダム・ガルシアがムッシュ・ヴィアルドオの婦妹及び一人の小女(一番上の小兒)で、今はマダム・アンリエットとして秀でた作曲者と一緒に住つてゐる處であつた。彼は又其處で、すぐれた露國の著者で、ヴィアルドオ一家の親しい友人イヴァーン・ツウルゲーニェフと會つた。彼は到々と直ぐに仕事に取り掛つた。

二、

サンクト・ペテルブウルグ、

一八五二年二月二十一日。

私は此手紙を書き始めたときの調子で續けていくことは出來ません。非常に大きな打擊が我々の上に降りました。ゴーゴリはモスクワで亡くなりました——あらゆるものを燒いて——あらゆるものをです即ち——『死せる魂』の第二卷や、完結したもの、始めたばかりの無數のも

マダムヴィアルドオに宛てた手紙

のを――實際あらゆるものを燒いて死んだのです。此損失の程度を貴女がお分りになることは困難でせう。それは殘虐です、それは完全です。此場合、その胸の出血しない露人は貝の一人も厶いません。我々にとつて彼は單なる文學者以上でありました。彼は我々の自身を說明して呉れました。我々にとつて彼はいろ〳〵な意味でピョートル大帝の精神的繼承者でした。こんな詞は悲みの爲め誇張せられ、激成せられたものゝやうに貴女には見えませう、然し貴女は私を御知りにならないのです。貴女は單に彼の著作の至極僅かを御存じです、又よし貴女が彼の全部を御存じになつたところで、彼が我々にとつて何を意味するかを御了解なさることは困難です。それを感ずるには露西亞人にならなければなりません。外人中の最も鋭い心――例せばメリメエの如き――もゴーゴリに於て、單に英國流の滑稽家をしか認めません。彼の歷史的意味は全然彼等を道れてゐます。私は繰り返しますが、我々の損失したところを總て知るには、露西亞人でなければならないと……

三、

サンクト・ペテルブルグ

一八五二年五月一日、(十三日、(譯者、露曆は十三日遲し、以下是に倣ふ)

私の親愛な友人達！

此手紙は諸君の手に、此二三日中に當所を立つて行く人によつて屆けられるでせう、否寧ろその人は之を、國境を越えて後、諸君に送るでせう、といふのは私は或る程度の腹臓なさと、警察の注意を受けないで、諸君に語らうと思ふからです。

私は先づ、一ヶ月以前にペテルブウルグを出發しなかつたことは本意に悖ることを語りませう。私は皇帝の命令によつて、私がゴーゴリに就いて二三行の記事をモスクワの新聞に書いた廉によつて、或る警察官の宅へ拘留せられてゐるのです。是はホンの口實です。その文といふのは、實以てつまらぬものなんです。私は或る時機の間横目で見られてゐたのでした、そして彼等は到來した第一の機會を捕へたのです。私は皇帝のことを恨みますまい。事實、彼には之より外に仕方がなかつた程、わざと誤り傳へてあつたのです。當局者はゴーゴリの死に就いて言はれてゐること總てを押し片附けてしまはうと欲したのでした、そして又彼等は私の文壇的活動を同時に阻止するも遺憾としなかつたのです。

二週間の後に私は田舍へ送られ、そこで追て命令のあるまで留まることになつてをります。こんなことは總て愉快なことでないのは御察しがつきませう。けれど私は大變親切に取扱はれてゐることだけは言はなければなりません。私は善い部屋と本をもち、書くことを許されてゐます。私は始めの二三日の間人に會ふことを許されました、今は餘り澤山人が來たので、禁じられてゐます。不幸は露西亞に於てさへ友達を逃げ去らしません。本當を言へば、實際の不運は甚だ大きくはありません。一八五二年は私の爲めには春がないのです、たゞそれだけです。そのうちで一番情けないのに外國へ行く一切の希望に左樣ならと私に言はせることです。然し私はその件について何等の幻影にも耽つたことがありません。私は貴下方とお別れ申したとき、永久ではないが、暫くは引つかゝるだらうつてことを克く知つてゐました。只今私は只一つの希望をもつてゐます、それは彼等が私に露國の往復を自自に許すことです。私は彼等がそれを私に拒まない事を望みます。皇太子は大變親切な氣質です。私は彼に手紙を書きました。それによつて私は良い結果を得べく希望してゐます。皇帝は御存じの如く他行中です。

彼等は一切の私の書類に封をしました、否寧ろ私の室の戸口〳〵に封をしました。それを十日以後、何の檢めるところもなくして取り除きました。多分何等禁制すべきものが見出せさうもないと知つたのでせう。

私は自分の穴の中で、大に退屈してゐることを白狀せねばなりません。私は此餘儀ない暇を以て、六週間以前に習ひ始めた波蘭語を著作に利用せんと思ひます。私は禁錮をまだ十四日間後に殘してゐます。どんなに私がそれを指折りかぞへてゐるか御察しがつきませう！

私が諸君に送る此音信は甚だ面白からぬものです。私は諸君が、御自身について、もつと善い音信を下さることを望みます、私の健康はいゝ方ですけれど、私は可笑しい程年をとりました。私は誇張なしに、私の白髮を送りませう。それでも私は落膽しません。田舍には獵が私を待ち受けてゐます！そこで私は自分の仕事を試み、それを斃頓しようと試みます。私は露西亞人——地球の表面に於て最も驚くべく、最も奇妙な人民の研究を認めませう。私は一層自由な心を以て私の小說を書きませう、なぜかなればそれは檢閱官の把握を通過すべく運命づけられてゐないからです。私の拘留は恐らく私の勞作をモスクワで發刊すること、を不可能ならしめませう？私はそれが遺憾です、然しどうすることが出來ませう？

私に屢々手紙を下さらんことを御願ひ申します、諸君。此忠難の時、諸君の手紙は私を勇氣づけるに多大の効果がありませう。貴君方に於て、又クウルタヴネルに於ける過ぎし日の記憶

のうちに、私の總ての幸福が存在します。私は自身でくしやくしてくるのが恐さに、そんなことをしばらく思ひますまい。御存じの如く私の心は諸君と一緒にあります、そして以前よりも一層明自に、私は自分の生命は終つた、魅力ある生涯から脱却したといふことが出來ます。私は白パンを皆喰べ盡くしました。殘つた黒パンを喰べる外、何にも持つてをりません、そしてヴィヴィエ（註、コロネットの卽席吹奏者で、その頓才は屢屢ツウルゲーニエフやヴィアルドオを懼ばした）が言つたとほりに天に祈るばかりです。

總て此事は絶對に秘密を守らねばならん事は申上げるまでもありません。ちよつとでもこのことを言ひ、一寸とでも何れかの新聞にのらうものなら、それだけで充分に私の身を破滅さしてしまひます。

左樣なら、親愛な友人達。幸福であれ、そして貴下等の幸福が私のものとなり得るよう私を滿足せしめんことを祈ります。隨分と御機嫌よう。私を忘れないで、私に屢々手紙を下さい。私の心が常に貴下と共にあることを確信して下さい。私は貴下を抱擁します、そして千の祝福を送ります。親愛なクウルタヴネル、私はお前にも會釋する！左樣なら、左樣なら。私に屢々手紙を下さい。私は貴下を再び抱擁します。左樣なら。

イヴアン・ツウルーゲニェフ

彼の Souvenirs literaires のうちに、ツウルゲーニェフはその拘留について書いてゐる。彼がゴーゴリの死について書いた小論文、又それを彼が Souvenirs のなかに載せた該論文は何等煽動的なものを含まなかつた。それは一八五二年、檢閲官の許可を得て、モスクヴ・ガゼットに發表せられた。けれども『獵人日記』の大膽な酬ゐとして、若い著者は口實を捉られた。ツウルゲーニェフは一ヶ月の拘留に處せられた。幸にして警視の娘二人が彼の才能の嘆美者であつたので、彼等はその父の部屋をツウルゲーニェフの留置所に宛てる許可を得た。此强ゐられた閑暇を利用して彼は、カーライルが、このやうな哀れな話は、自分は未だ讀んだことがないと言つた、有名な話『ムウ〳〵』を書いた。我々が丁度引用した手紙の中の勞作とは疑ひもなく此事を指すのである。

此拘留期間の終りに、ツウルゲーニェフは『行政命令により』彼の領地スパッスコイエに送られ、そこを出づることを禁じられた。それは一八五四年の終りまで續いた。『イヴン暴君の死』を書いた詩人、伯爵アレキシス・トルストイと、既述マダム・スミルノーヴの取り做しにより大公爵嗣子の皇帝に訴えにより、ツウルゲーニェフは再び自由を得た。彼はそれを利用して、急いで佛蘭西へ歸つた。

マダム・ヴィアルドオに宛てた手紙

四、

スパッスコイエ、

一八五八年七月七日、(六月二十五日。)

親愛な友人！

私は四日不在の後、丁度今スパッスコイエに歸つて貴下から來た悲報（有名な畫家アーリー・シエッフェの死去)を受けました。私はそんな豫感をもつてゐたことを君に話す勇氣をもちませんでした。彼は強ゐて、それでも萬事が首尾よく終るだらうと信じやうと努めました、そして今彼はもう世に亡いのです。彼は彼自身の爲めに、又彼がその身と共に持ち去つた一切のもの の爲めに痛嘆致します。彼はその喪失が貴下に惹き起した殘酷な悲み、貴下がそれを滿たすのにそんなに困難を發見なさるであらう空虛を深く感じます。彼はそんなに貴下が好きでした。ヴィアルドオ並にルイズ（娘）とも非常に御嘆きでせう。死が我々の階級を打つとき、殘れるその友達は以前より一層親密に結合せねばなりません。私が貴下に呈するのは慰籍ではありません、只親愛の手を貴下に差伸べ、今丁度鼓動を休んだばかりの心臓に常に寄り頼んだ如く、寄り頼めと命ずる熱誠な心臓を貴下に捧げるのです。私はシエッフェと最後に會つたときのこ

とを想はずにはをられません。之がその最後の會見であらうとは、私の思ひも及ばなかつた程、彼は健康でした。彼は『サマリヤの女と共にゐる基督』の畫をゑがくのに多忙でした。私は彼の後ろに腰かけ、永いこと話しました。私は彼に伊多利の旅行を語りました。(それは五月一日でした)。私に彼が是以上愉快に、機嫌のよかつたことを見たことがありません。何と恐ろしい打擊でせう、彼の娘にとつて！私は此悲報に餘り氣を取られて、自身のことを申上げるのを忘れてゐました。私は或る友人等、(スパッスコイエより遠くないヤースナヤ・ポリャーナでトルストイ一家の居所)二人の兄弟、一人の姉妹——此後の人は大變不幸であつた——と共に樂しく三日を過したことを、たつた數言で申しませう。彼女は、その良人たる野人ヘンリイ八世式のいやな男から、餘儀なく引き離されたのでした。彼女は、三人の子供をもち、それは非常に都合よく、特に父が最早彼等と一緒に居なくなつてからは非常によく成長して行きます。父は彼等を非常に嚴酷な規則の下に取扱ひ、スパルタ式に育てゝいくことを樂みながら、彼自らは全然その反對の生活を送りました。そのやうな例はよくあることです。人は斯うして善と惡との兩方の愉快を獲ます——善の愉快を他に代理させて。

二人の兄弟の一人は餘り興味がなく、他は怠惰な、魯鈍な、寧ろ無口な、同時に非常に親切

マダム・ヴィアルドオに宛てた手紙

で、非常に穏しく、趣味でも、又感情でも全く獨特な人です。第三の兄弟は（レェフ・トルストイ伯です。彼については私は、我々の最上な作家の一人であると申しました、貴下はそれをお笑ひでせう、そして貴下にフェット（詩人）を想ひ起させませう。フェットは私の近く此處に住つてゐますから、私は明白彼に會ひます、けれども再びトルストイに立ち戻りませう。彼はまつたく異常な天才です、私はいつか彼の『幼年時代』を飜譯して之をお悟りなさらんことを希望します。之で私は此中入りの括弧を終りにしませう。）第三の兄弟は來る筈であつて來ませんでした。姉妹はまつたく立派な音樂者です。我々はベートオヴェン、モツアルト等を一緒にひきました。

五、

パリ、

一八六五年二月十六日。

私はまたどの劇場にも參りません。獨りで行くのはまつたく面白くありません。私は昨日ルウヴル宮の大廣間 Salle des Etats の各室の開き初めに出席致しました。我々は鯡のやうに詰め

込まれました。三つの物が私を驚かしました——第一には儀式が特に軍隊式なことでした（新たな凱旋門が將に建てられんとすることを誰やらが述べた一條だけが喝采を受けました。）第二、美しい婦人の顏が全然なかつたことです、第三、皇帝の聲の質でした。若し人が聲を類別することが出來るものとすれば、それは瑞西大學教授の話す——植物學か乃至貨幣の教授の聲と申しませう。話そのものは非常に無害で、調子も非常に穏かで——又曖昧なことは言ふ迄もありません。

皇后は非常に醜い寛袍（ガウン）を着ておいでなさいましたが、それでも多く優雅で、高貴なところをそなへておいでなさいます。皇儲は非常に弱々しく、活氣を缺いでをられるやうに見受けます。ナポレオン公は全體の容貌が、テベリウス又はドミニティアヌスに似てゐます。私はビスレォのところで昨日御剖食にあづかる筈でした、けれども私はその名譽を辭退しました。私は彼を少しも好みません、又彼は餘りにひどく私の哀れな露西亞人を輕蔑致します。或る儀式に於ける、公式の制服を着けて、頭布を被つた人物以上に可笑しげなものは貴下の想像に及びますまい。彼等の赤く、黄に、樣々の色をして、黄金光（きんぴか）の頭飾は人をして笑ひ死にせしむると思ふ程、東洋まがひの外觀をもつてゐました。そんな裝飾、勳章、金のさゝべり、冑、羽！噫、

ツウルゲーニェフ編

そしてこんな俗悪なものが人民を感動せしめるかと思ふと！私は何を言つてゐるのですか？それは世界を支配してゐるではありませんか！

ヴアン・ツウルゲーニェフ

ギユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

ツウルゲーニェフとフロオベルとの友情は一八五八年に始まつたことは既に述べた、然し彼等は一八六二年ツウルゲーニェフとマニイ午餐會の定連となるまでは、屢々會ふことはなかつた。此交誼は、兩者のジオルジュ・サンドに對する同等な尊敬——露人にも佛人にも長いこと續いた尊敬で、そのことは後にジオルジュ・サンドに宛てたツウルゲーニェフの書簡の條りで我々は語らう——の爲めに涙の出る程の親密さとなつた。

此二人の親切な性格の間には簡素な善良さの類似と、結合とがあつた。『兩者を結婚さしたはジオルジュ・サンドであつた』と、アルフオンス・ドオデーはそのツウルゲーニェフ研究の中に言つた、そして續けた、『傲慢で、謀反氣があつて、ドン・キホーテ式なフロオベルは、近衛兵の喇叭のやうな聲、その鋭い反語的な警眼と、征服的ノルマン人の歩み振りとをもつて、疑ひもなく此結婚の男性的半面を代表した、けれども誰か、も一人の巨大な、麻の眉毛をもち、大きな、モデルせられぬ顔をもつた人物のうちに、女性的の他の半面を——ツウルゲーニェフが彼の本

に畫いた、餘りに雅やかな、かの神經質で、倦怠した、激情的で、反抗する盲目的な力と同じく、悲壯な、東洋人の如く鈍い露西亞女を發見したであらうか？大きな人間の製造所のどさくさ紛れに、魂が屢々間違つた容器（いれもの）に入る――男子の魂が女の身體に入り、女の魂が一つ眼巨人の身體に入るといふことはまつたく事實である。』

ゴンクウル、ゾラ、モウパッサンは皆ツルゲーニェフとフロオベルとを結び付ける緊密な友情を證明する、けれども人は此相互的愛着の痕を一歩毎に見出すのは、後者がその友達と、特にジオルジュ・サンドとの通信に於てゞある。例せば一八七〇年七月二日附の書信で、彼はノアシの夫人（サンドの事）に書いてやつた――

『貴女とツウルゲーニェフとがなければ、私が最多く胸に抱いてゐる事について自由に語り得る者は只の一人もありません――然るに貴下達は二人ともそんなに遠くお住いですもの！』

更にその後――

『私は昨日、一日ツウルゲーニェフと愉快な日を送りました。私は彼に書き終つた Saint Antoine を百十五頁朗讀して聞かしました。その後私は殆ど Dernières chansons の半分を彼に讀んで聞かしました。彼は何といふ聽者、何たる批評家でせう！彼はその批判の深さ、正確さを

以て私を眩惑しました。若し文藝批評にたづさはる者皆が、彼に聞いたならばそれは何といふいゝ教訓を得るでせう！何物も彼の注意を逃れません。一百行の詩の終りに、彼は只一つの弱い形容詞を心付けてくれます。Saint Antoine については、彼は私に二三のすぐれた忠告を、細部について與へました。』

又マダム・レニエ宛の手紙には――

『マダム・サンドはツウルゲーニェフを除けば、今は私が持つ只一人の文學上の友人です。此二人は多數の友に匹敵する價あることは眞實です！』

此フロオベルのツウルゲーニェフに對する友情は、フロオベルが熟知するが如く、充分に酬られたことは疑ひもない。

『ツウルゲーニェフは』と、彼がマダム・サンドに書いた。『私の古い、あはれな本の最初の二章を非常に氣に入つたやうに見えました、けれども恐らくツウルゲーニェフは偏破な批評をするには餘りによく私を愛してゐます。』

ツウルゲーニェフはフロオベルを最も顯著な佛蘭西文學者、又その Madame Bovary を當世紀中の最大作と思つた。彼の手紙によつて我々は、彼が露語に Legende de Saint Julien l' Hospitalier

ギユスダヴ・フロオベルへ宛てた書簡

及び Herodiade を飜譯したことを知る。彼は此飜譯に多くの愛と注意とを打ち込んで、それは正確と體裁の傑作だと露國では思はれ、彼の出版者はツウルゲーニェフの全集の遺稿中に入れる價値があると思つた程である。普佛戰爭の後、マニイの會合をやゝ怠つたフロオベルとツウルゲーニェフとは、親交の爲め、一層小ぢんまりとした組を拵へることにきめた。アルフオンス・ドオデェは上に引照した文中に、その起原を斯う語る——

『月に一度會合して友人同志善い御馳走を喫べようといふ考へが起つたのは此時分であつた。それは「フロオベル會」又は「叱責しられた著者の會」と稱ばれた。フロオベルはその著 Candidat ゾラは Bouton de Rose, ゴンクウルは Henriette Maréal 私は Arlesienne の失敗の爲め此會に屬した。ジラルダンが我々の仲間入りをしようとした、けれども彼は文學者でないので、我々は彼を排斥した。ツウルゲーニェフは、自分は露西亞に於て叱責せられたと誓つた。又、それは遙か以前に遠くて起つたことであつたから、我々はそれを見付け出しにそこへ行かなかつた。』

此月々の會食だけがフロオベルとツウルゲーニェフとが會見する唯一の機會ではなかつた。何ぜかとなればフロオベルは一八七三年の末にジオルジュ・サンドに宛てゝ書いてゐる。『私は毎日曜にあの露西亞人に會ひます。彼は大によろしい。私は愈々彼を愛します』。

『屢々第一番に到着するのがイヴァン・ツウルゲーニェフで、その人をフロオベルに自分の兄弟の如く抱擁するのであつた』と、ギイ・ド・モウパッサンが語る。彼は臨時に此會へ出席するお客の一人であつた。『フロオベルよりも一層大きな人物であつたけれども、露國の小說家は深い、稀有な愛情を以て此佛人を愛した。才能、哲學、智慧の類似、趣味、生活の仕方、功名心の同じさ、文學的傾向、高い理想主義、熱情主義、學問等の軌一は兩者の接觸點を多からしめ恐らく頭からよりも胸からの方が餘計にくる愉快を、互に相逢ふことによつて、二人に感ぜしめた。』

『ツウルゲーニェフはいつも肱掛椅子に身を埋めて、柔しい、寧ろ弱い、躊躇した聲で、話したが、それでゐて彼が言ふことに特殊な魅力と、興味とを與へた。フロオベルは宗教的な敬虔を以て、その大きな、碧い眼を、瞳をそわ〳〵と動かして、その友の美しい顏に見據ゑ、その朗らかな聲で、上手な喇叭卒が、そのゴール式の口髭の下で吹いてゐるやうな聲で之に答へるのであつた。彼等の會話は稀に世間話に移り、文學や文學史の題目から離れることは少なかつた。』

『ツウルゲーニェフは屢々外國書を澤山持つて來て、ゲーテ、プウシュキン、或はス井ンバ

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

ーンを流暢に口譯した。』

二人の文學者間の友情は終局まで變らなかつた、そしてフロオベルの死後さへも、ツウゲーニェフは、彼が亡き友の姪マダム・コムマンヴィルに宛てた手紙に於て我々が見る如く、なほその記憶を尊んだ。フロオベルやマダム・コムマンヴィルに宛てたツウルゲーニェフの書簡全部を我々が一般に知らせることが出來るのも、全くマダム・コムマンヴィルがその有名な叔父の書信を蒐めて、之を公けにする敬虔な仕事を行つたからである。

一、

添付した二冊の本を進呈します。(「獵人日記」と「露國生活の場面」であらう。是だけが、當時佛蘭西で譯されてあつたのだから)。後に更に二冊ルアンに近い貴宅へ御送りします。私は貴下の親切を利用してはならないのですから。若し貴下が來られて、少くも明月曜日の夕方の一部を私の宅 Rue de Rivoli 210 で御過しなされば結構です。我々に二三の友人が見へる筈です。そのうちにはマダム・ヴィアルドオもをります。その人は貴下と大變お知己になり度がつてゐます。それは貴下にお會ひすることが遲くなつたことに對して、私が感ずる悔いを少くする一つの方法となりませう。それではまづ、どうぞ私の最も温かい敬意を御受け下さい。

イヴアン・ツウルゲーニェフ

土曜日、Rue de Rivoli 210

(此日附のない手紙はツウルゲーニエフがフロオベルに宛て書いた最初のものに違ひない。マダム・コムマンヴイルもさう思ふ。手紙の調子な言ひ、書題といひ此說な證する。)

二、

パリ、一八六三年三月十九日。

親愛な、モッシユ、フロオベル——貴下の手紙は私を赤面させ、同時に悅ばしました、そしてそれは大した言ひ方です。斯る褒詞は人をして思ひ上らしてしまひます、私はその褒詞が當つてゐるように希望 致します。それは兎も角私は貴下を悅ばしたことを嬉しく思ひ、且つ貴下が悅んだと仰被つたことを感謝致します。

私は只今、出版せられたばかりの私の本をお送り致します。私はも一冊出版中ですが、それは出來上り次第にお送り致します。私は貴下に少しも暇を與へませんよ、此通り。

貴下は夏にならない前にパリに來るお考へはありませんか? 私はこんなに往い星めぐりの下

に始まつた我々の交誼の進むことを悅び、又私はその交誼が最も緊密な友情となる以上に善き物を求めようとは致しません。

私が既に貴下に對して感ずるあふるゝ友情を以て、私は貴方へ私の手を差し伸べ、私の最親愛な敬意を受けられんことを貴下に御願ひ致します。

イヴアン・ツウルゲーニェフ

註、書中の二書は朔かに『ルウヂン』『貴族の家』である。

三、

パリ、リュ・ド・リヴォリ、二一〇

一八六三年四月六日（十八日）

私の親愛な友——君の第二の書簡が僕に大きな愉快を——愉快以上のものを與へたかを言ふ必要はないと思ふ。尤も僕が直に君に答へなかつたのは、僕を怒らせた上に、怠惰ならしめた煩はしい些事を澤山しなければならなかつたからである。

是等の小さな煩はしさはなほ嵩んでくる、けれども此上の遲滯は僕の良心を惱ます。僕は矢

張り君が赦してくれると想ふ、そして特に君に感謝して、君と握手する。君の[illegible]詞は僕を犬に幸福ならしめた、又君がさうした幸福を覺つてゐることと僕は信ずる。僕は一箇の藝術家で君のやうに親切氣のある人は、書中言外の意味を讀破して、著者を俟つに寛大であることを僕はよく知つてゐる。けれども意に介し給ふな、君からの[illegible]辭は、黃金の重味をもつてゐる。僕はそれを衿りと感謝とを以て受けた。

我々は夏中に君と會へないだらうか？一時間會つて腹臟なく話す會話は、百通の手紙にもまさるものだ、僕はバーデンに住む爲め一週間後パリを去る、君もそこへ來ないか？其處には山の眞頂に、嘗て何處でも見なかつたやうに樹木がある。場所全體が活力、青春に滿ちてゐる。又同時に詩と、優雅とに滿ちて、人の眼と、人の魂に善い事を澤山する。人が是等巨人の一人の足下に坐るとき、彼は恰もその液汁を少しく吸ふが如くに感ずる。それが又甚だよいので、助けとなる。眞面目に言ふが、ほんとにバーデンに來給へな、ほんの二三日でもいゝから。君はそれから或る有名な色彩を、君の調色板の爲め持ち去るだらう。

僕の出發前、君は只今出版せられだばかりの僕の本を受取るだらう。僕は君を今過食せしめるが、それは君の罪なんだ。

ギユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

千の親切な顧慮を君へ。健康でゐ給へ、働き給へ、そしてバーデーンに來給へ。

君のイヴアン・ツウルゲーニェフ

四、

バーデン、チーアガルテンシトラツセ三、

一八六八年五月二十六日。

我が親愛な友よ？君が僕へ手紙を書いて呉れたことを感謝する。君の手紙は再び友誼を暖め、僕の本が君を悅ばしたことを示したので、非常に僕を喜ばした。現在では批評家でない藝術家は最早一人もない。藝術家的分子は君のうちに非常に濃厚である。そして君はどれ程その藝術家を愛し、賞讃するかを自覺してゐる、然し僕は又批評をどれだけ高く觀てゐるかをも知つてゐる。そして批評家の嘉賞は僕をして非常に幸福ならしめる。僕は、君の友情がそれに加はつてゐることをよく知つてゐる。けれども僕は一人の先生が僕のカンヴスの前に立ち、それを眺め、滿足げに、その頭を頷かしてゐるやうに感ずる。僕は再びいふ、それは僕を幸福ならしめる。

僕が君とパリで會はないのは非常に殘念だつた。僕はパリにたつた三日とまつた、そして僕は今年も君がバーデンに來なかつたことを又遺憾に思ふ。君は自分の小說に縛られたのだ——そ

れは正しい。僕は最大の焦慮を以てそれを待ち受けてゐる。けれども君は友人等がそれによつて儲けるだらうところの二三日の休養を自分に與へることは出來ないか？

僕が君に會つた時以來（セイヌ河の向ふ岸にある旅館だつたかで）僕は君に大に惹き付けられるのを覺えた。君は僕が會つて窃かに心安さを感ずる、又同時に大に感ずる僅かな人の一人、特に佛人のうちで僅かよりない斯る人々の一人である。僕は全一週間も君と話し續けてゐることが出來ゐやうな氣がする。その上我々は同じ方向に溝を堀つてゐる土鼠のやうでもある總てこんなことは、僕が君に會ふのを非常に悅んでゐる證據だ。僕は二週間後には露國へ出發する、けれども其處に永くは滯在しないで、七月の始めまでには戻つてくる、そして僕の娘に會ひにパリへ行く。娘はその時分に多分僕を祖父にしてゐるだらう。若し君がそこにおゐでなら、僕は君のところへ、君を搜し出しに行くことが出來る。それとも君はパリへ來るだらうかどつちにしても僕は君に會はねばならん。その間君の幸運を祈る。君が斯る不撓のエネルギイを以て追究してゐる生きた、人間の眞理は、只吉き日に捕はれる。君は既に彼等をとらへた、又捕へるだらう——彼等の多くを。健康を祈る。君に多くの愛を贈る。

君の誠實な友、イヴアン・ツウルゲーニェフ

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡

五、

バーデン、チーアガルテンシトラツセ三、

火曜日、一八六八年七月二十八日。

我が親愛な友——君が僕のことを思つて下すつて、君の所謂る『順序』(プログラム)を僕に送つて下すつたのは大變親切だ。僕は此處に四日居た。けれども相憎く僕は露西亞から單獨で歸つて來なかつた。僕は美事な痛風を身につけて歸つた。それは最初僕をマコンで襲ひ、次に再びバーデンに到着してから襲つた。此處に僕はあらゆる不可避の辛慘——印度栗の油など——を身につけて長椅子に臥てゐる。けれどもそれは去年よりは烈しくはない、そして僕は次の月の半ば頃まで、入浴の出來る望みがないでもない。そして順序書に從ひ君の巣で君に會ふだらう。

僕は白狀するが、僕は全くそれを知り度いのだ。僕は此處に居る筈のデュ・シャンと會はなかつた。僕は此處へ着いて以來自分の室を出なかつた。兩三日の後には、僕も多分、一寸とした外出も出來るやうになるだらう。達者で、靜に興味を以て働き給へ。それが最善の方法だ。

君の親愛な友人、イヴアン、ツウルゲーニェフ

六、

パリ、リユ・ラフイト、オーテル・バイロン。

火曜日、一八六八年十一月二十四日。

我が親愛なる友人——乾酪は只今到着した。そして僕はそれをバーデンに携えて行くところだ。一口毎に我々はクロワツセーや、僕が此處で過した樂しい日を考へ出すだらう。確に僕は我々の間の大きな同情を自覺してゐる。

若し君の小說(一)が、君が只今此處へ送つて寄越した斷片のやうに强いものでありとすれば、君は傑作を成就しあげるだらう。僕の詞を注意し給へ。

君は僕の送る小さな本(二)を讀んだかどうか知らない。兎に角それを君が書齋の架上に置き給へ。

君の母堂へよろしく、又僕の愛を君自身へ。

君のイ、ツウルゲーニェフ

追白——僕の宛名はカルヽスルーへ郵便局留置。君の寫眞を送つて呉れゝば、大變善い。僕のは此處に入れてある、それは大變——不氣味である。

キユスタヴ・フロオベルへ宛てた書簡